文化財愛護シンボルマーク

http://www.city.tatebayashi.gunma.jp/bunka/

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第51集

平成26年度（2014）

館林市教育委員会

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第51集

当　郷　遺　跡

―市道 3363号線（東部環状線）道路改良工事に伴う発掘調査―

2014

館　　林　　市

館林市教育委員会

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第51集

当　郷　遺　跡

―市道 3363号線（東部環状線）道路改良工事に伴う発掘調査―

２０１４

館　　林　　市
館林市教育委員会

序

今回調査が行われた当郷遺跡は、館林市街地から北東方向、城沼北岸の台地上にあります。

現在、本市には145ヶ所の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）があり、開発が行われる際には関係者の方々のご協力のもと、発掘調査が行われています。当郷遺跡ではこれまで、平成７年度に範囲内の別地点で発掘調査が実施されています。その際には、中世の遺構・遺物が確認されています。

今回の調査は館林市（都市建設部都市計画課）を事業者とする「市道3363号線（東部環状線）道路改良工事」を契機として行われました。この道路は市内当郷町地内を起点とし、同楠町地内を終点とする新設環状道路として計画されたものです。完成によって市街地の渋滞緩和はもとより、東北自動車道館林インターチェンジと近隣の工業・産業団地等とのアクセス機能が強化されることで、地域産業のさらなる振興に大きく寄与することが期待される、重要な路線です。

こうした背景のもと、事業者のご協力により、工事に先立って道路予定地内における今回の埋蔵文化財発掘調査は行われました。その結果､古墳時代（５世紀末頃）から平安時代（９世紀頃）にかけての集落跡が発見されました。その規模は、これまでに市内で確認された同時代の遺跡の中でも特筆すべきものでした。長期間にわたってこの場所を拠点に生活を営んでいた先人たちの様子を知ることが出来たのは、今回の調査の大きな成果と思われます。

群馬県には東日本一の数と規模を誇る古墳や、日本三古碑の１つ「多胡碑（たごひ）」を含む貴重な「上野三碑（こうづけさんぴ）」などがあり、古代東国文化の中心地として繁栄していたことが知られています。今回の調査ではそれらと同時代の住居跡や遺物を多数確認でき、当時の館林の様子を知る手掛かりを得ることができました。また、本調査地点の西方には市指定史跡「山王山古墳（さんのうやまこふん）」（６世紀後半）があります。時期的・地理的に近接する今回の集落跡と山王山古墳にどの様な関係があったのか、それを解き明かすヒントとしても、今回の調査は大きな意味をもっています。今後も古代館林への興味は尽きません。

こうして目の前に現れた先人たちの足跡の一端は、館林がこれまで歩んできた歴史の深さを私たちに改めて教えてくれました。そして今回、調査の成果を歴史の１頁として新たに記録し、本報告書を発刊する運びとなりました。この報告書が現代の私たち、そして後世の人びとが館林の歴史を知るための資料として、また、郷土の歴史・文化を再発見する手掛かりとして活用されれば幸いです。

最後となりましたが、今回の発掘調査および報告書の作成にあたり多大なるご指導、ご協力をいただいた事業者をはじめとする各方面の方がたに厚く感謝を申しあげます。

平成27年1月31日

館林市教育委員会

教育長　橋　本　文　夫

例　　言

1　本書は、館林市（都市建設部都市計画課）が実施する「市道 3363 号線（東部環状線）道路改良工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査として平成 25 年度に実施された「当郷遺跡」の発掘調査報告書である。
2　発掘調査および整理作業、報告書刊行は事業者である館林市（都市建設部都市計画課）から依頼を受け、館林市教育委員会が実施した。
3　当地点の所在地は群馬県館林市楠町（字陣谷 3719 番４及び５）、調査面積は約 450㎡である。
4　調査・整理・報告書作成の期間は次のとおりである。
　①　試掘・確認調査　　平成 25 年 9 月 17 日～平成 25 年 10 月 3 日（館林市教育委員会実施）
　②　記録保存調査　　平成 25 年 11 月 6 日～平成 26 年 1 月 31 日（館林市教育委員会実施）
　③　整理・報告書作成　平成 26 年 6 月 26 日～平成 27 年 1 月 31 日（館林市教育委員会実施）
5　本書において報告する遺跡名は「館林市遺跡台帳」に基づくものである。地点名は平成 25 年度の調査であることから、「平 25 地点」とする。
6　調査組織は次のとおりである。

調査主体	館林市教育委員会			
担 当 課	文化振興課			
調査組織	館林市教育委員会		教育長	橋本　文夫
	〃		教育次長	坂本　敏広
	文化振興課		課長	岡屋　英治
	〃	文化財係	係長	石崎　　治
	〃	〃	係長代理	阿部　弥生
	〃	〃	主任	田沼あゆみ
	〃	〃	主任	田沼　美樹
	〃	〃	主事	奈良　純一
	〃	〃	主事補	金子　陽祐
	〃	市史編さんセンター	主幹兼所長	岡屋　紀子
	〃	〃	主事	宮田　圭祐

7　調査作業員・整理作業員
飯塚　賢治　　池下　寛人　　久保田憲司　　小島　鉄男　　阪口　丈夫　　杉田　和実　　髙野　　愛
舘野　駒三　　寺嶋　美雪　　根岸　良子　　橋本二三夫　　原田　和沙　　久田　　進　　前田　清美
三橋　瑞江（50 音順敬称略）
8　出土遺物、調査記録及び資料は館林市教育委員会で保管し、公開に資する。
9　本書の編集・執筆は、奈良・宮田が中心となり行った。第１章～第３章は奈良、第４章は宮田が執筆した。
10　遺物の実測・観察表及びその他の図版の作成は、奈良、宮田、金子、池下、髙野、根岸、原田、前田、三橋で行った。一部作業は（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団と (有) 毛野考古学研究所に委託した。
11　調査の実施及び本書刊行にあたり、下記の諸氏諸機関のご協力を頂きました。ここに記して厚く感謝を申しあげます。（順不同、敬称略）
群馬県教育委員会事務局文化財保護課　　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
板倉町教育委員会文化財資料館　　館林市史編さん委員会原始古代部会
館林市都市建設部都市計画課・道路河川課　　館林市環境水道部水道課・下水道課
館林市農業委員会　　(有)毛野考古学研究所
関　邦一（(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団）　　宮田　毅　　宮田裕紀枝

凡　　例

1　遺跡周辺図は、館林市都市計画図（S=1/2500）を用いた。なお遺跡位置図中のスクリーントーン［　　］は遺跡地、［　　］は調査地を示している。
2　遺構図内の焼土の範囲は［　　］で示した。
3　土層断面及び出土遺物の注記に用いた色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版土色帖」に従った。一部、調査担当者の目視による判断も含まれる。
4　掲載遺物は基本的に縮尺 1/4 で掲載した。また、赤彩［　　］、黒色土器［　　］、釉薬［　　］、スス［　　］、須恵器断面［　　］を示した。
5　精査の結果欠番となった住居 No. もあるが、資料整理の都合上そのまま使用し、（　）付けで表記した箇所もある。

目　　次

例言・凡例・目次・挿図目次・写真図版目次

第１章　館林市の環境……１
　１．地理的環境……１
　２．歴史的環境……１
第２章　当郷遺跡の立地と概要……２～３
　１．発掘調査に至る経緯……２
　２．当郷遺跡の概要……２
　３．周辺遺跡の概要……２～３
第３章　調査内容と成果……　４～32
　１号住居・２号住居……４
　３号住居・５号住居……５
　６号住居……６
　24号住居・26号住居・８号住居・９号住居　…７
　10号住居Ａ・Ｂ……９
　11号・12号住居……　10～11
　14号住居Ａ・Ｂ……11
　15号住居･27号住居･16号住居Ａ・Ｂ…　13～14
　17号住居群Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｅ・Ｆ・Ｉ　……14
　18号住居……15
　22号住居・19号住居……16
　20号住居……17
　21号住居・23号住居・29号住居・30号住居・
　31号住居・32号住居……18
第４章　まとめ……　33～39
　１．土器編年について……　33～34、39
　２．当郷遺跡と周辺遺跡……　33～39
遺物観察表……　40～43

写真図版・報告書抄録

挿図表目次

第１図　館林市の位置 ……１
第２図　館林市の地形概念図 ……１
第３図　当郷遺跡周辺図 ……２
第４図　当郷遺跡調査区 ……２
第５図　当郷遺跡調査区掘削遺構状況 ……３
第６図　１号住居 ……４
第７図　２号・３号住居 ……４
第８図　５号住居 ……５
第９図　６号・24号・26号住居……６
第10図　８号・９号住居 ……８
第11図　10号住居 ……９
第12図　11号・12号住居 ……10
第13図　14号住居Ａ ……11
第14図　14号Ｂ・15号・27号・28号住居　…12
第15図　16号住居 ……13
第16図　17号・18号・22号住居 ……15
第17図　19号・20号住居 ……16
第18図　21号住居 ……17
第19図　23号・29号・30号・31号・32号住居……19
第20図　1号・2号・5号・6号・24号住居出土遺物…20
第21図　８号住居カマド出土遺物 ……21
第22図　8号住居カマド・8号・11号～13号住居出土遺物…22
第23図　14号住居出土遺物 ……23
第24図　15号住居出土遺物① ……24
第25図　15号住居出土遺物② ……25
第26図　16号・27号住居出土遺物 ……26
第27図　17号住居群出土遺物 ……27
第28図　17号・18号・22号住居出土遺物 ……28
第29図　20号住居出土遺物 ……29
第30図　21号住居出土遺物 ……30
第31図　21号・30号住居出土遺物 ……31
第32図　29号・31号・32号住居・調査区内表採遺物…32
第33図　迅速測図にみる周辺の湿地帯 ……34
第34図　昭和31年館林市内地形図……34
第１表　当郷遺跡出土遺物編年表(坏)①…　35～36
第２表　当郷遺跡出土遺物編年表②　…　37～38
遺物観察表①……40
遺物観察表②……41
遺物観察表③……42
遺物観察表④……43

写 真 図 版

写真図版　１－１ ……重機による掘削
写真図版　１－２ ……調査区全景
写真図版　１－３ ……調査区完掘後全景
写真図版　１－４・５ ……１号住居
写真図版　２－１・２ ……２号住居
写真図版　２－３ ……３号住居
写真図版　２－４ ……５号住居
写真図版　２－５～３－３ …　６・24・26号住居
写真図版　３－４～４－１ ……８号住居
写真図版　４－２～４－５ ……９号住居
写真図版　４－６～５－２ ……　10号住居Ａ・Ｂ
写真図版　５－３～５－５ ……　11・12号住居
写真図版　５－６～５－８ ……　14号住居Ａ
写真図版　６－１～６－５ ……　14号住居Ｂ
写真図版　６－６～７－５ …　15・27・28号住居
写真図版　７－６～８－１ ……　16号住居Ａ
写真図版　８－２～８－８ ……　17号住居群
写真図版　９－１ ……　18号住居
写真図版　９－２・３ ……　22号住居
写真図版　９－４～９－８ ……　20号住居
写真図版　10－１ ……　19・20号住居
写真図版　10－２～10－７ ……　21号住居
写真図版　10－８～11－７ …　29・30・32号住居
写真図版　11－８ ……　31号住居
写真図版　12…１・２・５・６・24・11・12号出土遺物
写真図版　13…８号住居カマド・８号住居出土遺物
写真図版　14……　13・14・27号住居出土遺物
写真図版　15……　15号住居出土遺物
写真図版　16……　15・16号住居出土遺物
写真図版　17……　17号住居群出土遺物
写真図版　18……　20・18・22号住居出土遺物
写真図版　19……　21号住居出土遺物
写真図版　20…29・30・31・32号住居出土遺物・調査区内表採遺物

第１章　館林市の環境

１．地理的環境

第１図　館林市の位置

館林市は群馬県の南東部、関東地方のほぼ中央部に位置する人口約８万人の都市である。市域は東西約 15.5km、南北約 8.0km と東西に長く、総面積は約 60km²である。北は栃木県足利市・佐野市、東は邑楽郡板倉町、南は同明和町に接する。

明和町の南には利根川が東流し、群馬県－埼玉県の県境となっている。県庁所在地の前橋市までは約 50km、東京（台東区浅草）へは約 65km の距離にあり、首都圏との結びつきも強い。

群馬県東南部は「邑楽･館林」地域と呼ばれ､県内では低地に位置している。館林市の標高は、15 m（大島町東部）から 33 m（高根町）である。地形を概観すると、市域中央部には低台地が東西に延び、その周辺に低地が広がっている。

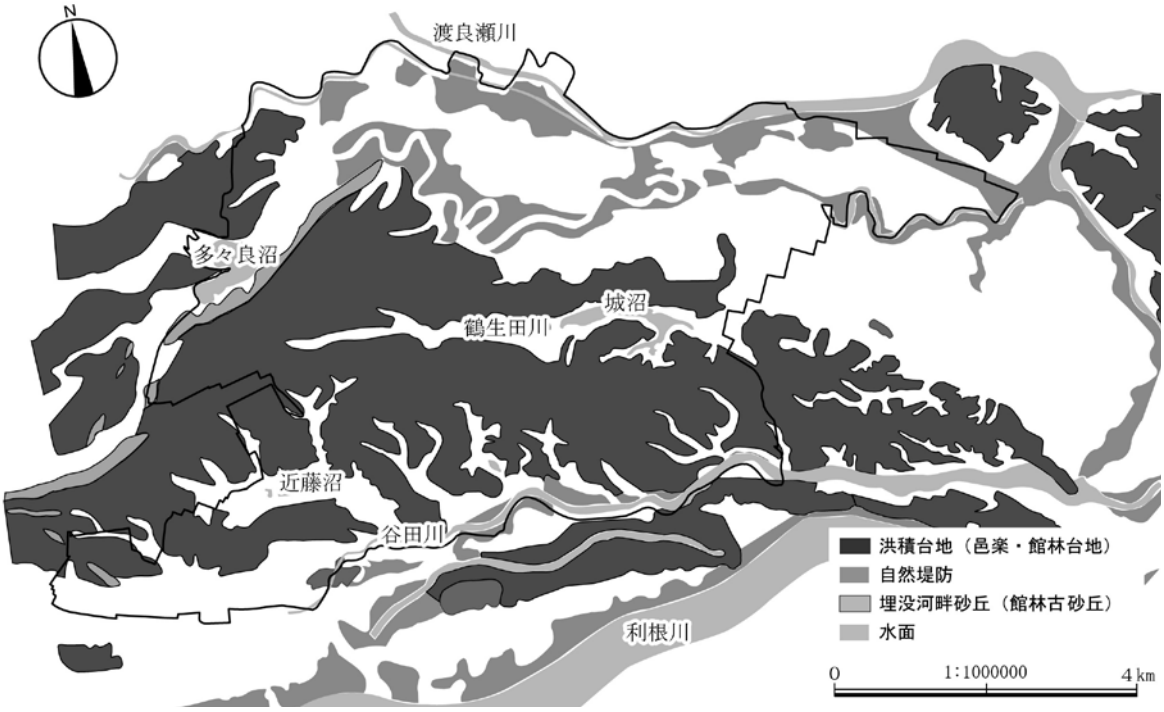
この低台地は「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地で、太田市高林から本市中央部を東西に延び、隣接する板倉町まで続いている。また、大泉町古海から本市高根町に至る台地の北側に沿って、日本最古の砂丘の一つである埋没河畔砂丘が走っており、本市の最高標高点はこの上にある。

低地帯はおもに利根川や渡良瀬川によって形成された沖積低地で、台地北側の低地帯には旧河道、微高地や自然堤防が目立ち、台地南側の低地帯では茂林寺沼など大小の沼や湿地帯が形成されている。こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へ向かって緩く傾斜する傾向が見られ、台地面と低地面の比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。「邑楽・館林台地」は沖積低地から延びる多くの谷地により樹枝状に開析されており、そのなかで最大のものは中央部を東流する鶴生田川及び城沼にかけての谷で、台地を南北に二分している。こうした洪積台地を開析する谷には、茂林寺沼、蛇沼、近藤沼などの池沼を伴うものが多く、本市の景観的な特徴の一つとなっている。

２．歴史的環境

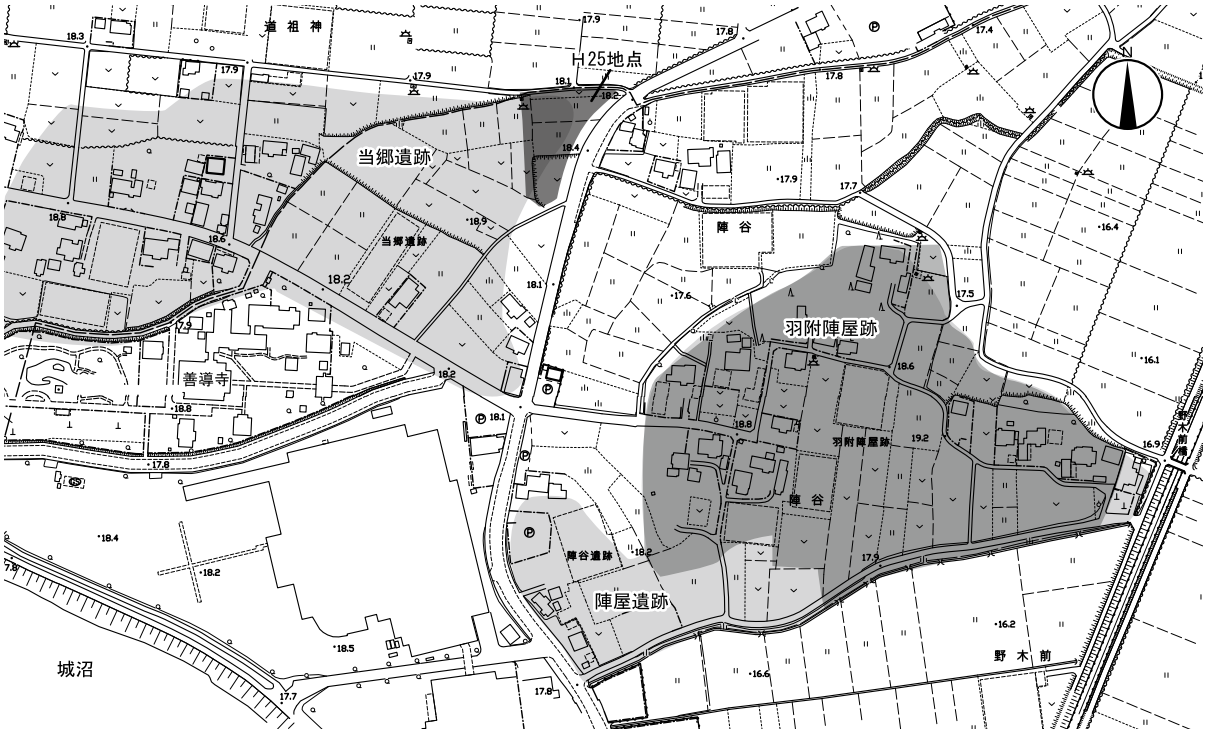
館林市内に所在する遺跡は 145 ヶ所である。昭和 63 年刊行の『館林市の遺跡』（市内遺跡詳細分布調査報告書）には、そのうちの 144 ヶ所について詳細が報告されている

分布調査による採集遺物から大別すると、旧石器時代の遺跡３、縄文時代の遺跡 13（縄文土器のみ採取できた遺跡)、弥生時代の遺跡０（弥生時代の遺物を採取できた遺跡２)、古墳時代～平安時代の遺跡（土師器の出土した遺跡）96（このうち縄文時代の遺物も採取できる遺跡は 23)、古墳は 17（古墳総数 25 基)、中世生産址１、中世城館址 12、近世城館址２である。ただしこの数は、複合した時代の遺物が見られる散布地を、それぞれの中心になると考えられる時代でまとめたものである。



第２図　館林市の地形概念図

第２章　当郷遺跡の立地と概要



第３図　当郷遺跡周辺図（1:5000）

１．発掘調査に至る経緯

当郷遺跡（平 25 地点）は、館林市（都市建設部都市計画課）が実施する「市道 3363 号線（東部環状線）道路改良工事」に伴って発掘調査が実施された。平 25 地点は当郷遺跡の範囲の北東部、台地の端部分に位置する。

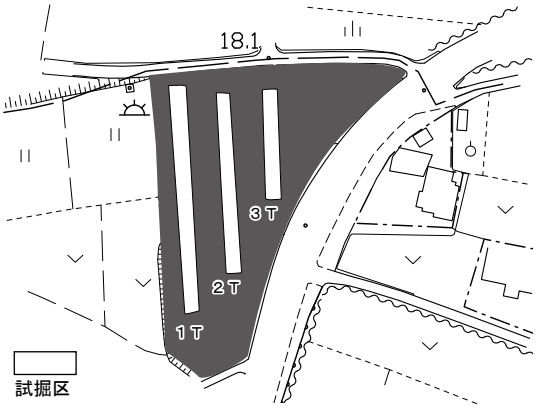
市道 3363 号線（東部環状線）道路改良工事は、館林市当郷町地内を起点とし、同楠町地内を終点とする新設環状道路の整備を目的とした事業であり、平 25 地点はこの東端に位置する。事業の進捗に伴って事業者である館林市より試掘確認調査の依頼が提出され、これに基づいて平成 25 年９月 17 日から同年 10 月３日に掛けて試掘確認調査を実施した。

試掘確認調査では、地点内に３本のトレンチを設置した（第４図）。調査の結果、多数の土器等の遺物の出土と竪穴式住居の存在が確認されたため、本教委は事業者である館林市に対して工事施工前に発掘調査が必要である旨を通知した。試掘確認調査の成果を基に、事業者と保存方法に関する協議を行った結果、記録による保存を行うことで合意に至り、発掘調査が実施された。

２．当郷遺跡の概要

当郷遺跡は館林市街地の北東、東武伊勢崎線館林駅から約４km の場所に在る。地形上では邑楽・館林台地の東部に当り、城沼北岸の舌状台地上に位置する。遺跡の範囲は、館林市当郷町および楠町地内に当る。周囲は農地と宅地が混在する地域で、遺跡の北部は渡良瀬川に連なる低地地帯となっている。遺跡の北部は農地、南部は宅地を主とする利用がなされているが、どちらも平坦化が進み、舌状台地の形状・景観は失われつつある。

本遺跡では、平成７年度に個人住宅建設に伴う発掘調査が行なわれた。その際には調査区域内に南北３本のトレンチを設定し、溝１条、井戸１基が確認された。溝からは完形のカワラケや内耳土器の一部、馬と思われる歯の骨が出土した。遺構・遺物ともに中世のものであった。



第４図　当郷遺跡調査区

３．周辺遺跡の概要

周辺の埋蔵文化財包蔵地としては、当郷遺跡（平 25 地点）の南東部に「陣屋遺跡・羽附陣屋跡」がある。館林市街地の東方、城沼北岸の洪積台地上の高台をその範囲とし、縄文時代から平安時代にかけての集落跡で

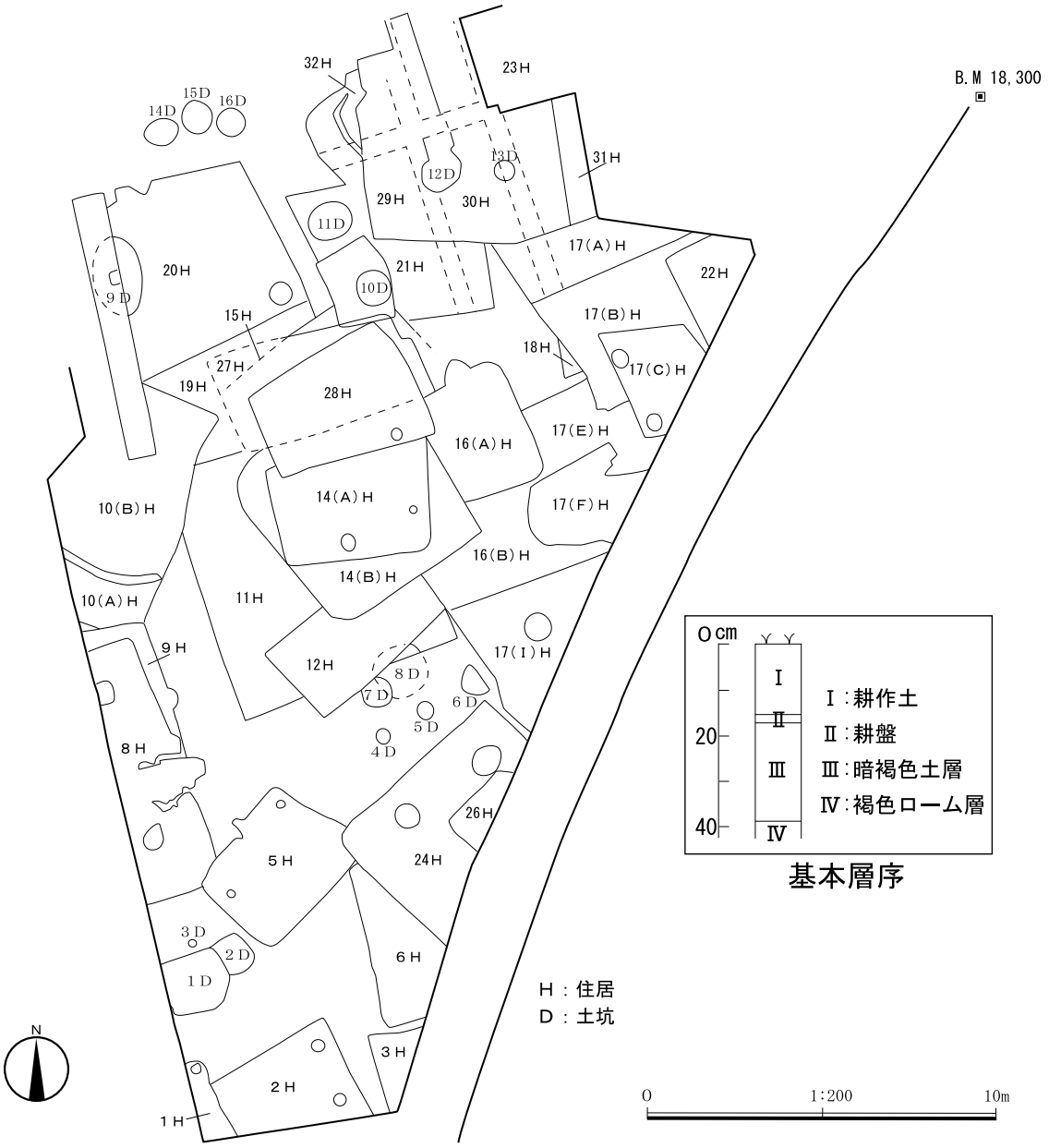
ある陣屋遺跡と、中世の城館跡と推定される羽附陣屋跡が重複して一体となっている。

同遺跡ではこれまでに２度の試掘確認調査が行われている。遺跡範囲北東部で行われた平成３年度の調査では、中世のものと思われる掘立柱建物跡や竪穴式住居跡などの遺構が確認された。また、平成 15 年度に行われた遺跡範囲南西部での調査では､古墳時代（中期）から平安時代と推定される竪穴式住居跡 21 軒が確認され、多数の遺物も出土している。

基本層序

本調査区の基本層序は、第Ⅰ層から第Ⅳ層に分けられる。第Ⅰ層は耕作土層で、厚さ約 15cm である。第Ⅱ層は耕作に伴う耕盤層で、厚さ約２～３cm と薄いが、非常に固く締まっており灰色を呈する。第Ⅲ層は暗褐色土層で、締まり・粘性は弱い。第Ⅰ層～第Ⅲ層までは調査区全面で確認される。第Ⅳ層はいわゆるローム層であり、調査区南では地表下 40cm で確認できるが、北西部では深度 120cm でも明確なローム層は確認できない。第Ⅰ層・第Ⅱ層は人為的堆積層。第Ⅲ層は、河川の氾濫などによる水性堆積層、第Ⅳ層は風成堆積層であると考えられる。

ローム層の落ち込みからも当遺跡の立地が舌状台地上であることがわかり、調査区南西から北西にかけて第Ⅲ層が厚く堆積している。



第５図　当郷遺跡調査区掘削遺構状況（1:200）

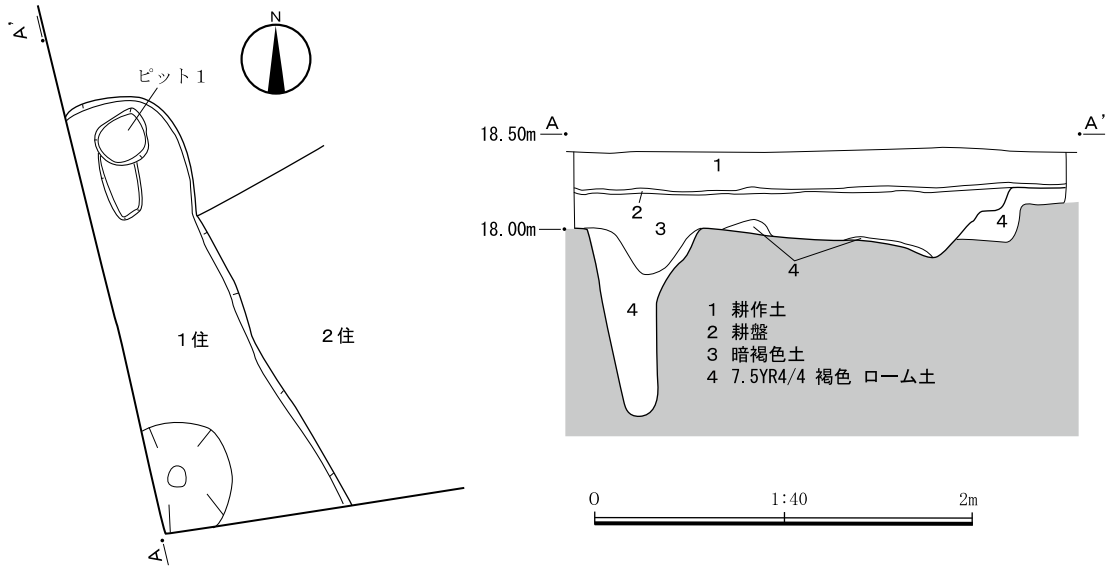
第３章　調査内容と成果

１号住居（第６図）

概要　調査区南西端で確認された。範囲は東西約１ｍ・南北約２ｍである。調査区外南西方向にさらに広がるため、全容は不明である。床面の一部には貼り床が見られた。

遺構　住居跡南西端でピットが確認された。遺物は伴っておらず、詳細・年代は不明である。

遺物　土師器と須恵器の壺の一部、各１点が床面上でまとまって確認された（第 20 図）。



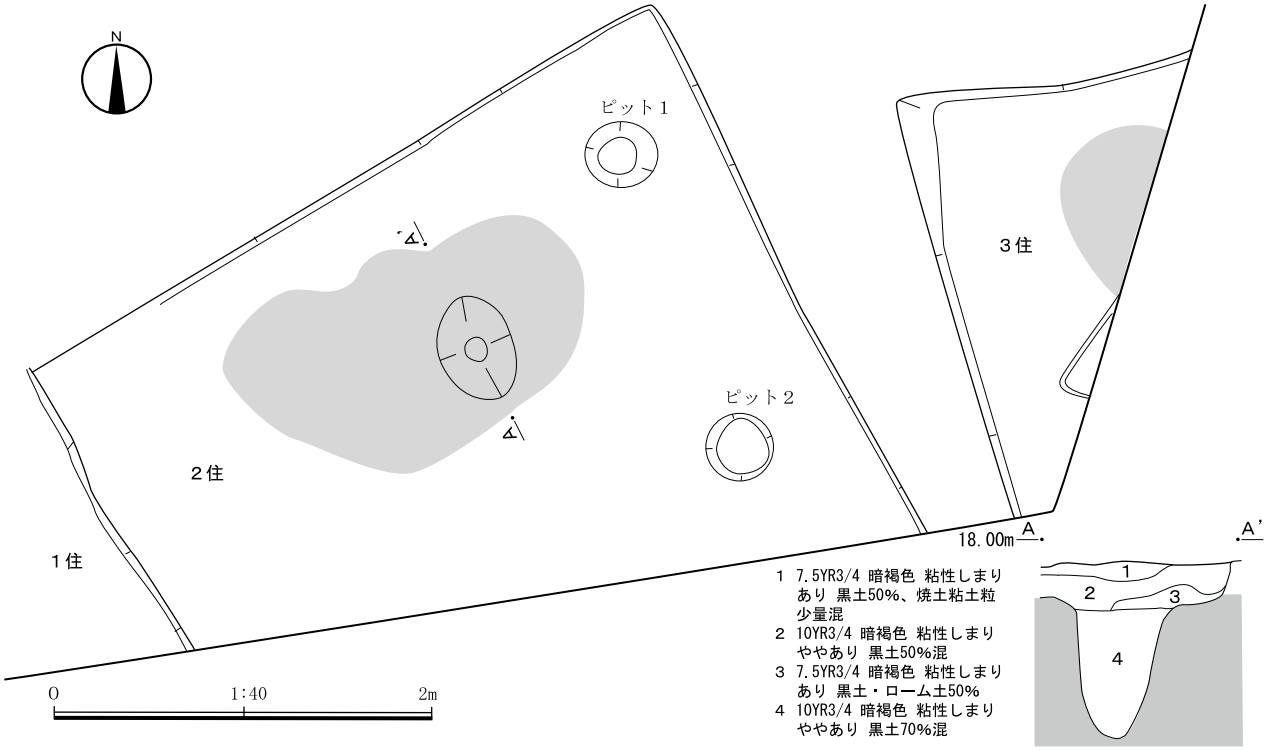
第６図　１号住居（1:40）

２号住居（第７図）

概要　調査区南端中央部で確認された。範囲は東西約 3.7 ｍ・南北約３ｍである。調査区外南側にさらに広がるため、全容は不明である。床面の一部は貼り床である。南西端で１号住居と重複している。

遺構　住居範囲中央部に焼土の広がりが見られた。焼土は床面下まで続く。焼土内には土師器片が含まれていた。

遺物　焼土範囲内より、土師器壺の口縁部分と見られる土器片が出土した。底部が欠損しているが、口径に比して胴部の幅が広く、底部にかけて窄まることから５世紀末から６世紀頃のものと推定される（第 20 図）。



第７図　２号・３号住居（1:40）

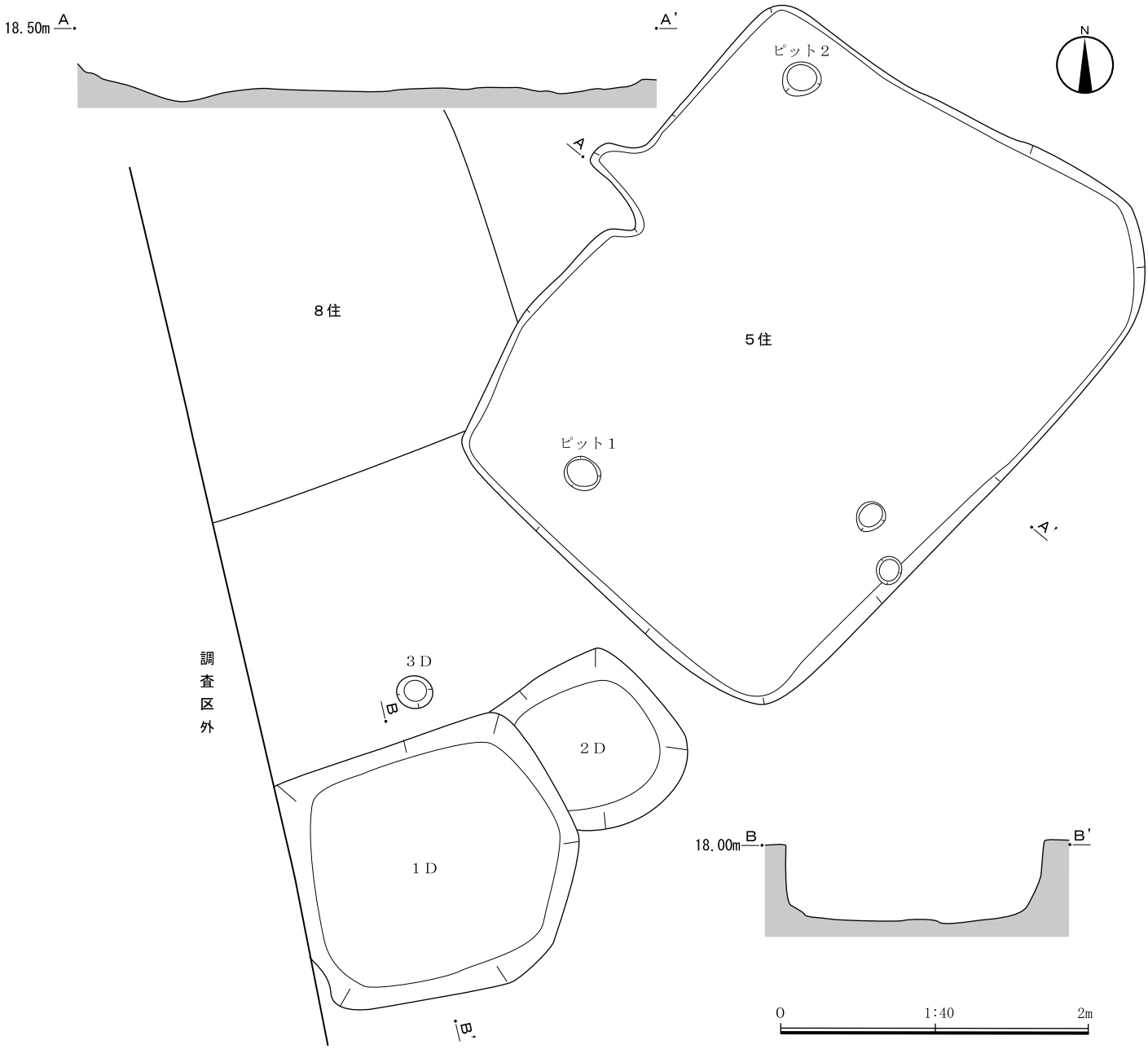
３号住居（第７図）

概要　調査区南東端で確認された。範囲は東西約 0.8 m・南北約２mである。確認できたのは住居北西角部分と思われ、調査区外にさらに広がっており、全容は不明である。北側で６号住居と重複している。
遺構　南東部に焼土が見られたが、範囲は狭く厚みも薄く遺物は見られない。
遺物　確認されていない。

※４号住居　調査当初は住居跡として調査されたが、精査の結果、土坑であると判断された。そのため、４号住居は欠番とする。

５号住居（第８図）

概要　調査区中央南で確認された。東西約 2.8 m・南北約 3.5 mの長方形である。北西側で８号住居と重複しており、その状況から８号住居よりも新しいと判断される。
遺構　北及び、北西側のピット２基以外に柱穴と見られるものは見つからなかった。また、住居から突出した遺構はカマド煙道部と見られるが、これに関連するほかの遺構や遺物はない。
遺物　棒状研磨を施された土師器皿の一部が出土した（第 20 図）。



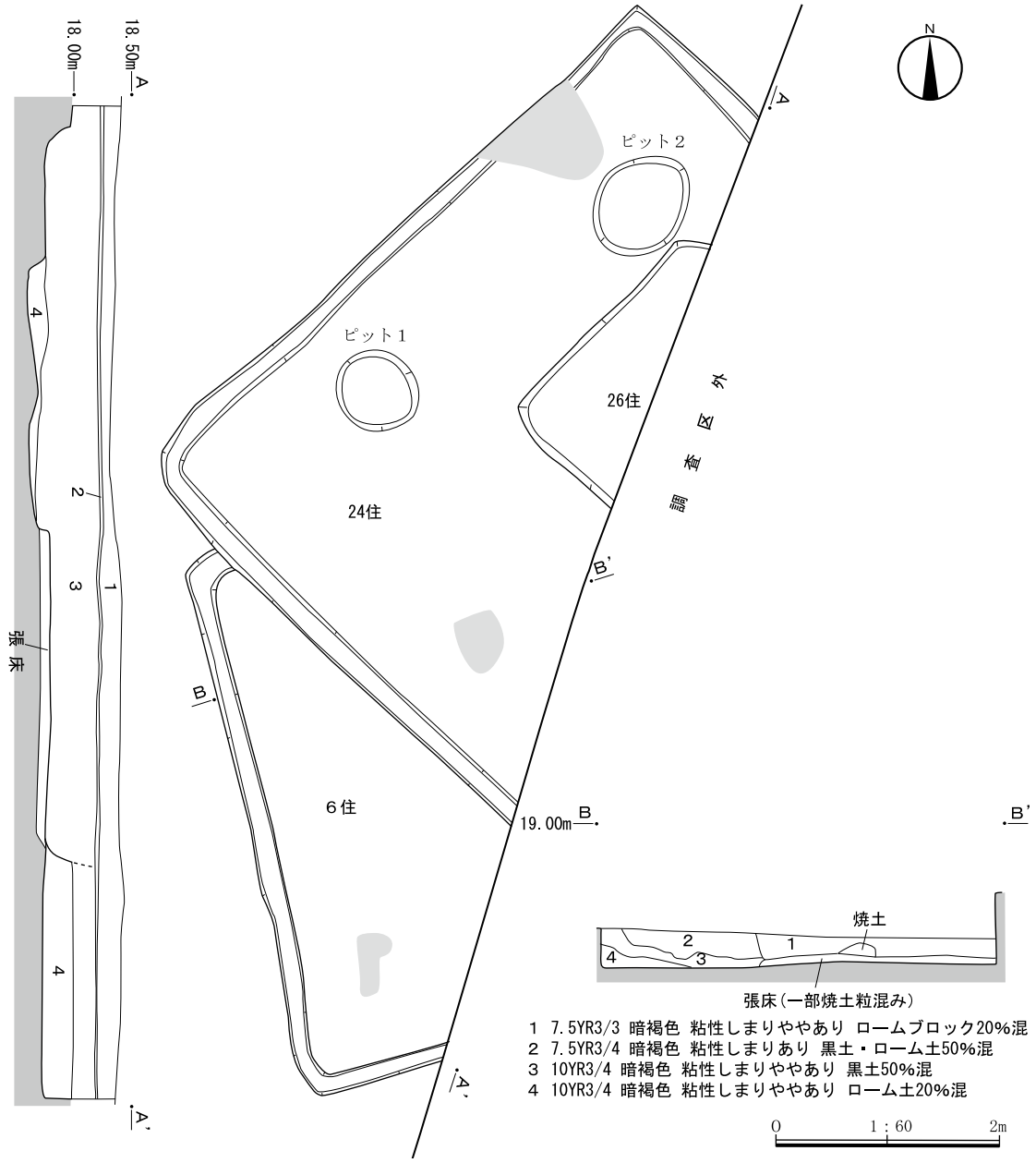
第８図　５号住居（1:40）

６号住居（第９図）

概要　調査区南東端で確認された。24 号住居と重複し、確認できたのは西側部分のみである。重複の状況から 24 号住居より古いものと判断される。確認出来た範囲は南北 4.5 m・東西約 1.8 mであるが、調査区外東に広がっており、全容の解明には至らなかった。

遺構　壁面下部に周溝をもち、床面は貼り床となっている。床面の南西付近に焼土が見られた。焼土は塊状になっており、約 10cm の厚さを持つ。焼土およびその周辺には貼り床が見られないため、直接本住居に関係しない可能性もある。

遺物　土師器高杯のほか、小型甕の一部などが確認された。その破片の一部は 24 号住居の範囲からも見つかっており、埋没過定で両住居に混雑した可能性がある（第 20 図）。



第９図　６号・24 号・26 号住居（1:60）

24 号住居（第９図）

概要　調査区南方東側で確認された。範囲は調査区外東側に広がっており、全容は不明である。南側で６号住居と重複し、範囲内にはさらに 26 号住居がある。これらの重複の状況から、本住居は６号住居より新しく、26 号住居より古いと判断される。北東から南西方向の一辺約 5.7 ｍが確認され、全体の形状は方形と推定される。

遺構　範囲内には２基のピットと２箇所の焼土集中箇所が見られる。北東付近で見られた焼土は壁に接するようにあり､カマドの可能性があるが､住居外に続く煙道部は確認できない｡一部では貼り床が見られた。

遺物　確認できた遺物は、土玉以外は全て土師器であった。第 20 図－９と 10 はいずれも甕又は壺の口縁部の一部である｡10 は口縁の外反が直線的であるのに対して９はやや｢コ｣の字状を呈している｡７は坏で、明確な稜を持ち、口縁は内傾する。８は埦と見られ、平底と直線的な胴部を持ち、胴部表面にはタタキによる調整が見られる。

26 号住居（第９図）

概要　調査区南方東側端で確認された。範囲は調査区外東に広がっているが、方形と推定される。一辺は約２ｍで小規模である。24 号住居の床面を掘り込んで作られている。

遺構　住居範囲内で柱穴などは確認されていない。

遺物　遺物は確認されていない。

８号住居（第 10 図）

概要　調査区中央やや南西付近で確認された。範囲は東西約 2.2 ｍ・南北約 7.4 ｍであったが、さらに調査区西側に広がっているため、全容は明らかでない。

　東側壁中央付近にカマド一基があり、そのほかにも多数の土坑が見られる。全容は明らかでないが、本調査区では比較的大形の住居といえる。外周の一部では周溝も確認されている。一部で９号住居と重複しており、その状態から９号住居よりも新しいと見られる。床面には広範囲に貼り床が見られ、確認できた土師器・須恵器の量も多く、多くの器種が完形で出土した。

遺構　住居範囲内では、土坑が数基確認されている。カマド左の土坑からは土師器等が出土しており、貯蔵穴と考えられる。カマド南の土坑は、１ｍ四方の正方形に床を掘り込み、さらに中央部を楕円形に掘り込んでいる。いわゆる鬼高期の住居跡であり、その位置と形態から貯蔵穴と考えられる。

　南側壁と東側隅で周溝が確認できた。西側についてはさらに調査区外に続いている。カマドは東側壁際中央付近で確認された。

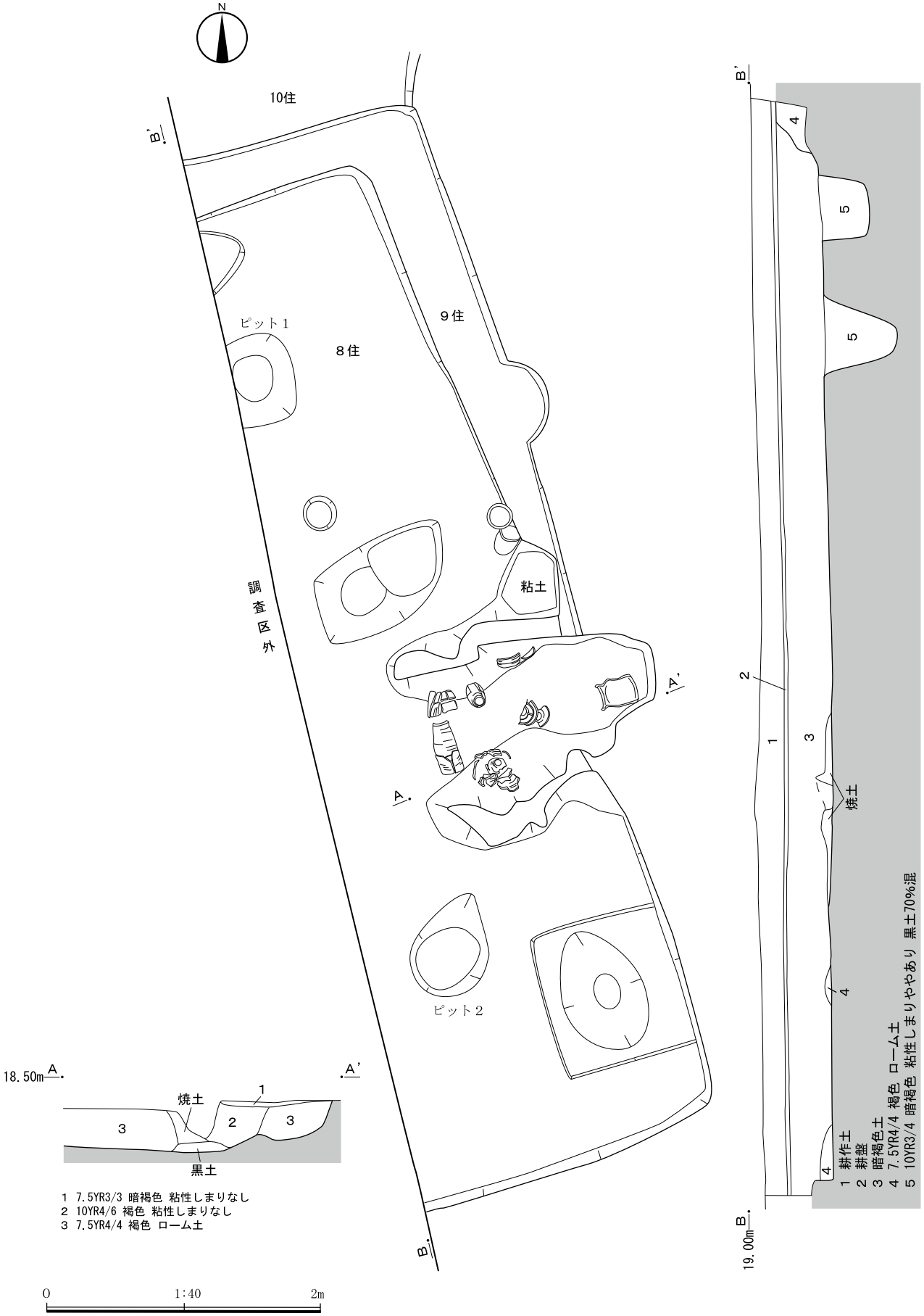
遺物　７世紀後葉以降と見られる土師器もあるが、カマド出土資料を中心に全体的に６世紀前葉から７世紀中葉頃と見られるものが多い。第 21 図 - ２・４はカマドの支脚に転用され、２は４の坏部に覆い被さって出土した。１・３・５・６・７はカマドの袖部、９と第 22 図 - １・２は天井部の構築材として使用されたと考えられる。第 21 図 - ６・７は焚口付近で口縁部下にして対になる形で出土し、８は煙道部に内面を上にした状態で出土した。長胴甕の多くは寸胴な長胴で、７以外は底部に移行するにつれ窄まるものが多い。第 21 図－１の須恵器や５の小形甕などは古手と考えられるが、欠損品であることからカマド補強材への転用と考えられる。

９号住居（第 10 図）

概要　調査区中央西端で住居東側と推定される部分が確認された。８号住居により広範囲が破壊されたと見られる。重複の状況から８号住居より古いのものと判断される。なお、調査区西側にも広がると見られるが、本調査においては全容を確認することはできなかった。

遺構　東中央部では粘土塊と焼土が見られた。住居範囲の端にあたる場所であり、円形で一部が住居外に出ているため、煙道部の可能性がある。カマドとも考えられるが、関連する可能性のある遺物や設備は見られなかった。

遺物　遺物は確認されていない。



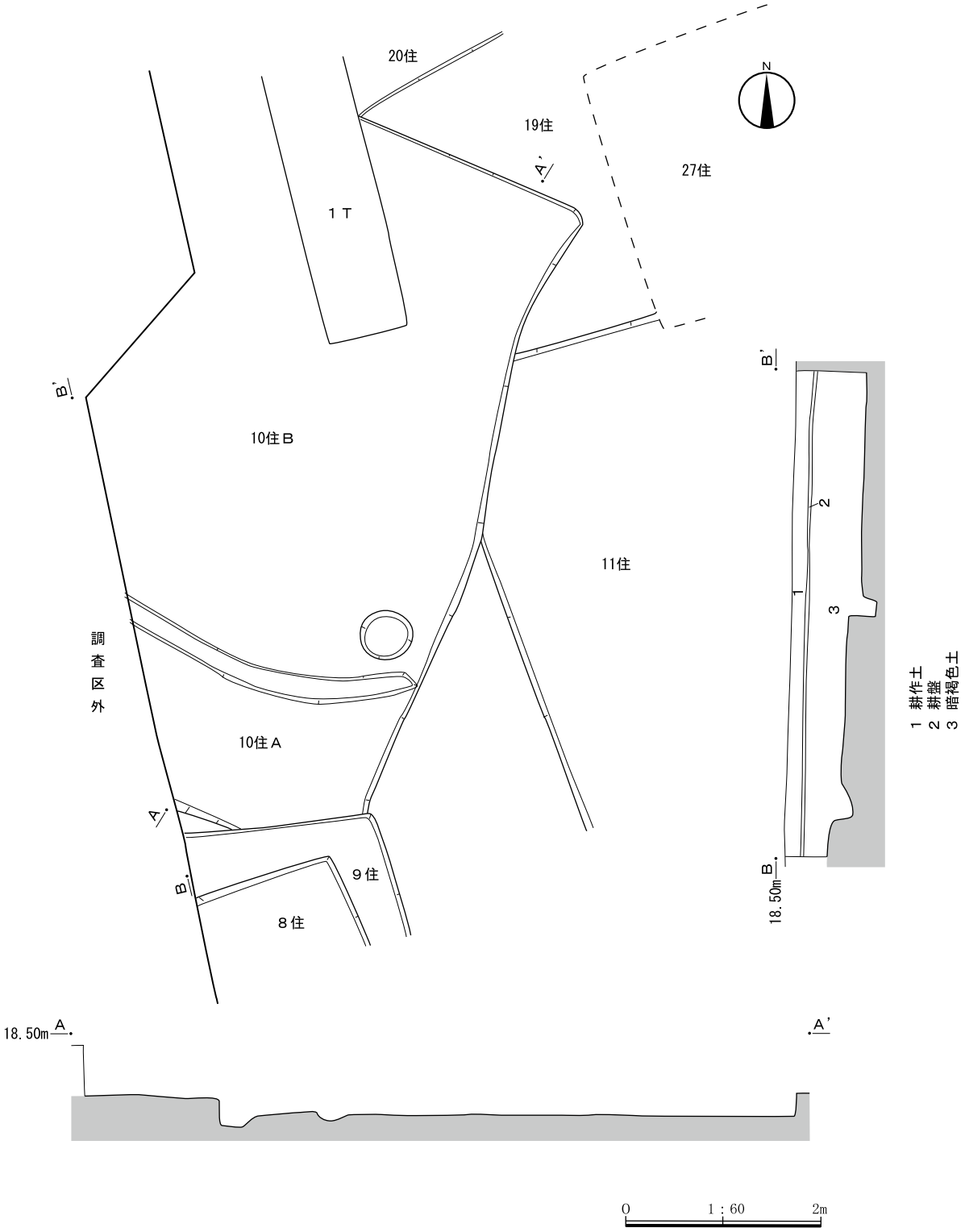
第10図　8号・9号住居（1:40）

10 号住居 A・B（第 11 図）

概要　調査区中央部西側で確認された。範囲は調査区外西側に続いているため、全容の把握には至らなかった。ほかの住居と重複して一部は消失しているが、Aの方が古く、Bの方が新しいと推定される。Aの東側と南側部分で壁の立ち上がりが確認された。

遺構　B住居範囲内で年代、性格が不明な土坑を確認した。時期を推定できる遺物を伴わないため、住居との関係を示す情報を得ることはできなかった。また、B住居の周囲の一部には周溝が見られた。

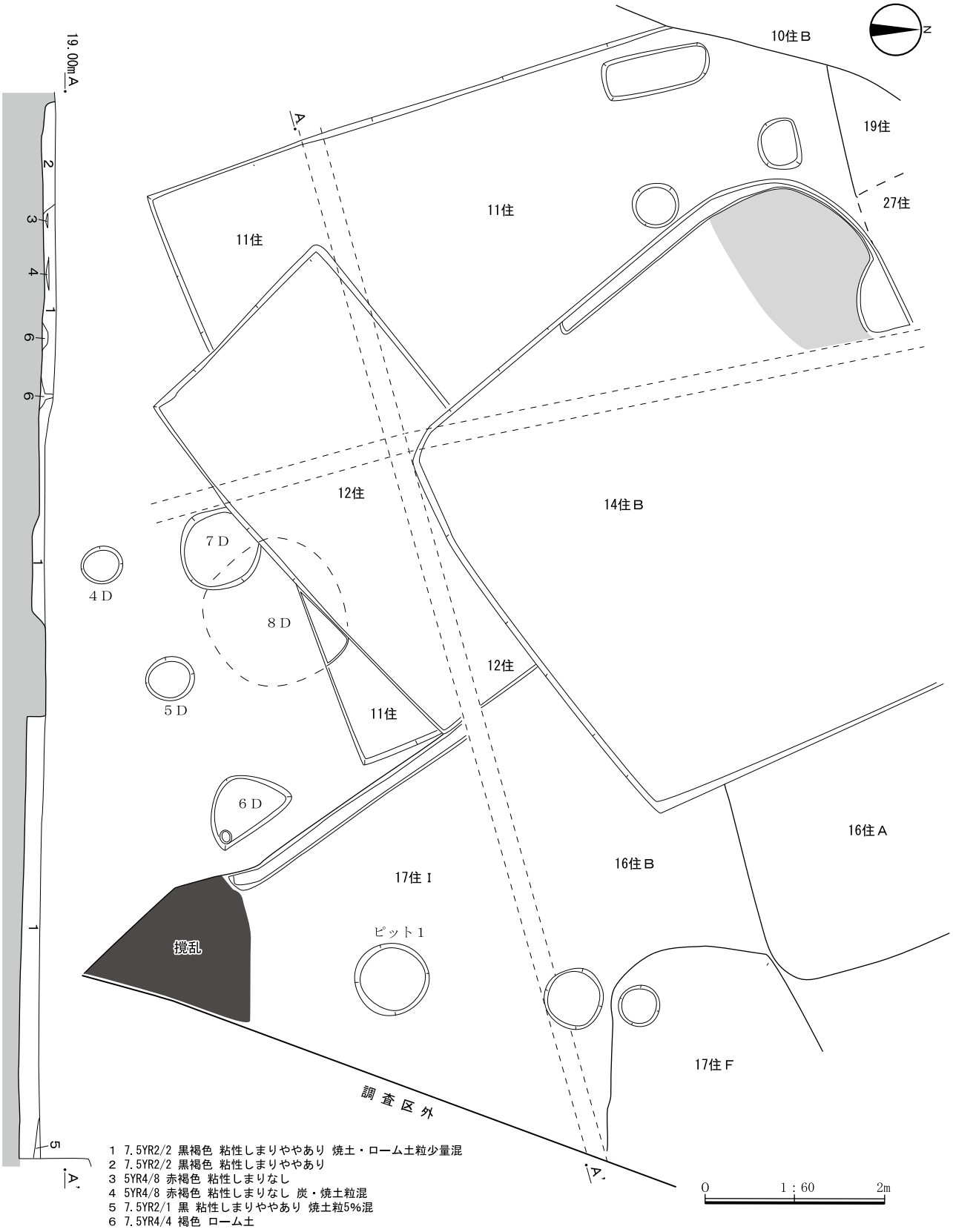
遺物　それぞれ範囲内から少量の土師器片を確認した。



第 11 図　10 号住居（1:60）

11 号・12 号住居（第 12 図）

概要　調査区中央やや南付近で確認された。付近では遺構が密に重複しており、確認されたのはそれぞれの一部のみである。一部は14号住居とも重複する。両者は残存部から11号住居は一辺約７ｍのほぼ正方形、12 号住居は短辺約 2.7 ｍ・長辺約 4.5 ｍの長方形と見られる。重複の状況から、新旧関係は 11 号→ 12 号→ 14 号の順になると推定できる。当初は 13 号住居を独立した住居跡と判断していたが、精査の結果、11 号住居の一部と判断して欠番とした。



第 12 図　11 号・12 号住居（1:60）

遺構　11 号住居範囲内では底面に掘り込みが確認されているが、いずれも性格は不明である。北西側で確認された土坑３基は床面からの掘り込みは浅く、特徴的な遺物は伴わない。南東側で確認された土坑も遺物を伴わないが、床面から深く掘り込まれている。土坑は床面を特に深く掘り込み、その範囲が住居範囲外及び 12 号住居の範囲に及んでいるため、11 号住居に伴うものではないと見られる。

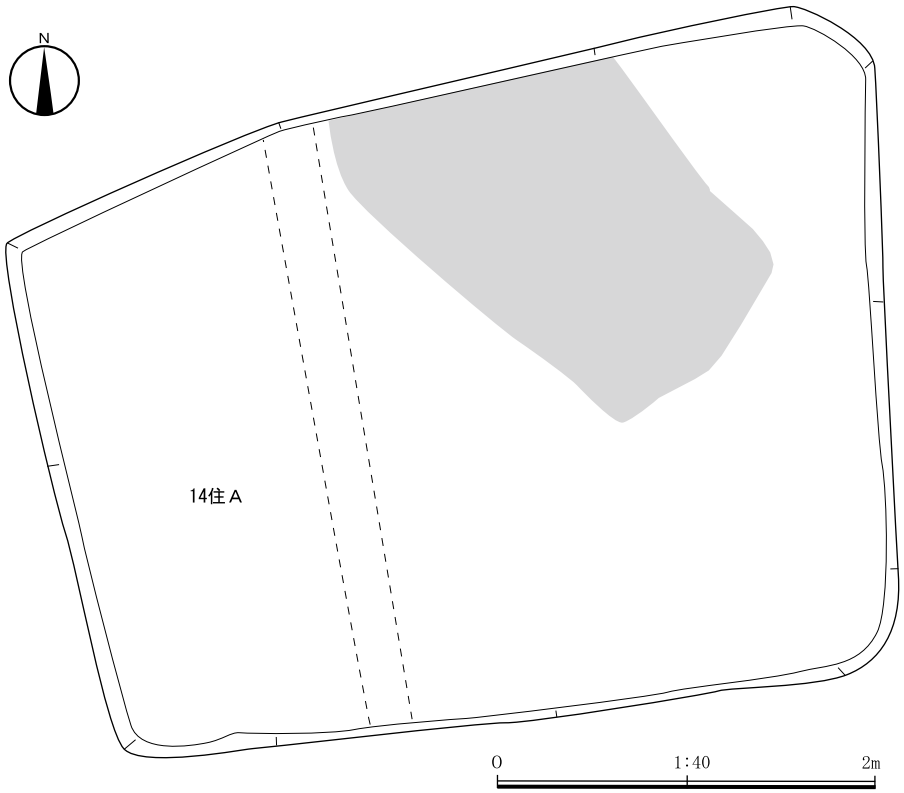
遺物　11 号・12 号住居ともに、出土遺物は６世紀後葉から７世紀後葉と見られる土師器が主である。確認された坏は中部に稜を持ち、口縁は内湾又は直立するものが多い傾向にある。また、甕は口縁に最大径を持ち、直線的な胴部を持つものが多い傾向にある。なお、12 号住居からは黒曜石製の石匙１点が出土している。本住居は形状や出土遺物等から古墳時代の住居と推定される。これらの遺物は、覆土が形成される段階で流れ込み等により混じったものと思われる（第 22 図）。

14 号住居Ａ・Ｂ（第 13・14 図）

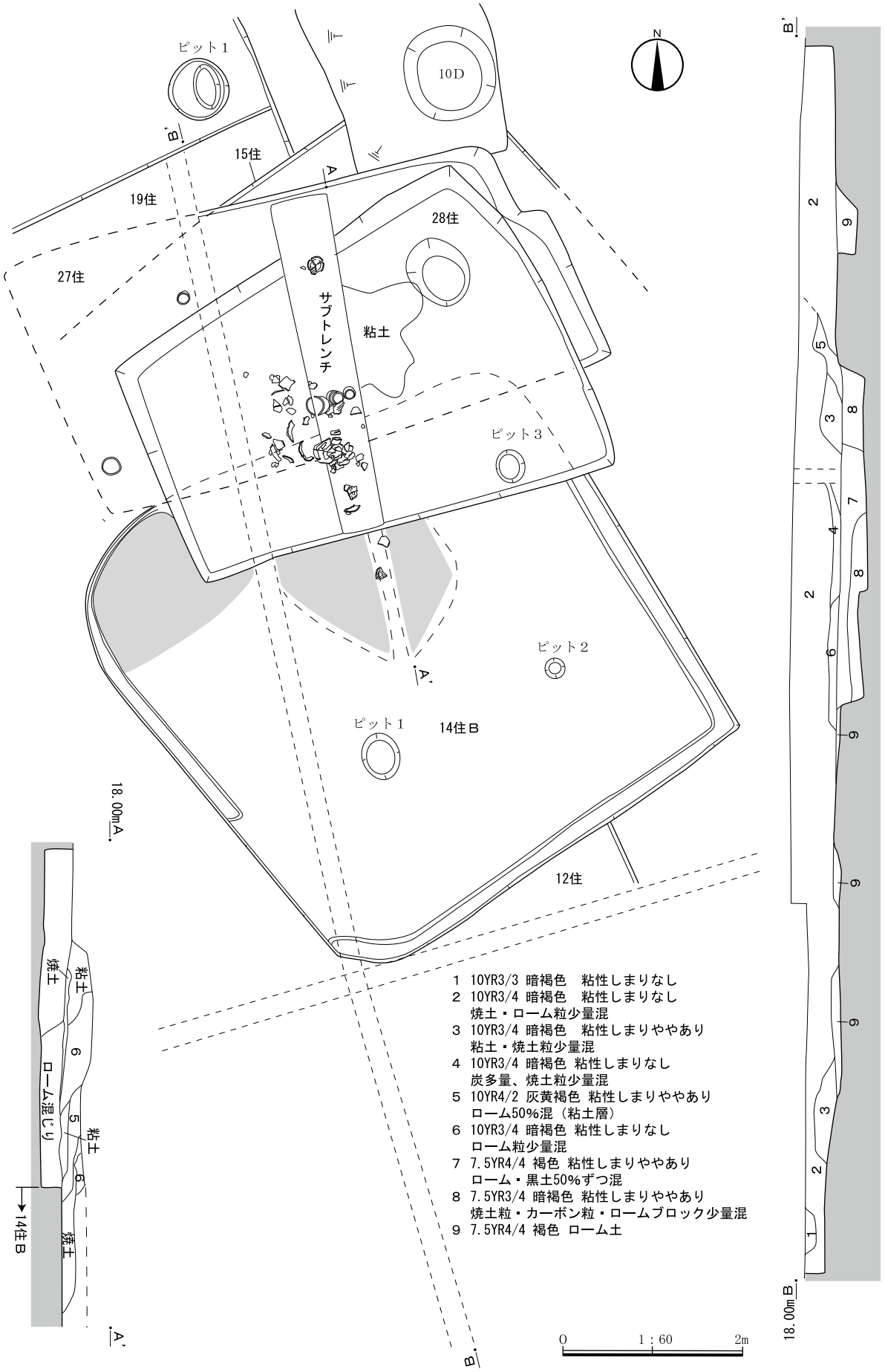
概要　調査区中央で確認された。一部はほかの住居との重複で消失している。残存する遺構から、Ｂは東西約4.9 m・南北約 5.5 mの正方形に近い形状と推定され、ほぼ全周で周溝が確認された。重複の状況から、隣接する 15 号住居より古いものと推定される。

遺構　床面の広い範囲で焼土が確認された。特に北側部分の堆積が顕著であった。また、遺物の中には炭化した植物片や種が確認できた。植物片はイネ科、種はバラ科のものである。本住居では強い熱の影響を受けた痕跡があるが、煮炊きの設備は確認できていない。一つの可能性として、住居北側で何らかの理由で出火し、住居に大きな被害を与え、屋根材（イネ科植物）や貯蔵食料（バラ科植物）を炭化させたことが推定できる。

遺物　遺物は土師器・須恵器、臼玉・土錘等の土製品、有機炭化物など、様々なものが確認された。第 23 図－２は須恵器模倣坏蓋である。稜を持ち、口縁は内湾し、ナデが施される。形状から、土師器・須恵器は７世紀頃を中心とするものが多い。



第 13 図　14 号住居Ａ（1:40）



第 14 図　14 号B・15 号・27 号・28 号住居（1:60）

15 号住居（第 14 図）

概要　調査区中央部で確認された。確認できた範囲は台形状に残存した一部である。東西の長さは約 4.6 m、形状は方形と推定される。周辺は住居跡が密に重複し、隣接する 14 号・27 号住居との前後関係を明確にすることはできなかった。

遺構　確認範囲の中央部に粘土塊が見られ、周辺に遺物が集中した。

遺物　完形の須恵器が複数出土している。第 25 図－１は土師器曾瓦である。底部の形状は平底、胴部は直線的に立ち上がり、口縁には横方向にナデ、外面にはヘラケズリの調整が縦方向に見られる。口縁は弱く外反する。遺物の年代は、６世紀中葉から後葉頃とみられるものが多い。（第 24・25 図）

27 号住居（第 14 図）

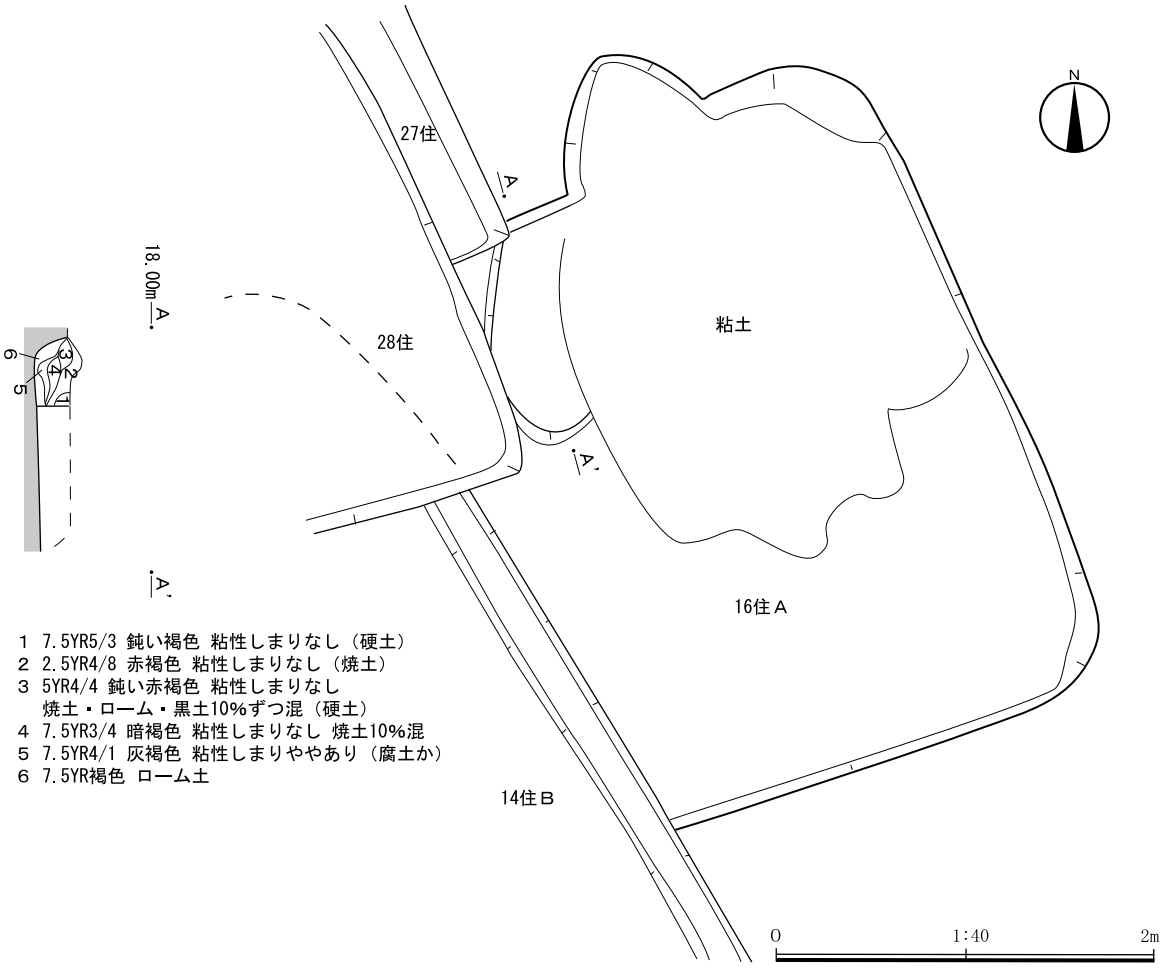
概要　調査区中央付近で確認された。15 号住居と広範囲で重複する。確認できたのは一部のみで、大部分は重複により破壊されている。残存部分から従前の形状が方形と推定される。

遺構　住居に伴うものは確認できていない。

遺物　第 26 図－６は高杯の杯部である。脚部欠損。内面に棒状研磨、外面にヘラケズリを施す。ほかにもいわゆる国分式の杯も出土した。

16 号住居Ａ・Ｂ（第 15 図）

概要　調査区中央やや東側で確認された。北側の 16 号住居Ａの調査を進めた結果、南側に別の住居（16 号住居Ｂ）を確認した。16 号住居Ａは 14 号Ａ・15 号住居と隣接し重複する。その形状はやや不整形な長方形と推定される。本住居では北側付近にカマドが見られ、その周辺の床面には厚く広がる粘土と焼土の塊がある。残存する遺構から住居の広さは１辺約 3.5 mと推定される。なお、16 号住居Ａの床面からは、本調査区で唯一の紡錘車（１個）が確認された。



第 15 図　16 号住居（1:40）

遺構　中央部に広く粘土が広がり、何らかの熱の影響が推定される。粘土の上に焼土が重なる。北側にはカマドがあり、その範囲からも粘土の堆積が見られた。南壁の一部には周溝が巡らされている。

遺物　土師器・須恵器などの他に、紡錘車や石製品が見られた。第 26 図－ 14 は土師器小形甕である。形状からいわゆる鬼高分式と見られる。坏は数点見られたが、いわゆる国分式のものがあり（第 26 図－ 16 ～ 19)、本住居の年代を特定する指標となりうる。紡錘車の出土が確認できた。

17 号住居群 A・B・C・E・F・I（第 16 図）

概要　調査区中央東側で確認された。複数の住居が密な状態で重複しているため、住居の明確な新旧関係や個別の範囲を確定するに至らなかった。また、確認できたのは住居群の一部であり、調査区外の東にさらに広がる。貼り床を伴うもの、周溝を伴う住居が見られる。遺物も古墳時代中期以降から平安時代頃の特徴を持つものなど幅広く、住居の年代もこれらと同年代と推定される。

特徴的な遺物として、一部からは製鉄に関連する羽口の破片や、金属遺物（刀子）が見られた。

遺構　範囲内で焼土の広がりを確認できたが、羽口や金属遺物に関連する遺構を検出することはできなかった。Ｂと推定される範囲で確認した焼土は薄く床面の広範囲に広がっていたが､その詳細は不明である。

住居は残存する部分から方形と推定されるものが多く、周溝や貼り床を持つものが見られる。ＡやＣなど、北側の住居ほど床面が深く、これらは本調査区全体の傾向と合致する。

遺物　古墳時代中期から平安時代頃と推定されるものまで、広い年代の遺物が確認されている。

第 27 図－ 13 は須恵器の高台付杯で､いわゆる国分式に並行すると考えられる。内面にナデが施され、口縁部はやや外反する。底部には静止糸切り痕が見られる。15 は小型台付甕の脚部である。15 は須恵器高杯の脚部である。スリット状の透かしが３ヶ所施されているが、大きさや位置は不均等である。土器以外の遺物も多く、10 は口縁部に釉薬が施された磁器皿である。釉薬は一部剥落しているが、塗りにはややムラがある。羽口や刀子など、金属および金属に関連する遺物も見られた。

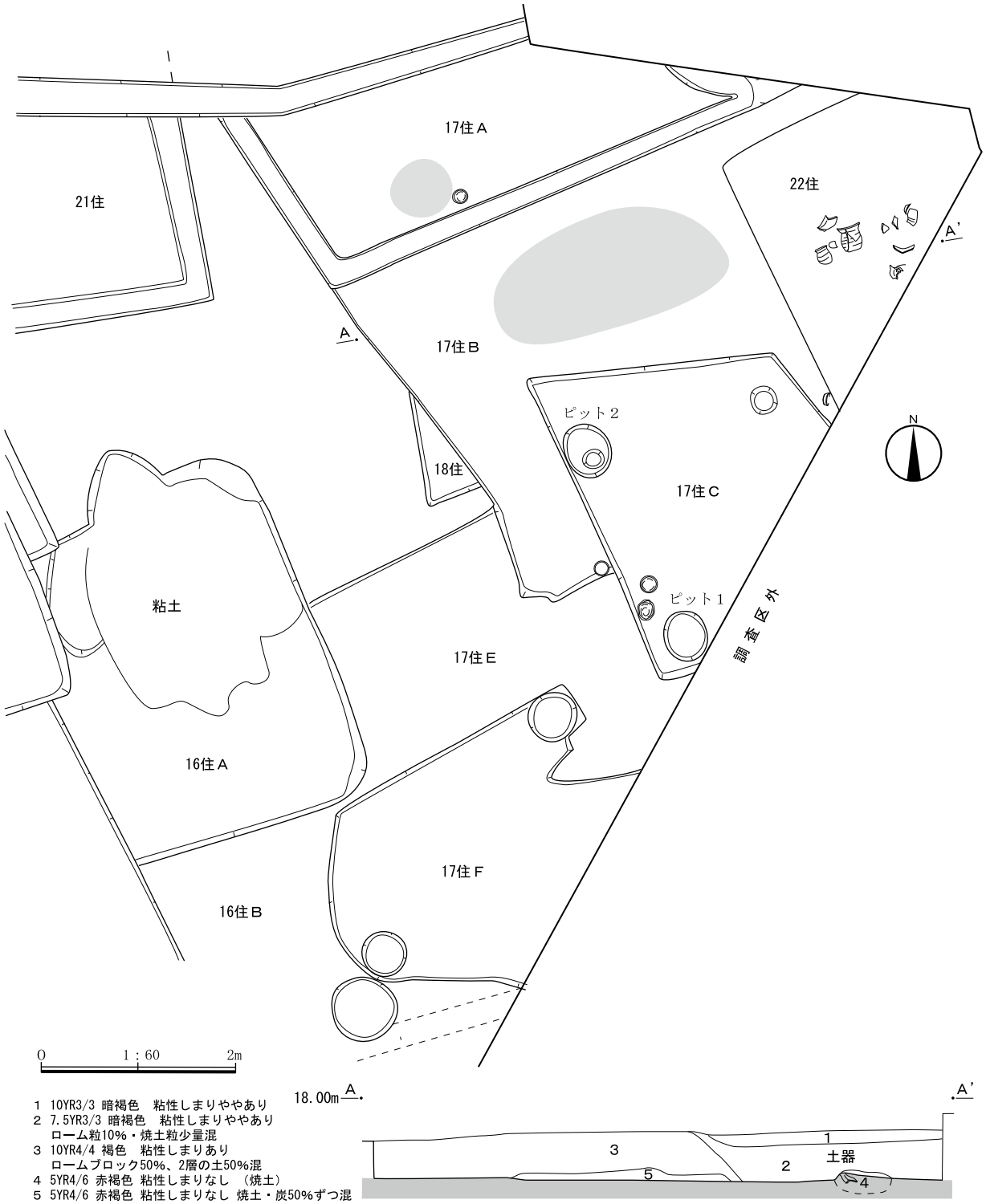
※　17 号住居群Ｄ・Ｇ・Ｈ：当初、独立する住居跡として調査が進められたが、調査及び精査の結果、隣接する他の住居跡の一部と判断されたため、欠番とした。

18 号住居（第 16 図）

概要　調査区中央部東付近で確認された。残存する範囲はごく僅かであり、全容は不明である。重複する周辺の住居により大部分が消失しており、床面の一部を確認したに留まる。

遺構　住居に伴うものは確認されていない。

遺物　確認されていない。



第 16 図　17 号・18 号・22 号住居（1:60）

22 号住居（第 16 図）

概要　調査区北東側で確認された。範囲は調査区外東側に広がり、全容は確認されていない。17 号住居群と重複するが、その新旧関係は明らかでない。

遺構　住居に伴うものは確認されていない。

遺物　第 28 図－ 14 は土師器の高坏脚部である。わずかに坏底部を残す。15 は土師器甕の胴部から口縁部である。

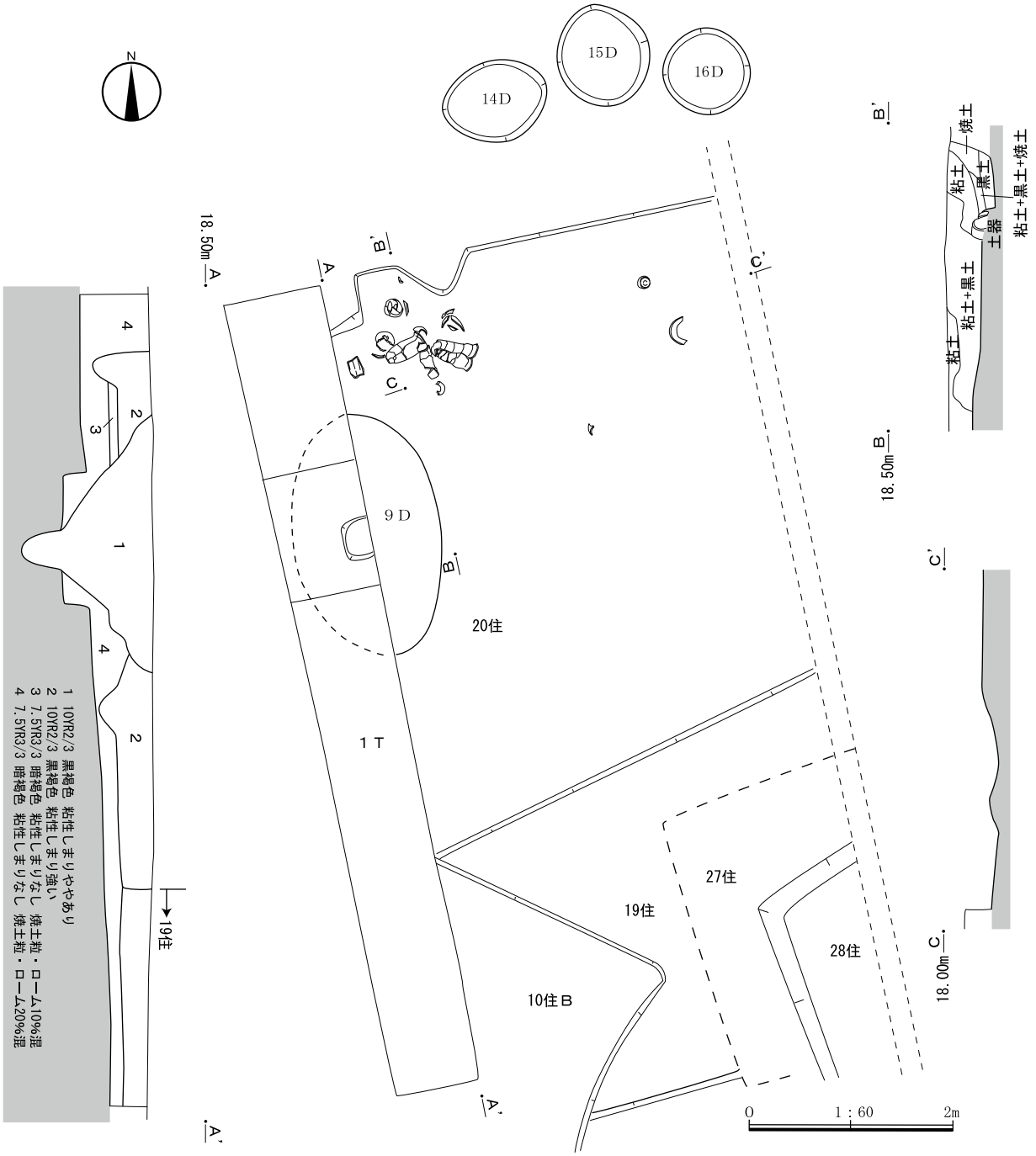
　口縁と胴部の幅はほぼ等しい。形状から 6 世紀前葉から中葉のものと推定される。また、同住居からは石器 1 点が見られた。石匙の欠損または未製品と推察される。

19 号住居（第 17 図）

概要　調査区中央西側で確認された。確認できたのは住居北西付近であり、範囲の大部分は他の住居との重複で消失したと推定される。重複の状況から、27 号及び 28 号住居より古いと判断される。

遺構　住居に伴うものは確認されていない。

遺物　確認されていない。



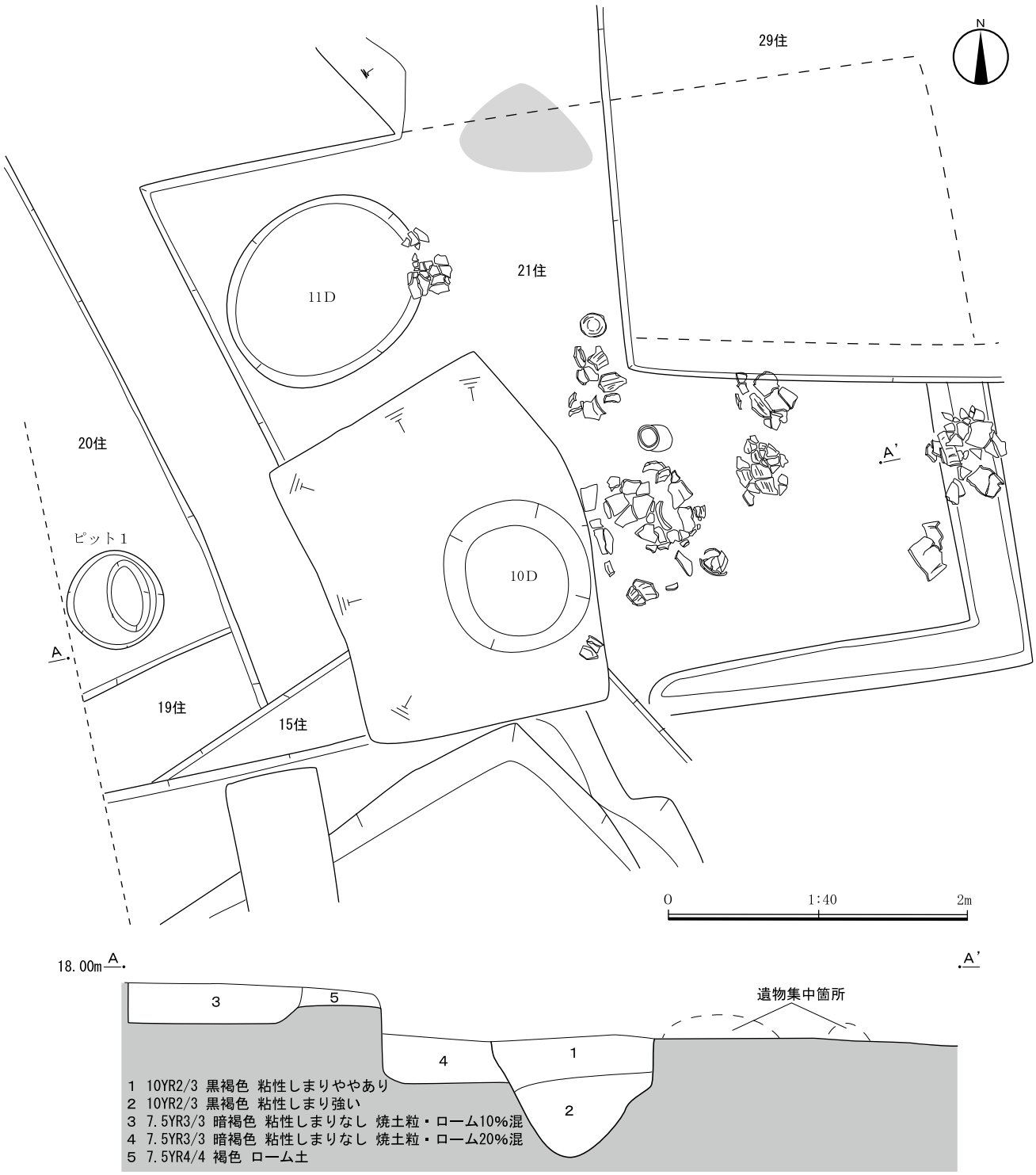
第 17 図　19 号・20 号住居（1:60）

20 号住居（第 17 図）

概要　調査区北西端付近で検出された。全体の範囲は明らかではないが残存部分から方形と推定され、１Ｔの西側、調査区外にさらに広がる。住居範囲北側でカマドが検出された。袖は一方のみ確認でき、周辺からは関連する遺物として、土師器質の長胴甕や壺等が確認された。遺物はカマド周辺に重なるように集中していた。

遺構　いくつかの土坑が見られたが、規則性は見出せず、柱穴と判断できなかった。住居範囲内に設置したサブトレンチ内の底面下部より円形に深く掘り込まれた土坑が見られたが、遺物は伴わない。

遺物　第 29 図－９・10・11 は土師器の長胴甕である。土師器の坏が数点見られたが、稜が明瞭でないものが多い。13・14 は高台付杯であり、14 には静止糸切り痕をとどめる。



第 18 図　21 号住居（1:40）

21 号住居（第 18 図）

概要　調査区中央部北側で確認された。住居内には遺物集中箇所が複数見られた。29 号住居との重複により一部が失われているが、一辺４ｍほどの方形と推定される。南西部の床面が掘り込まれ土坑状になっており、その中からは遺物が多数出土した。

遺構　10 土坑は径１ｍほどで､床面から２段階で掘り込まれている。遺物を伴うがその性格は明らかでなく、また、本住居に伴うものとも断定出来ない。中央北側には焼土が見られる。内部および周辺に遺物が見られた。また、南東部の壁の一部には周溝が存する。

遺物　土師器甕が複数出土した。胴部に最大径があり、口径に比して底面が狭いものが多い。土師器坏は明確な稜を中部に持ち、口縁は内湾する。６世紀葉から７世紀中葉が主と見られる（第 30 図）。

23 号住居

概要　調査区北東隅に見られた。範囲は調査作業用の通路として設定した区画にあたっているため、範囲・詳細は今回の調査において明らかにするに至らなかった。

遺構　住居に伴うものはで確認されていない。

遺物　少量の土師器片が出土した。

29 号住居（第 19 図）

概要　調査区中央部北側付近で確認された。21 号住居などと重複する。範囲内にベルトを設置して重複する住居との新旧関係の解明を目指したが、確定するに至らなかった。

遺構　住居に伴うものは確認されていない。

遺物　少数の土師器片が出土した（第 31 図）。

30 号住居（第 19 図）

概要　調査区北東付近で確認された。29 号・17 号Ａ・31 号・32 号住居と重複しており、全容の解明に至らなかったが、従前の形状は方形と推定される。壁面下に周溝を伴う。

遺構　中央付近に見られた土坑１基は床面を深く掘り込むが、遺物は伴わない。本住居の柱穴としては過大であり、遺物もないことから関係は明らかでない。北西隅に焼土の高まりがあり、一部は住居外に突出している。位置や形状からカマド煙道部と考えられるが、袖等は確認できない。

遺物　丸瓦１点が確認された。厚さは約 1.7cm、内面の両端付近に特に鮮明な布目が見られ、外面には並行するヘラ調整痕をとどめる。確認できたのは１点のみで、本住居との関係は明らかでない。調査区ではほかに、重機による掘削の際、排土から布目瓦片１点が確認されている。こちらには内面全体に明確な布目が見られるが、破片であるため、こちらも詳細は明らかでない（第 31 図）。

31 号住居（第 19 図）

概要　調査区北東付近で検出された。隣接する 30 号住居との重複により大部分が消失していること、23 号住居が未調査であることから、全容の解明には至らなかった。東方向に広がり、従前の形状は方形と推定される。

遺構　住居に伴う遺構は確認されていない。

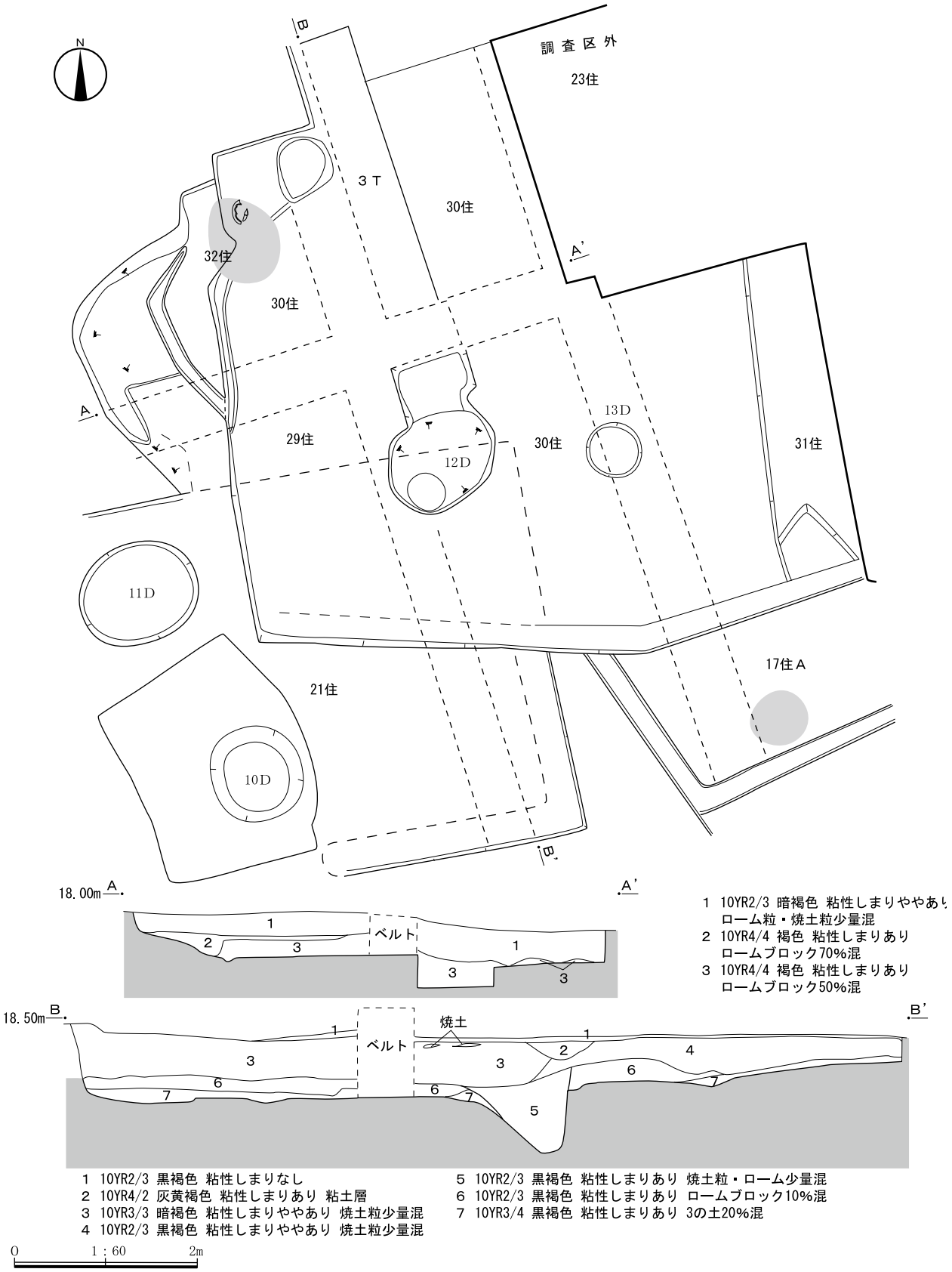
遺物　第 32 図－１は土師器甕底部である。長胴と推定される。平底で、表面にはヘラケズリの痕が縦方向に見られる。胴部の膨らみはやや直線的であり、形状から６世紀前葉から中葉と推定される。

32 号住居（第 19 図）

概要　調査区北東付近で確認された。大部分は隣接する 30 号住居などとの重複のため消失している。確認できたのは北西隅部分で、周溝を伴う。

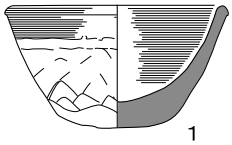
遺構　30 号住居との境付近で床面上に焼土が見られた。

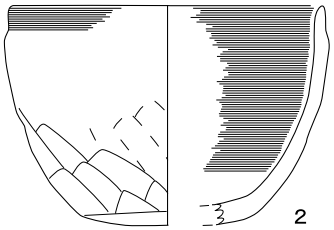
遺物　土師器が多く見られたが、これらは焼土内から検出された。第 32 図－６の土師器坏は下位に弱い稜をもち、口縁は外反する。６世紀後葉から７世紀中葉のものと見られ、そのほかにも同年代と推定される遺物が確認できた。



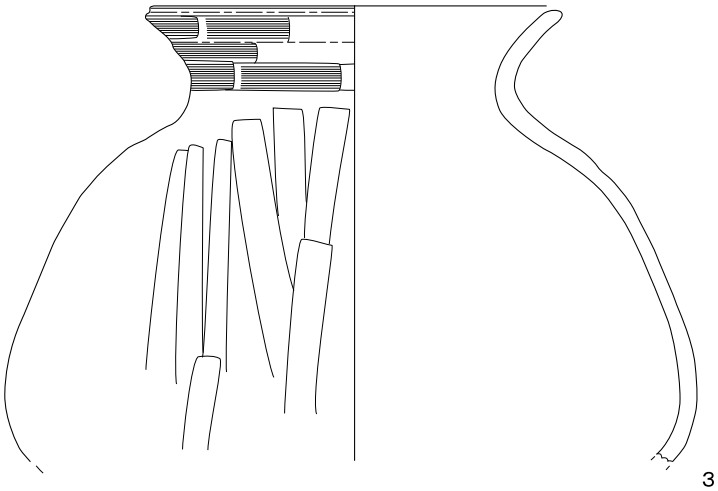
第19図　23号・29号・30号・31号・32号住居(1:60)

＜１号住居＞

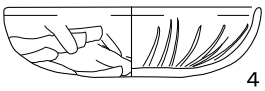




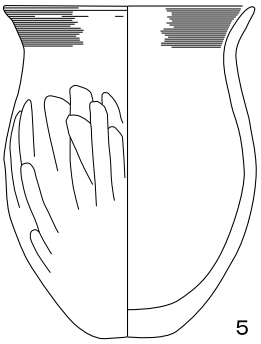
＜２号住居＞

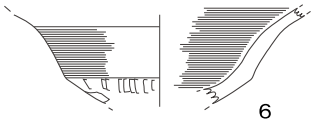


＜５号住居＞

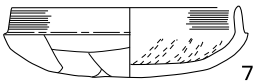


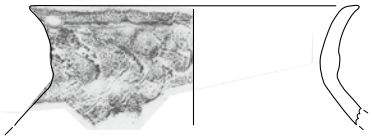
＜６号住居＞

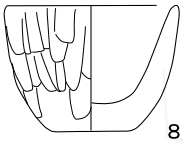


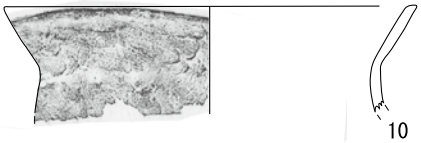


＜24号住居＞





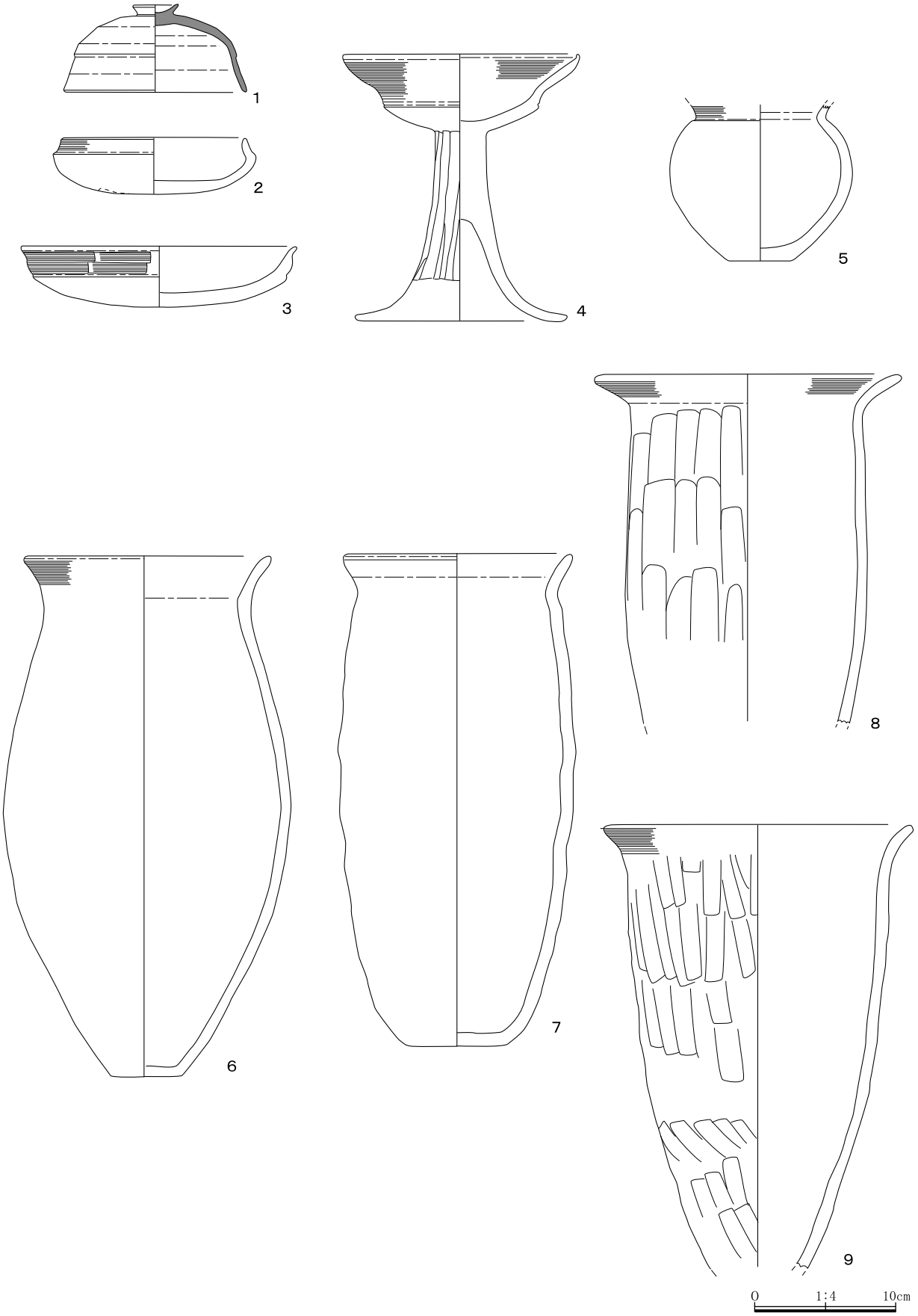




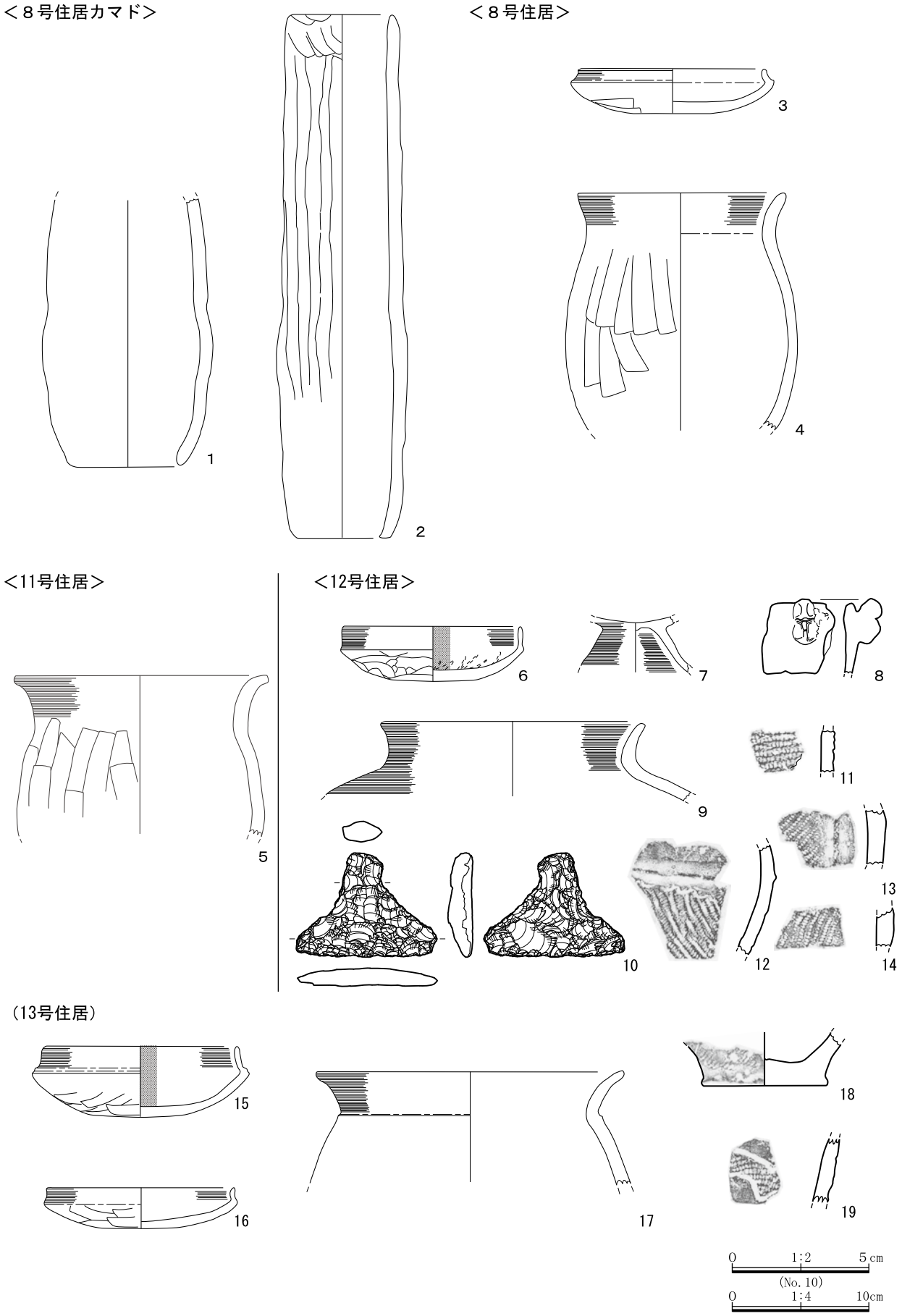
0 1:2 5cm
(No. 11)
0 1:4 10cm

第 20 図　１号・２号・５号・６号・24 号住居出土遺物 (1:4)

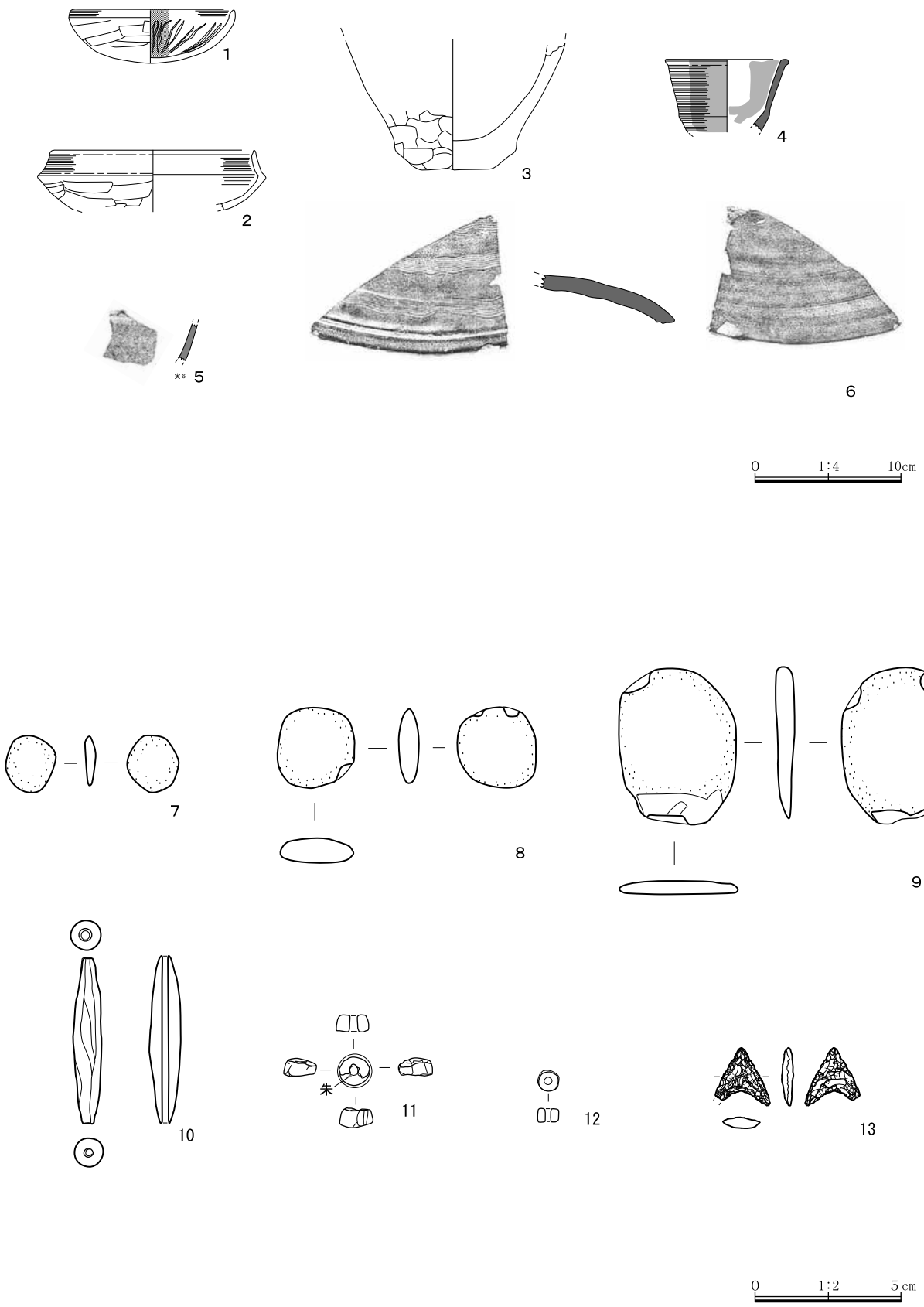
＜８号住居カマド＞



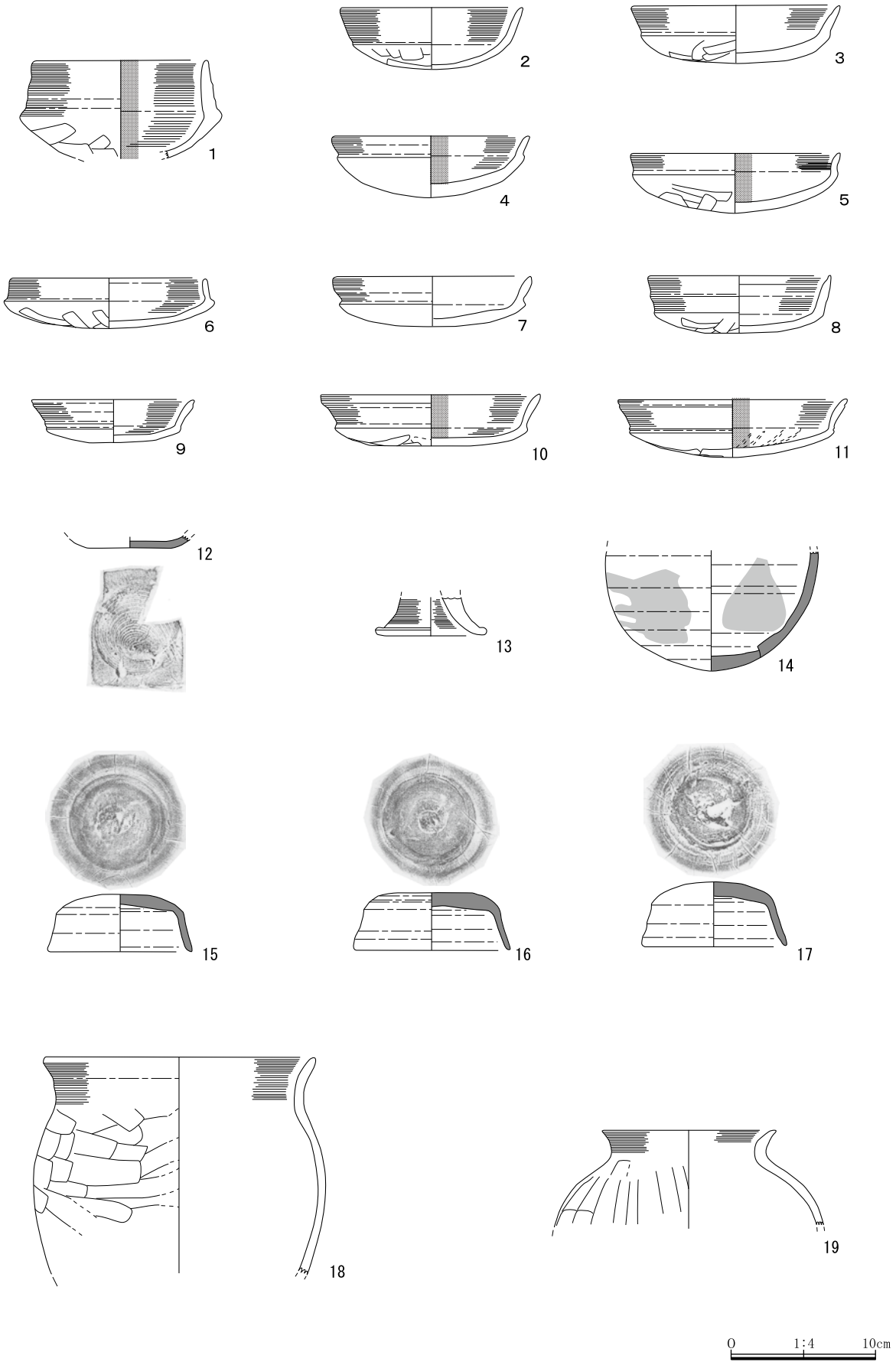
第 21 図　８号住居カマド出土遺物 (1:4)



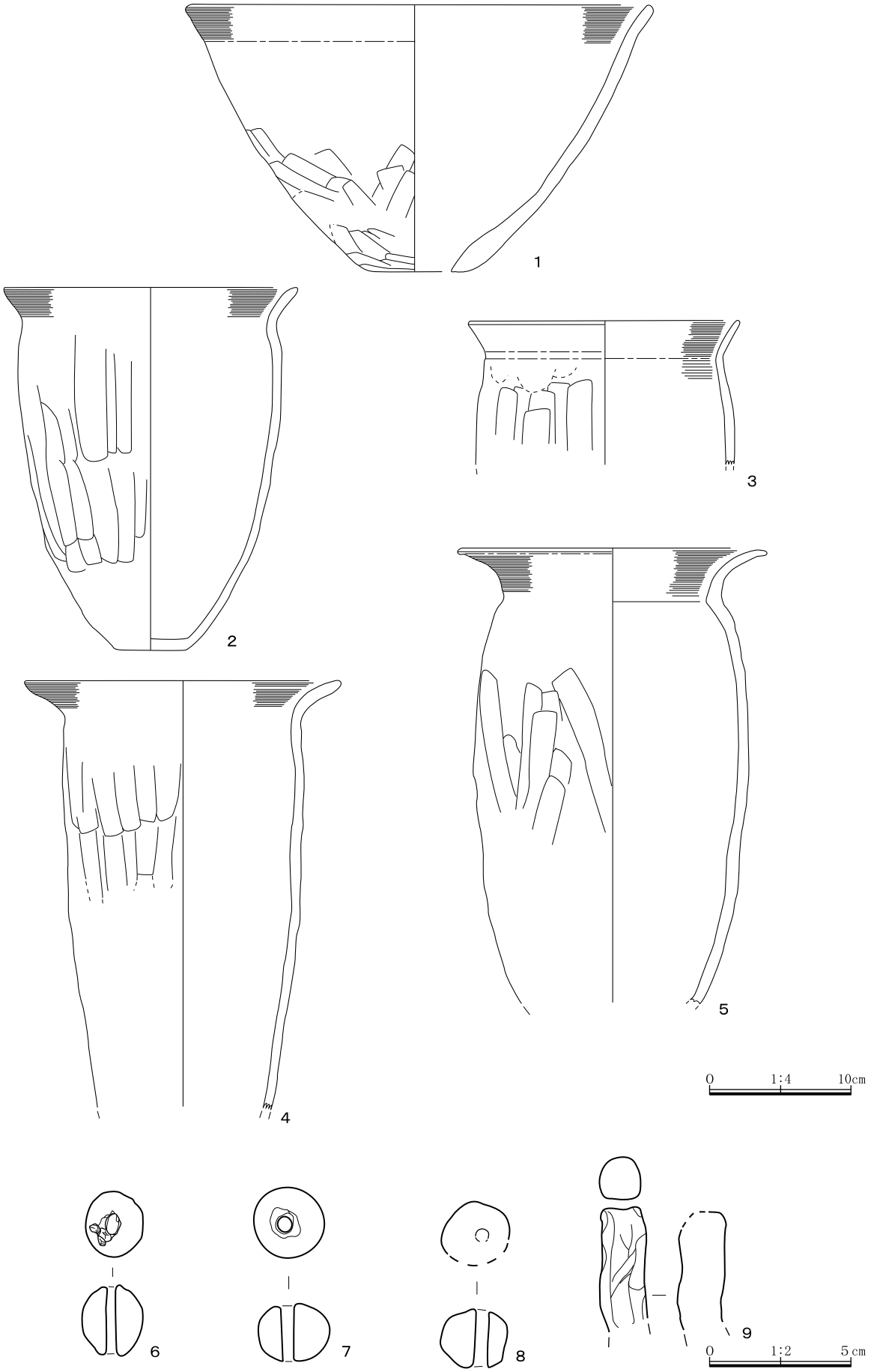
第 22 図　８号住居カマド・８号・11 号～ 13 号住居出土遺物 (1:4)



第 23 図　14 号住居出土遺物 (1:4)

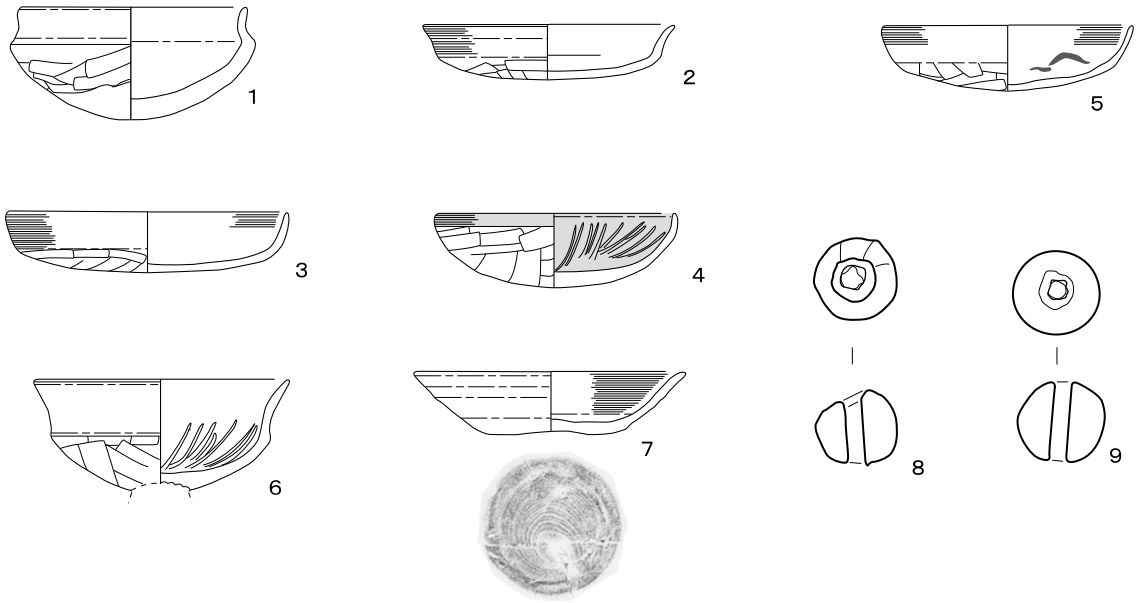


第 24 図　15 号住居出土遺物①（1:4）

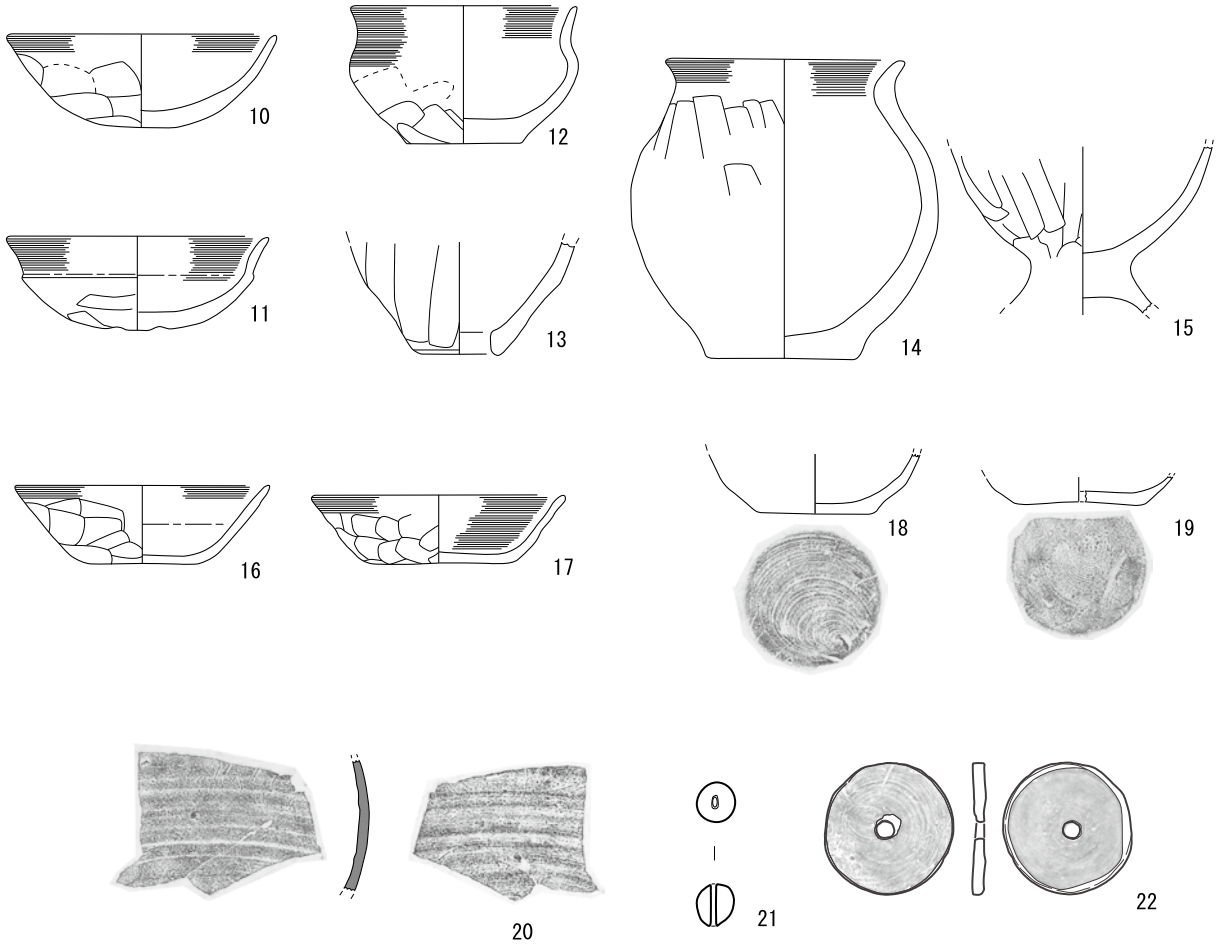


第 25 図　15 号住居出土遺物② (1:4)

<27号住居>

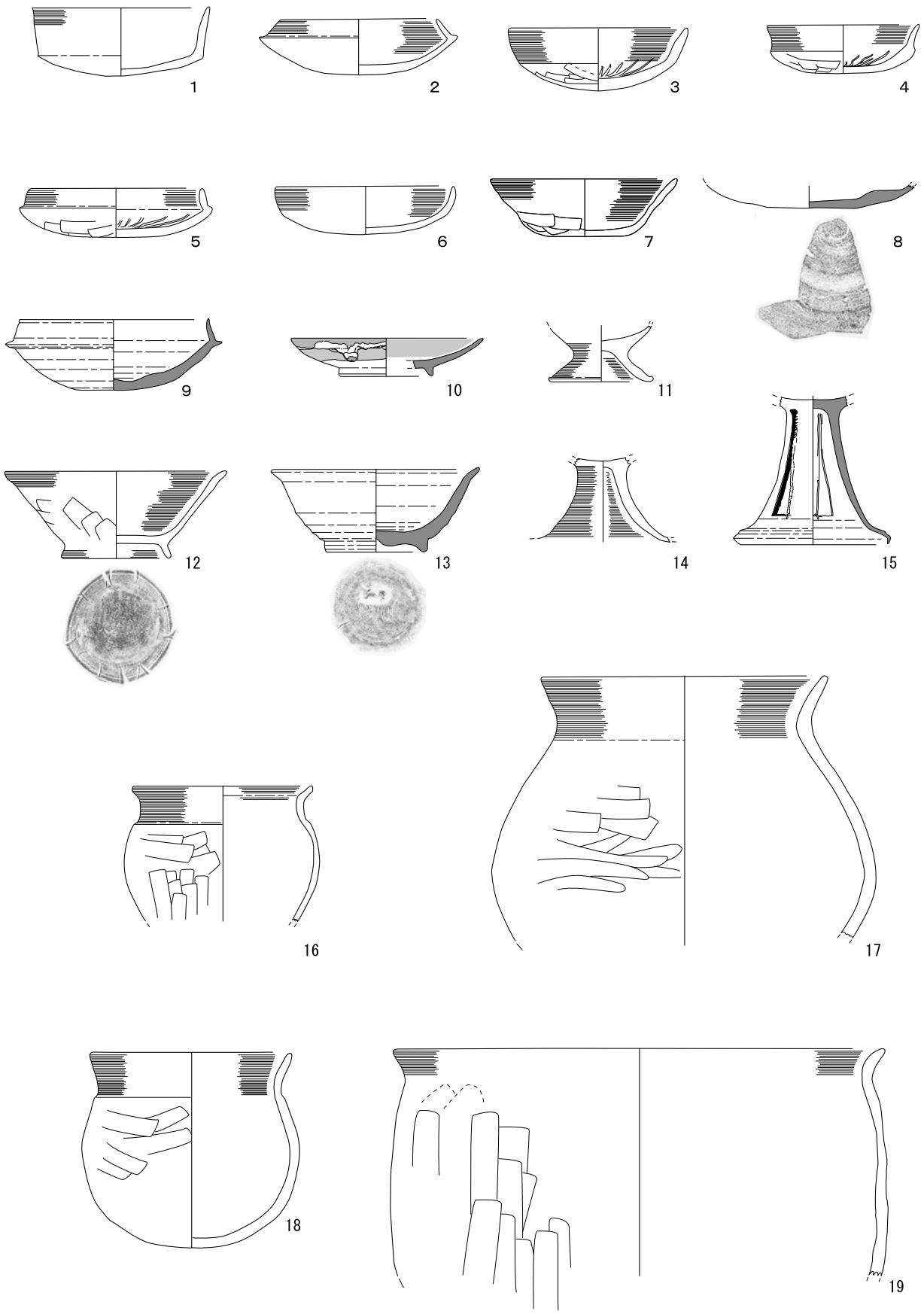


<16号住居>



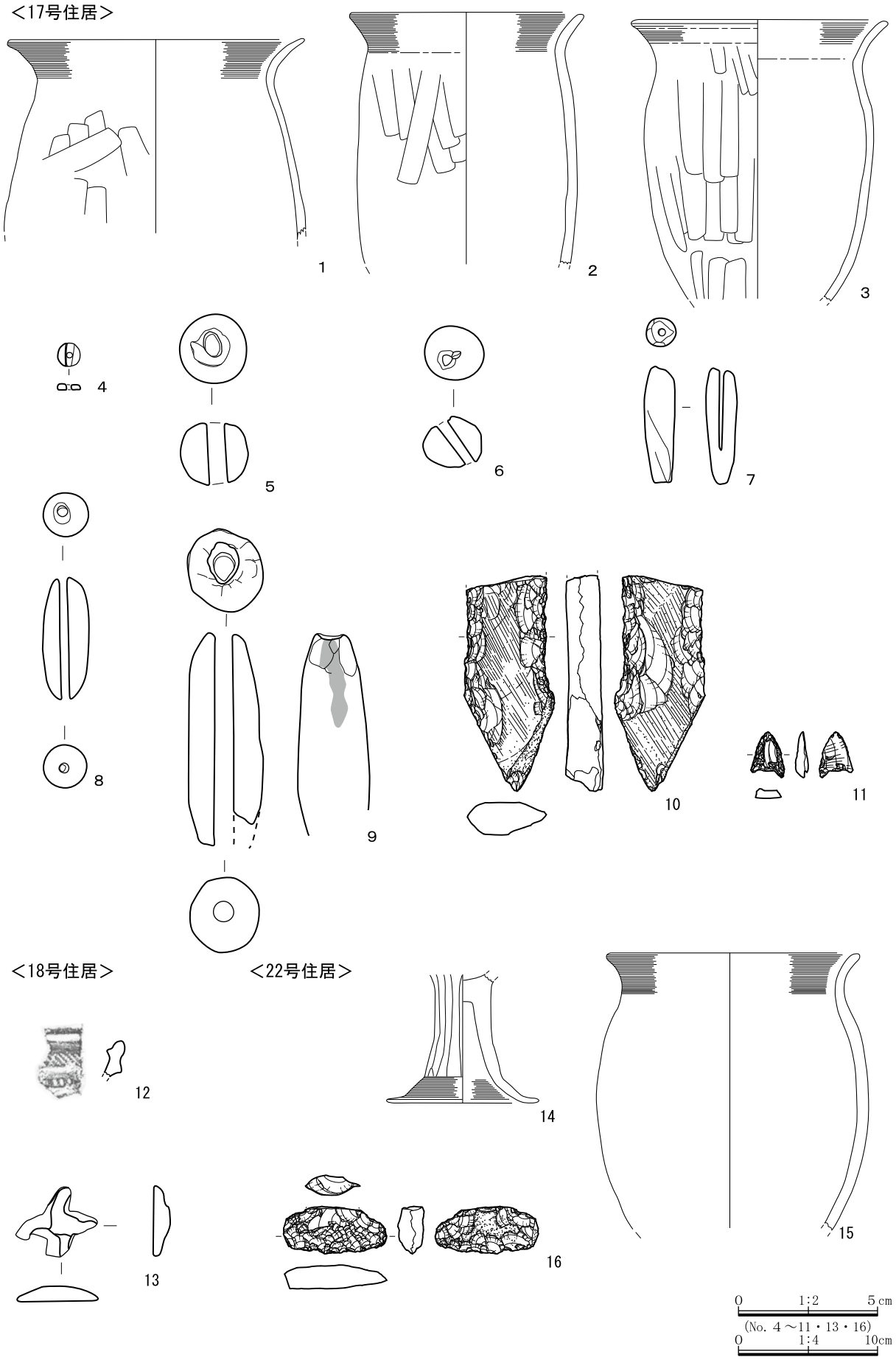
0　1:2　5cm
(No. 8・9・21・22)
0　1:4　10cm

第 26 図　16 号・27 号住居出土遺物 (1:4)



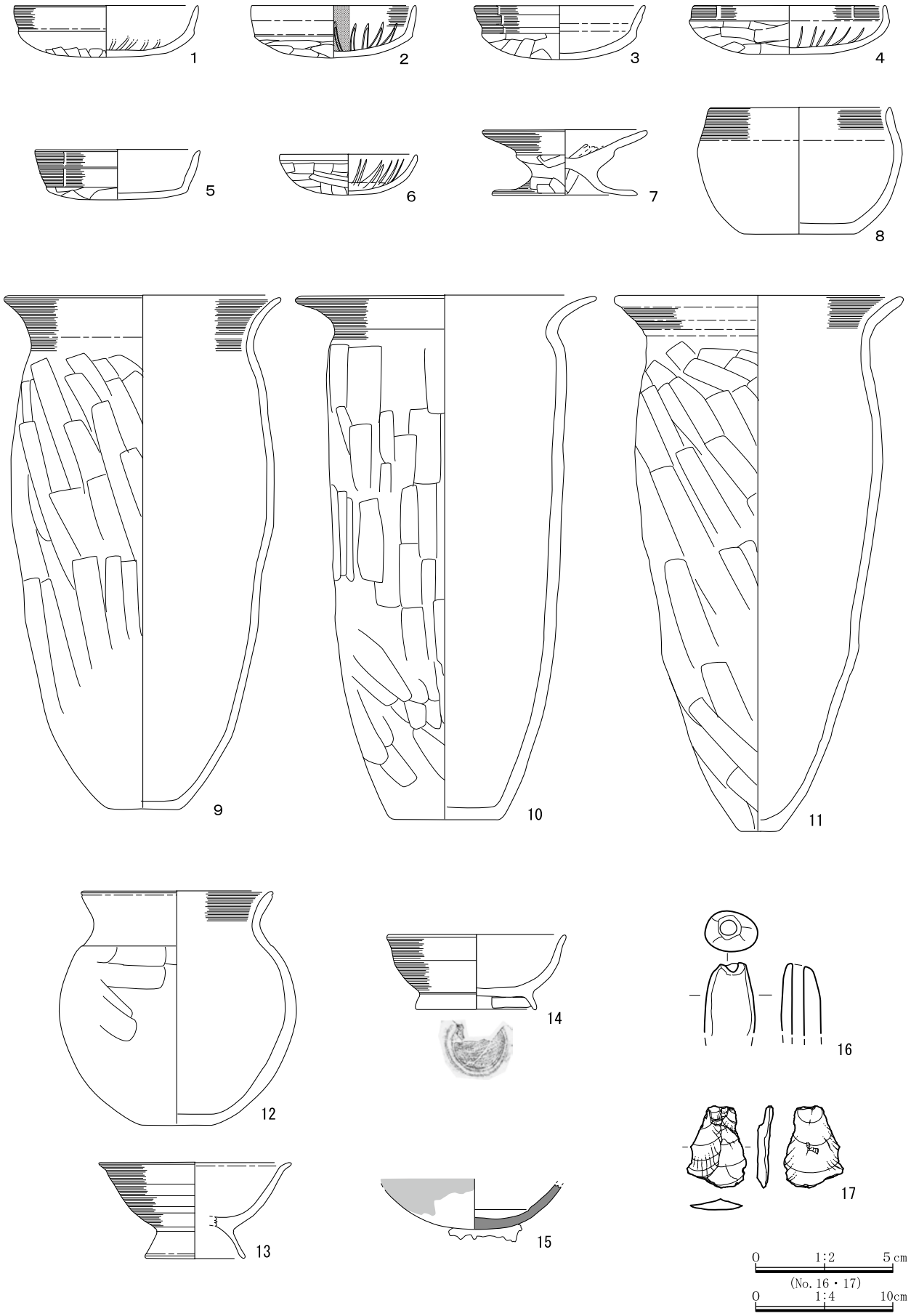
第 27 図　17 号住居群出土遺物 (1:4)

0　1:4　10cm

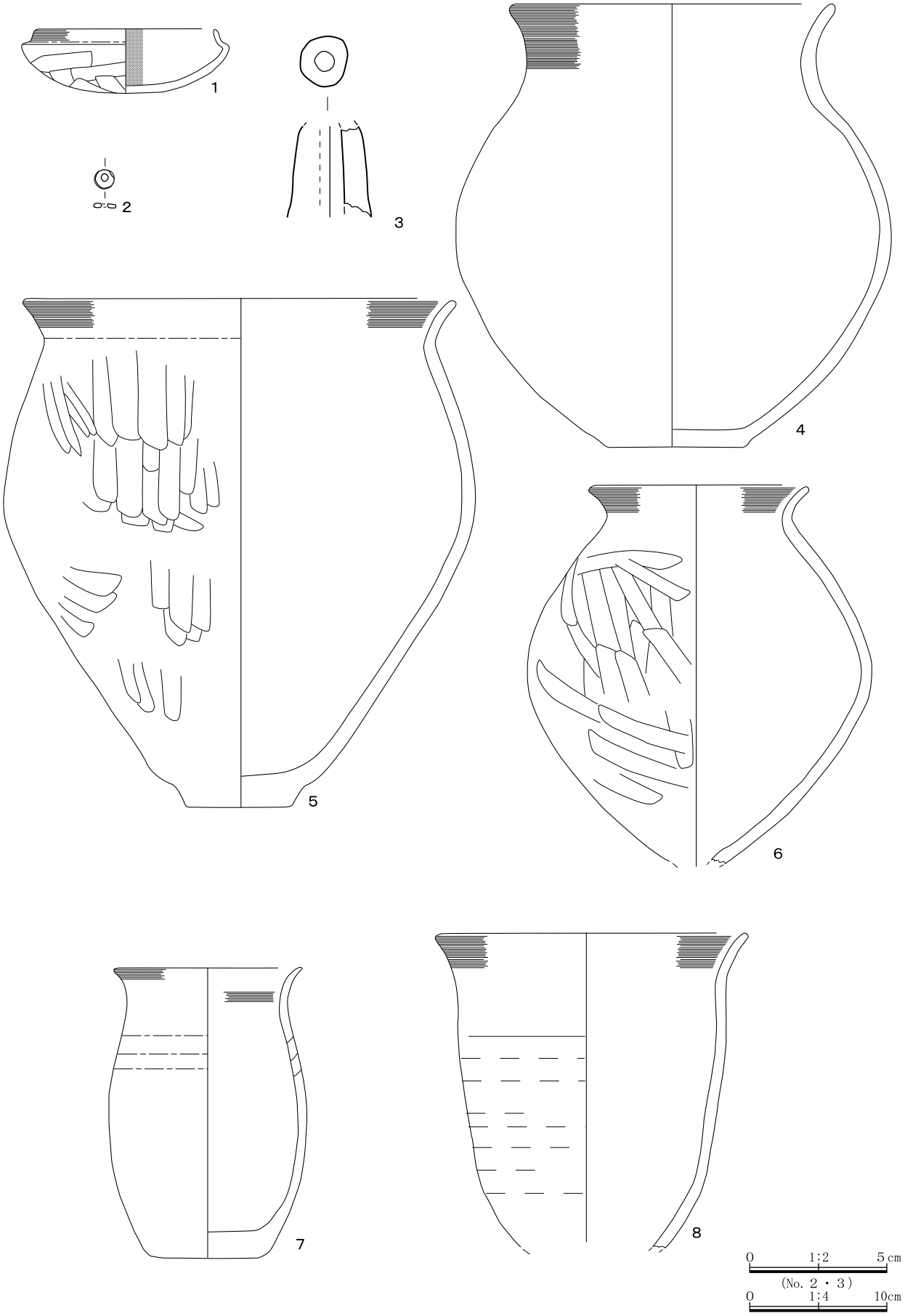


第 28 図　17 号・18 号・22 号住居出土遺物 (1:4)

＜20号住居＞

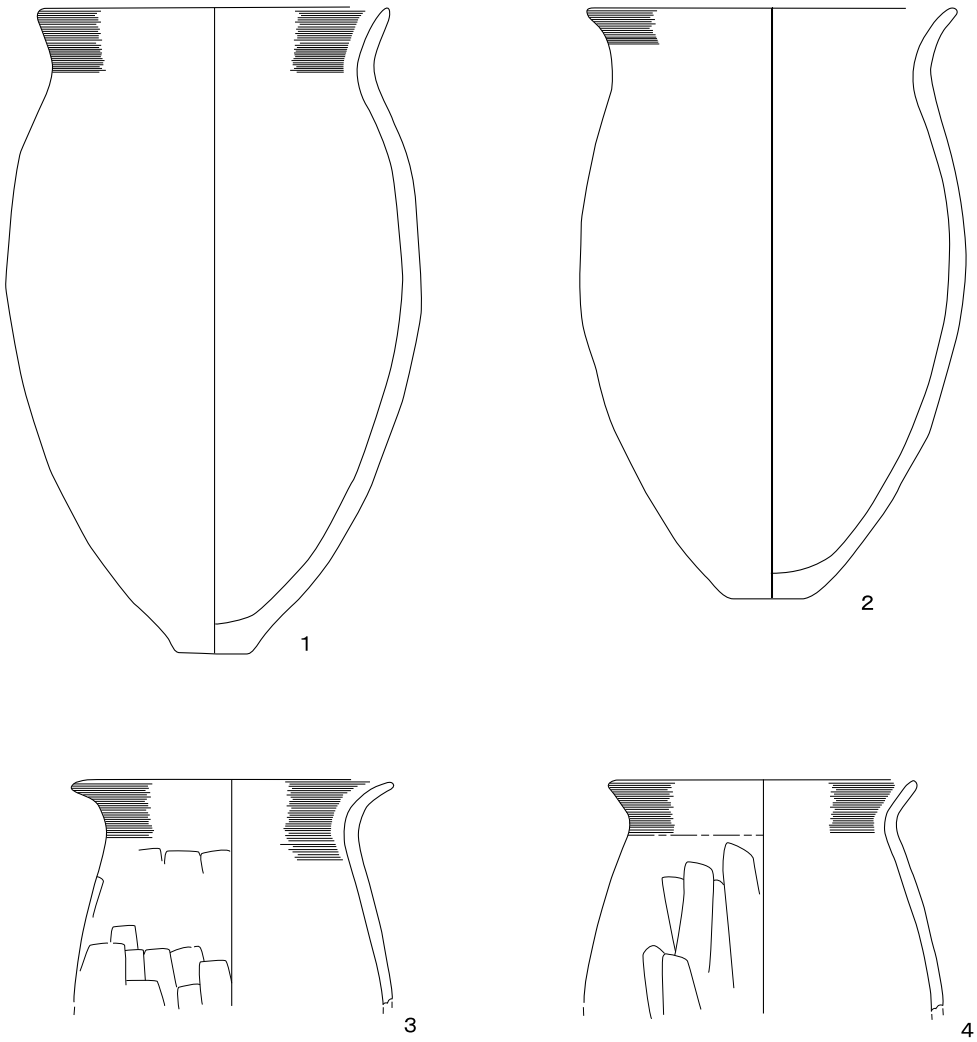


第 29 図　20 号住居出土遺物 (1:4)

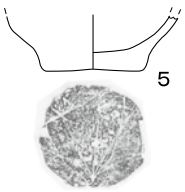


第 30 図　21 号住居出土遺物 (1:4)

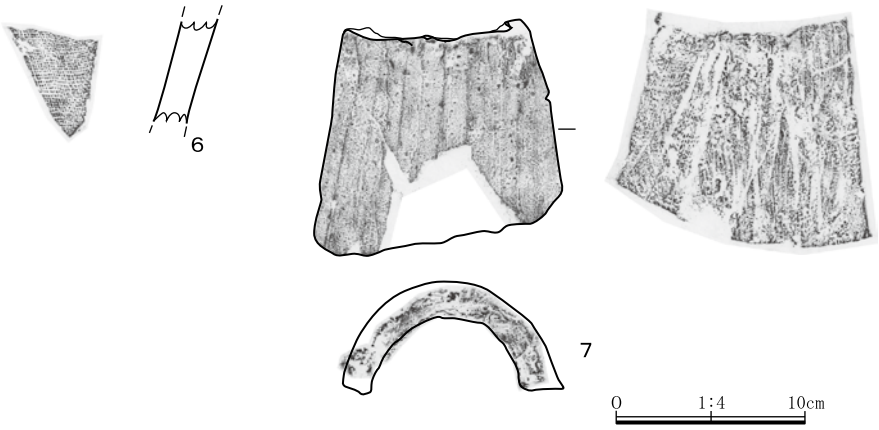
＜21号住居＞



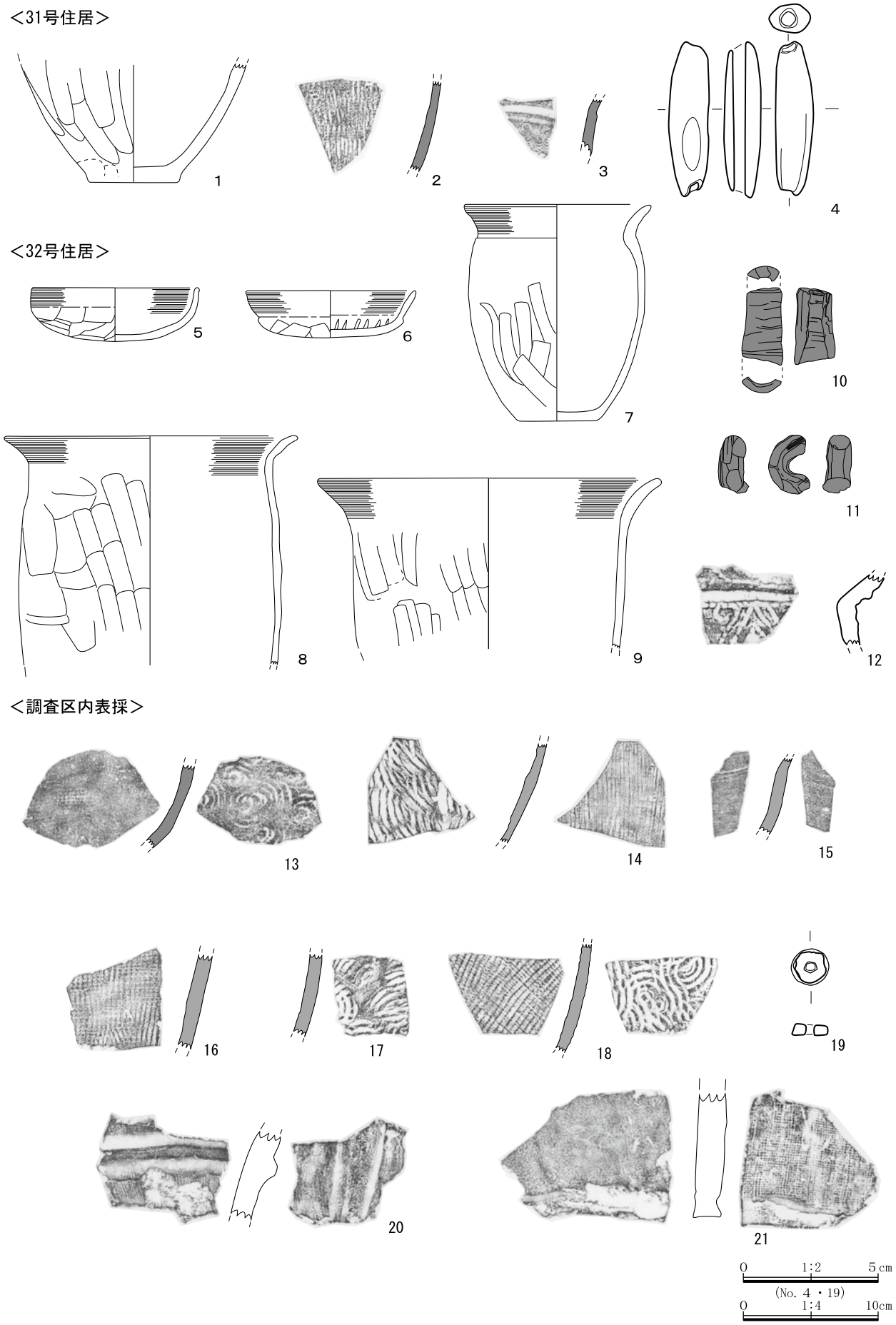
＜29号住居＞



＜30号住居＞



第 31 図　21 号・30 号住居出土遺物 (1:4)



第 32 図　29 号・31 号・32 号住居、覆土出土遺物 (1:4)

第４章　まとめ

今回の調査は、約 450㎡の調査面積ながら 30 軒を超える住居跡が確認され、およそ５世紀末～９世紀の長期の間この地が生活場所として使われ続けていたことが確認でき､それに伴う豊富な資料を得ることができた。

出土遺物の大部分を占めるいわゆる鬼高期に属する土師器は、1980 年代後半から多くの編年案が示されているが（坂口 1986、太田市 1985 など)､「邑楽」や「東毛」などの小地域圏での編年を基本とした生産と供給システムの解明が重要であるとされる（田中 1995)。しかし、邑楽・館林地区についてはこれまで編年案が示されておらず、小地域圏単位の検討の進展が望まれていた。本遺跡では、住居の重複が激しく、カマドに伴う床面直上から出土した土師器は、２号・８号・20 号住居の遺物のみであり、住居への帰属が特定できるものが多いとは言えない。しかし、上記の状況と市内出土資料の編年研究が行われてきていない現状を鑑みると、今後の調査の指針とするためにも、本遺跡における資料の形態の特徴とその変化についての試案を示すことは必要であると考える。

そこで、形態を中心とした分類・変遷の設定に多くの疑義を挟む余地があることを承知しながらも、近隣地域の形態的特徴をもとにした編年を試み、周辺遺跡との関連も含めて所見を示しておく。

１・土器編年について

分類と変遷の特徴（第１表・第２表）

坏①～④類はいわゆる坏蓋模倣坏であり、主に口縁部形状を中心に分類した。なお、編年表の各期は太田市の編年（太田市 1985）を参考に、第Ⅱ期（５世紀末～６世紀初頭)、第Ⅲ期（６世紀前葉～６世紀中葉)、第Ⅳ期（６世紀後葉～７世紀中葉)、第Ⅴ期（７世紀後葉）に対応とした。

①類：口縁部が直立する。口縁部と体部を区画する稜は丸みを持つものが多い。本遺跡では第Ⅳ期のみ確認され、その中でも年代が新しくなるにつれ体部が浅くなり、底部形状が扁平になる。

②類：口縁部が外反する。丸味のある体部で、稜から直線的に立ち上がるａと外反の強いｂがある。第Ⅲ期から第Ⅳ期になると、総じて体部が浅くなる。横ナデにより体部との区別がある。

③類：明確な稜はなく、丸味のある体部から内湾気味になだらかに立ち上がる。

④類：丸味を帯びた底部から内湾気味に立ち上がる。口縁部と体部を画する稜がない。

⑤類：体部と口縁部を分ける明確な稜から口縁部へと内斜的に立ち上がるもの。いわゆる坏身模倣坏。次第に口縁部の高さが低くなり、稜も緩くなっていく。横ナデにより体部との区別がある。口縁部の立ち上がり方でａとｂに分けた。

⑥類：口縁部が内側へ小さく屈曲する。いわゆる内屈口縁坏。

高坏

短い脚部から「く」の字に外反するものや、脚部に対して深い坏部をもち、口縁部と体部を画す稜から外傾するものが第Ⅱ期に相当する。その後、長脚化していく。

長胴甕

①類：丸味のある体部で、最大径が胴部上部にくる第Ⅱ期から徐々に長胴化していく。

②類：丸味が少なく寸胴に近い胴部を持つが、底部にいくにつれ先細りしていく。第Ⅱ期から徐々に長胴化し、第Ⅴ期で長胴化が完成する。

８号住居の煙道とカマドの袖の部材を第Ⅳ期に設定し、天上部は第Ⅴ期に設定した。

小形甕

第Ⅱ期は扁平な球状を呈する胴部を持ち口縁部が緩く外反する。第Ⅲ期では胴部の球状化が進み、第Ⅳ期では小形ではあるが長胴化する。

広口甕

口縁部が広く、胴部最大径を中位に持つ甕。小さい底部から直線的に立ち上がるものを第Ⅳ期とした。

壺

くの字状に屈曲する口縁部で、球形の胴部を持つ。底部欠損ではあるが、最大径から底部に向かい急に窄まるものを第Ⅱ期とした。

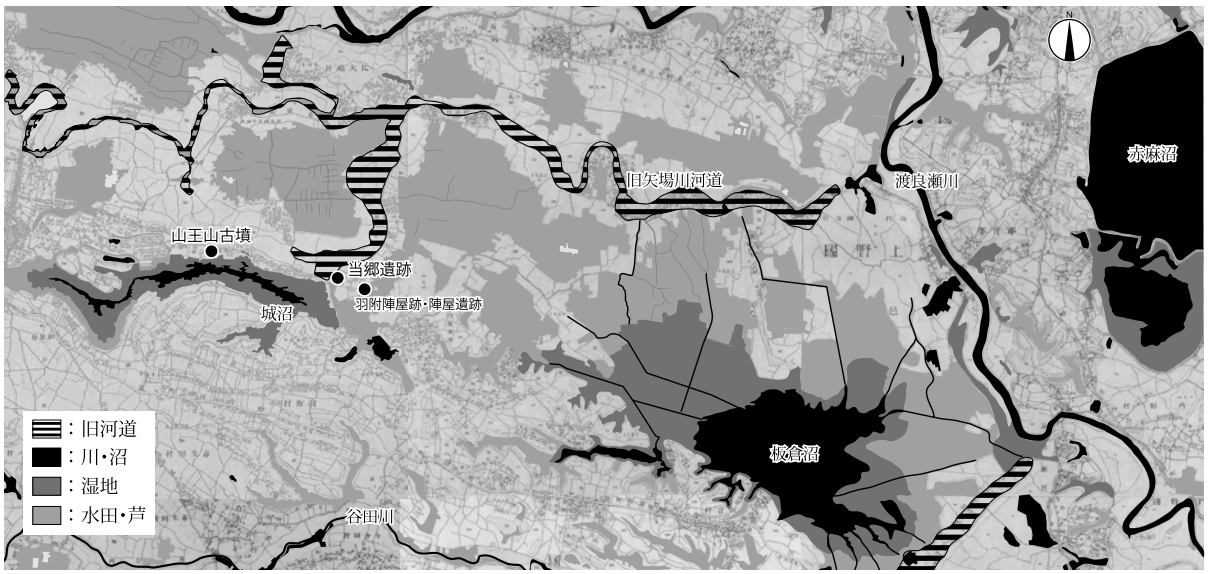
甑

鉢形を呈し、直線的に口縁部へと立ち上がるものを第Ⅱ期とした。

２・当郷遺跡と周辺遺跡

以上の編年の結果、本遺跡で今回確認できたのは主に第Ⅱ期～第Ⅴ期の遺物であり、特に第Ⅳ期の遺物が種類・量共に充実していた。その後、いわゆる国分式土器の出土もみられることから、長期間居住生活を行っていたことが改めてわかる。

第 33 図は、明治 17 年の迅速測図（フランス式）に川や水田などの範囲を加筆したものである。城沼や板倉沼を中心に多くの河川に囲まれ肥沃な土壌が形成される氾濫原であり、広大な可耕地であったと考えられる。また、昭和 31 年の地形図に照らし合わせると（第 34 図)、本遺跡は城沼北岸に細く伸びる台地の舌状に張り



第 33 図　迅速測図にみる周辺の湿地帯（1:75000）（明治 17 年　迅速測図に加筆）

第 34 図　昭和 31 年館林市内地形図（1:10000）

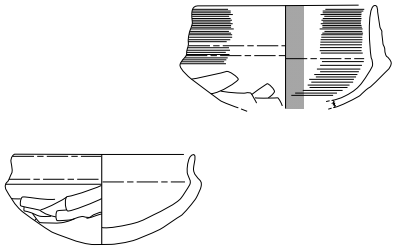
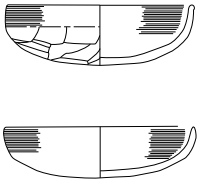
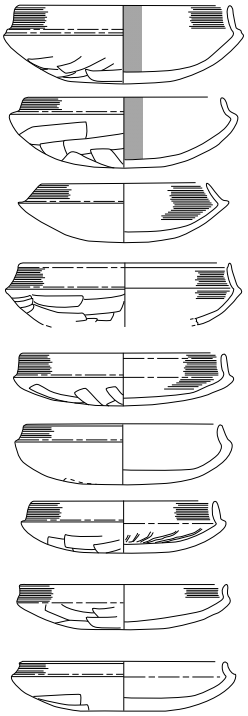
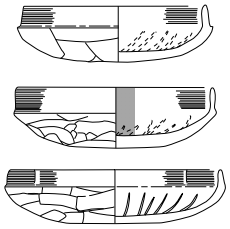
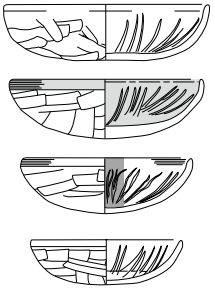
出した場所に立地しており、遺跡北東には緩い谷が広がっている。ここで特筆される点はこの谷を形成したのが旧矢場川ということである。第 33 図の旧河道は国土地理院が公表しているものを参照にしたものである。これだけで当時の流路を復元することはできないが、当郷遺跡の台地崖線部まで流路であった時期があることが示され、この地が城沼だけでなく矢場川の流域も押えられる重要な場所であった可能性がある。周辺遺跡であげた羽附陣屋跡・陣屋遺跡も、標高差１m下の台地上の端部に立地しており、同じく古墳時代の住居跡が確認されている。市内の遺跡で、本遺跡と同様に第Ⅳ期の遺物が多く出土した北近藤第一地点も、近藤沼を望む台地上に集中的に住居が形成されていることから、沼や川の分岐点付近を選地し、物流の要所を押さえ、潤沢な可耕地を背景に大集落へと発展していった可能性をみることができる。沼沢地周辺部においてこの時期の活動痕跡が多く確認されるのは、こうした可耕地の開発を可能にした技術の工夫や労働力の集約といった社会基盤の形成があったことも想定される。

当郷遺跡の周辺で同じく城沼を望む台地に立地するのが、全長 40 m余の前方後円墳で市指定史跡の山王山古墳である。同古墳は昭和 13（1938）年刊行の『上毛古墳綜覧』で「郷谷村第一号　山王山」として記載されており、周辺には円墳のあったことが確認されている。墳丘は一段築成で、昭和 59 年（1984）度に作成された墳丘測量図によると、前方部幅 16 m以上（前方部前端高：約 21.8 m）、くびれ部幅 14 m前後、後円部径 28 m前後（後円部高：約 23.2 m）で、その形態的特徴から６世紀後半の築造であると考えられている（館林市教育委員会 2011）。

本遺跡の出土遺物は、その年代に幅を含んではいるが、山王山古墳の造営時期と同時期に出土遺物の量が増加していることと、大規模集落であった可能性を積極的に解釈するならば、古墳に埋葬されるような豪族の成立の背景には、豊富な可耕地の掌握と地域統合力の形成が背景として考えられる。当郷遺跡はそのような背景をうかがい知るための手がかりになる遺跡であり、古墳の造営に関わった人びとと関連する集落であった可能性もある。今後そのようなことを念頭に調査を進めて地域形成の過程を明らかにするとともに、邑楽・館林地域の歴史を人びとの生活の歩みの視点から辿っていく必要がある。

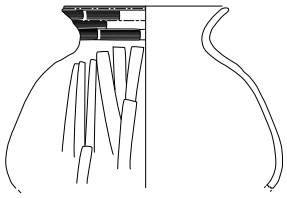
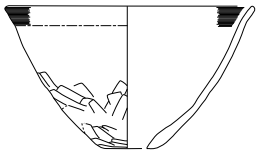
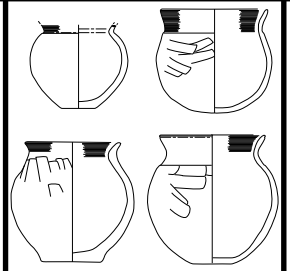
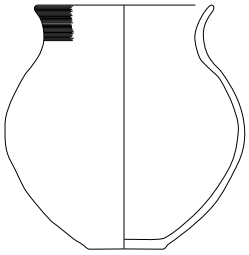
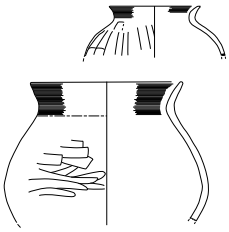
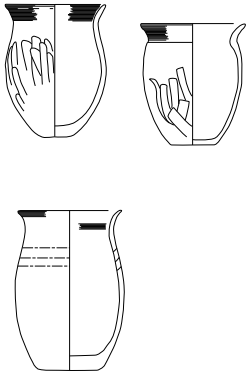
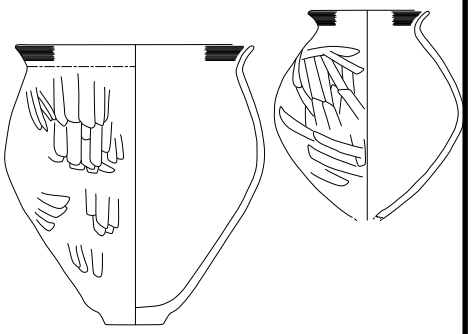
第１表 当郷遺跡出土遺物編年表（坏）①(1:5)

時　期	坏①類	坏②類	坏③類
第Ⅲ期		a b	
第Ⅳ期			
第Ⅴ期			

	坏④類	坏⑤類	坏⑥類
			
		a  b 	
			

第２表 当郷遺跡出土遺物編年表② (1:10)

時 期	高坏	長胴甕①類	長胴甕②類
第Ⅱ期			
第Ⅲ期			
第Ⅳ期			
第Ⅴ期			

	小形甕	広口甕	壺	甑
				
				
				

参考文献

太田市教育委員会　1985『市内遺跡Ⅱ』
太田市教育委員会　1987『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』
太田市教育委員会　1988『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』
(公)群馬県埋蔵文化財調査事業団編　2005『群馬の遺跡７　中世～近代』
坂口　一　1986「古墳時代後期の土器編年」群馬文化 208 号
館林市教育委員会　1974『館林市双書第４巻』
館林市教育委員会　1988『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 20 集
館林市教育委員会　1998『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 31 集
館林市教育委員会　2009「館林市における土師器皿の変遷」『市史研究おはらき』
館林市教育委員会　2010『館林市特別編第４巻　館林城と中近世の遺跡』
館林市教育委員会　2011『館林市資料編第１巻　館林の遺跡と古代史』
田中広明　1995「関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向」東国土器研究

遺物観察表①

図版番号		住居番号	器種	高さ(残存高)	口径(残存径)	年代	残存率	成形の特徴等	調整の特徴等	備考
第20図	1	1H	小形鉢	6.5	11.9	6～7世紀	底部	丸底、底部から胴部は緩やかに立ち上がる	【内】口縁横ナデ【外】口縁横ナデ、底部ヘラケズリ	
	2	〃	鉢	11.7	16.4	Ⅳ	1/3	わずかな稜をもつ、口縁は弱く外反する	【内】口縁横ナデ【外】口縁・肩部に横ナデ	
	3	2H	壺	11.5	18.6	Ⅱ	口縁部のみ	胴部大きく膨らむ、口縁は外反し胴部にかけて「S」字を呈する、軽石粒含む	【内】口縁横ナデ 【外】胴部縦にヘラケズリ、ナデ	二次焼成を受ける
	4	5H	坏	3.7	13.6	Ⅴ	1/2	平底、底部から緩やかに立ち上がる、口縁は内湾する	【内】棒状研磨痕【外】底部ヘラケズリ	
	5	6H	小形甕	17.5	13.4	Ⅳ	3/5	平底、口縁弱く外反し、口縁から胴部は「く」の字状を呈す	【内】口縁横ナデ 【外】口縁横ナデ、胴部・底部ヘラケズリ	外面に二次焼成を受ける
	6	〃	高坏	(6.9)	—	Ⅳ	口縁部片	口縁大きく外反する、中部に稜をもつ	【内】口縁横ナデ【外】胴部ナデ、底部ヘラケズリ	
	7	24H	坏	3.7	11.4	Ⅳ	4/5	丸底、口縁部やや内屈する、中部に明確な稜をもつ	【内】口縁部横ナデ　棒状研磨痕 【外】口縁部横ナデ、底部ヘラケズリ	二次焼成を受ける
	8	〃	手捏ね土器	6.7	9.2	6～7世紀	4/5	平底、底部から緩やかに立ち上がる	【内】口縁横ナデ【外】胴部縦にヘラケズリ、胴中部にナデ	
	9	〃	甕	6.4	17.4	6世紀	口縁部1/3	口縁部やや緩やかに外反する	【内】ヘラケズリ【外】ヘラケズリ	二次焼成を受ける
	10	〃	長胴甕	5.7	21.8	Ⅳ	口縁部	口縁部緩やかに外反する	【内】棒状研磨痕【外】斜め方向にケズリ	
	11	〃	土玉	—	—	—	1/2	中央部大きく膨らむ、中央部上下に貫穴	—	
第21図	1	8H カマド	須恵器坏蓋	6.2	13.0	5～6世紀	完形	中部に稜をもつ、下位から若干外反する	【内】口縁部ナデ 【外】口縁部ナデ、上部わずかにヘラケズリ	
	2	〃	坏	3.3	13.4	Ⅳ	完形	丸底、底部より緩やかに立ち上がる、上部の稜から口縁へ内湾する、口唇部は若干外反する	【内】口縁部ナデ 【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	
	3	〃	坏	4.3	19.6	Ⅳ	完形	丸底、下位に稜をもつ、底部から口縁へ緩やかに外反し立ち上がる	【外】口縁部ナデ	底部に二次焼成を受ける
	4	〃	高坏	18.9	16.9	Ⅳ	4/5	坏部下位に稜をもつ、稜から口縁へ強く外反し、口唇部はやや内湾。長い脚部から下位に裾野が広がる	【内】口唇部・脚部内側ナデ 【外】口縁部ナデ、脚部ヘラケズリ	
	5	〃	小形甕	11.0	4.6	Ⅲ	口縁部欠	平底、胴部に最大径をもつ、口縁は外反する	【外】底部・胴部ヘラケズリ、口縁部ナデ	
	6	〃	長胴甕	37.0	17.4	Ⅳ	4/5	平底　胴部に最大径をもつ、口縁は外反する	【外】口縁部ナデ　胴部縦ケズリ	
	7	〃	長胴甕	35.0	16.2	Ⅳ	口縁部一部欠	口縁部は外反する、なだらかに底部に至る	【内】輪積の痕鮮明【外】縦方向のケズリ	外面に二次焼成を受ける
	8	〃	長胴甕	22.0	24.6	Ⅳ	1/2	口縁部は強く外反する、胴部は直線を呈す	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	一部に二次焼成を受ける
	9	〃	長胴甕	35.5	21.9	Ⅴ	1/5	口縁部が狭く胴部はやや直線的、輪積み痕が一部残る	【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	
第22図	1	〃	筒状土製品	19.5	8.0	6～7世紀	ほぼ完形	上部が内湾し下位にかけ胴部は直線を呈す、底部の縁は平らに成形される	【外】胴部ヘラケズリ、輪積み痕残る	外面被熱による剥離
	2	〃	筒状土製品	38.5	7.6	6～7世紀	完形	底部を平らに調整する	【内】輪積み痕鮮明【外】縦方向のヘラケズリ	
	3	8H	坏	4.0	13.0	Ⅳ	完形	丸底、底部より緩やかに立ち上がる、上部の稜から口縁へ内湾する、口唇部は若干外反する	【内】口縁部ナデ 【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	外面一部剥落する
	4	〃	長胴甕	17.3	15.2	Ⅲ	1/2	口縁は若干外反し、底部なし　下位から緩やかに立ち上がる	【内】口縁部ナデ、輪積痕あり 【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	
	5	11H	長胴甕	11.5	18.6	6世紀	破片	口縁部は「く」の字状に外反する	【内】ナデ【外】口唇部丁寧なナデ､口縁部ナデ、ヘラケズリ	
	6	12H	坏	3.9	13.4	Ⅳ	2/3	丸底、中部に稜をもつ、底部より緩やかに立ち上がる、稜より口縁はやや内湾して立ち上がる	【内】棒状研磨痕、口縁と底部横ナデ 【外】底部ヘラケズリとタタキ、口縁横ナデ	内・外に二次焼成を受ける
	7	〃	高台付甕	3.5	8.0	5～6世紀	甕と高台の接続部のみ	底部に糸切り離し痕をもつ	【内】横ナデ、ヘラケズリ【外】横ナデ	
	8	〃	深鉢	—	—	縄文晩期	口縁部片	口縁上部に二段の把手をもつ、口縁部はやや内湾する	【外】横ナデを施す	
	9	〃	壺	5.5	19.6	6～7世紀	口辺1/3	口縁部わずかに外反する、胴部が膨らみ肩部は張り出す	【内】口縁に横ナデ【外】口縁と肩部にナデ	
	10	〃	石匙	—	—	縄文時代	完形	黒曜石	長3.80cm・幅5.14cm・厚0.91cm・重量11.51g	諏訪エリア
	11	〃	深鉢	—	—	黒浜式	胴部片	繊維質を多く含む	【外】胴部に縄文ＲＬを施す	
	12	〃	深鉢	—	—	加曽利Ｅ式	口縁部及び胴部片	口縁部に稜をもち、その下位にナデを施す	【外】胴部に縄文ＲＬを施す	
	13	〃	深鉢	—	—	阿玉代式	胴部片	口縁部に向け若干内湾し稜をもつ、胴部はすぼまり下位に至る、金雲母を含む	【外】胴部に縄文ＲＬを施す	
	14	〃	深鉢	—	—	加曽利Ｅ式	胴部片	焼成良好	【外】胴部に縄文ＲＬを施す	
	15	(13H)	坏	15.2	4.8	Ⅳ	1/2	丸底、中部に明確な稜をもつ、口縁部は内湾する	【内】口縁横ナデ 【外】口縁横ナデ、底部ヘラケズリ	内・外面全体に二次焼成を受ける
	16	〃	坏	4.0	6.7	Ⅳ	2/3	丸底、中部に明確な稜をもつ、口縁部は内湾する	【内】口縁横ナデ 【外】口縁横ナデ、底部ヘラケズリ	内・外面全体に二次焼成を受ける
	17	〃	長胴甕	22.6	11.3	Ⅳ	口辺1/5	わずかな稜をもつ、口縁部は強く外反する、ケイセキ含む	【内】口縁横ナデ 【外】口縁横ナデ、口縁と胴部境に強いケズリ	
	18	〃	深鉢	—	9.0	縄文中期	底部	平底、底面を研磨する、底部から胴部は緩やかに立ち上がる	—	
	19	〃	深鉢	—	—	称名寺式	胴部片	—	【外】縄文ＬＲを施し磨消	
第23図	1	14H	坏	4.1	11.2	Ⅴ	3/4	丸底、胴部は直線的に立ち上がり口縁部はやや内湾、ケイセキ含む	【内】棒状研磨痕、ケズリ【外】ヘラケズリ	
	2	〃	坏	4.3	13.9	Ⅳ	底部～口縁	丸底、中部に稜をもつ、口縁部はやや内湾し「く」の字状を呈す	【内】口縁部ナデ【外】口縁部わずかに外反しナデ、底部ヘラケズリ	内外面に一部黒色処理を施す
	3	〃	甕	8.5	5.1	—	底部	平底、底部特に厚く成形	【内】横ナデ、底部にヘラケズリ 【外】胴部ヘラケズリ、底部・胴部にタタキ	黒色処理を施す
	4	〃	提瓶	50.0	8.4	6世紀	口縁部	口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、平らに成形する下位に緩やかな稜をもつ、二重口縁	【内】【外】ナデ、一部に釉薬	
	5	〃	須恵器破片	3.5	3.0	—	破片	—	【内】ナデ、回転によるケズリ【外】波線紋	
	6	〃	須恵器蓋	4.1	11.2	—	口縁一部	口縁部短くわずかに外反する	【内】棒状研磨痕、ケズリ【外】右方向でヘラケズリ	
	7	〃	石錘	1.8	0.6	—	完形	黒色を呈す、円形	表面を滑らかに調整する	
	8	〃	石錘	2.6	1.2	—	完形	薄茶色を呈す、やや不整形な方形	表面を滑らかに調整する	
	9	〃	石錘	4.0	0.6	—	完形	灰色を呈す、やや不整形な方形	端部一部欠損、表面に摩耗が見られる	
	10	〃	土錘	—	—	—	完形	褐色を呈す、焼成良好	外面は滑らかにナデ調整が施される	

遺物観察表②

図版番号		住居番号	器種	高さ（残存高）	口径（残存径）	年代	残存率	成形の特徴等	調整の特徴等	備考
第23図	11	14H	臼玉	0.6	1.0	—	完形	断面は台形を呈す、中央に貫穴	—	貫穴付近にわずかに朱が見られる
	12	〃	石製臼玉	0.5	0.7	—	完形	中央に貫穴	—	
	13	〃	石鏃	—	—	縄文	—	チャート、一部欠損	長 1.98cm・幅 1.87cm・厚 0.40cm・重量 0.93g	
第24図	1	15H	坏	6.8	12.0	Ⅲ	1/3	下位に稜をもつ、底部から稜まで緩やかに立ち上がる、口縁はやや内湾する	【内】ナデ【外】ロクロによるケズリ痕	二次焼成を受ける
	2	〃	坏	4.3	12.6	Ⅳ	口縁部一部欠	丸底、口縁部は外反する、下位に弱い稜をもつ	【内】ナデ【外】ナデ、底部にヘラケズリ	
	3	〃	坏	4.0	14.4	Ⅳ	2/3	口縁部外反する、中部に稜をもつ、底部から口縁部にかけ緩やかに外反し立ち上がる	【内】ナデ【外】口縁部ナデ　底部ヘラケズリ	
	4	〃	坏	4.3	13.6	Ⅳ	3/4	中部に稜、底部一定方向にケズリ、底部から口縁にかけ緩やかに外反	【内】ナデ【外】口縁部ナデ	一部黒彩を施す
	5	〃	坏	4.2	14.4	Ⅳ	1/2	中部に稜をもつ、底部は粗いヘラケズリ、底部から口縁部は緩やかに外反し立ち上がる	【内】ナデ【外】口縁部ナデ	全体的に黒彩を施す
	6	〃	坏	3.5	13.6	Ⅳ	3/4	底部から稜まで緩やかに立ち上がる、稜から上部はわずかに内湾する	【内】ナデ【外】口縁部ナデ　底部ヘラケズリ	
	7	〃	坏	3.5	13.6	Ⅳ	4/5	丸底、底部から口縁部は緩やかに外反して立ち上がる、下位に稜をもつ	【内】ナデ【外】ナデ、底部にヘラケズリ	
	8	〃	坏	4.0	12.6	Ⅳ	3/4	底部から緩やかに立ち上がり、稜から若干垂直に立ち上がる	【内】ナデ【外】口縁部ナデ　底部ヘラケズリ	
	9	〃	坏	3.0	11.2	Ⅳ	口縁部一部欠	口縁部は外反する、下位に稜を持つ	【内】ナデ【外】底部ヘラケズリ、口縁部ナデ	一部黒彩を施す
	10	〃	坏	3.6	15.0	Ⅳ	4/5	底部から口縁へ緩やかに外反して立ち上がる、下位に稜をもつ	【内】ナデ【外】ナデ	
	11	〃	坏	4.0	15.6	Ⅳ	4/5	口縁部は外反する	【内】ナデ、薄く棒状研磨痕【外】ナデ	広範囲に二次焼成を受ける
	12	〃	坏	—	7.8	9世紀	底部破片	平底	【内】ロクロ成形による調整痕【外】糸切り痕	
	13	〃	器台	2.8	8.5	6世紀	脚部	脚部は折り返される、緩やかに立ち上がる	【内・外】ナデ	
	14	〃	提瓶	8.5	14.7	6世紀	1/2	中部に最大径をもつ、全体的に丸みを帯びる	【内】【外】ロクロ成形による調整痕	内・外一部に釉を施す
	15	〃	須恵器坏蓋	4.0	5.0	6～7世紀	完形	底部から緩やかに立ち上がる、口縁部は外反する	【内】ロクロ成形による調整痕 【外】底部糸切り痕、ナデ	
	16	〃	須恵器坏蓋	4.0	10.8	6～7世紀	完形	底部から緩やかに立ち上がる、口縁部は外反する	【内】ロクロ成形による調整痕 【外】底部糸切り痕、ナデ	
	17	〃	須恵器坏蓋	4.5	10.0	6～7世紀	完形	底部から緩やかに立ち上がる、口縁部は外反する	【内】ロクロ成形による調整痕 【外】底部糸切り痕、ナデ	
	18	〃	長胴甕	15.0	19.0	Ⅱ	甕口縁部2/5	口縁は緩く外反する、胴部にかけ緩やかに膨らむ	【内】ナデ、ヘラケズリ 【外】ナデ、ヘラケズリ、輪積み痕残る	
	19	〃	壺	6.8	12.0	Ⅲ	1/5	口縁部は外反する、下位に稜をもつ、胴部にかけ膨らみをもつ	【内】ナデ【外】ナデ、下から上にヘラケズリ	
第25図	1	〃	甑	18.5	33.5	Ⅱ	3/5	上部に最大径を持つ、下位にかけ緩やかにすぼまる	【内】ナデ【外】ナデ、ヘラケズリ、輪積み痕やや残る	一部被熱により黒色化
	2	〃	長胴甕	26.0	20.6	Ⅲ	ほぼ完形	口縁部は外反する、下位に向け緩やかにすぼむ	【内】ナデ【外】ナデ、縦にヘラケズリ	一部に二次焼成を受ける
	3	〃	長胴甕	10.5	19.0	Ⅳ	破片	口縁部は外反する	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	
	4	〃	長胴甕	30.5	22.0	Ⅴ	口縁部2/3	口唇部若干内湾し、口縁部にかけ「く」の字状を呈す　中部にかけ垂直に落ちる	【内】ナデ、ヘラケズリ 【外】ナデ、ヘラケズリ、輪積み痕残る	
	5	〃	長胴甕	32.5	21.5	Ⅳ	4/5	口縁部は「く」の字に外反する、下位にかけ若干すぼまる	【内】ナデ【外】ナデ、薄くヘラケズリ	
	6	〃	土玉	2.3	2.3	6～7世紀	完形	褐色を呈す、焼成良好、中央に貫穴、貫穴周辺には他に穴を穿った痕跡が見られる	外面には荒い調整が施される	
	7	〃	土玉	2.1	2.4	6～7世紀	完形	明褐色を呈す、焼成良好、中央に貫穴、形状はやや扁平	外面に丁寧な調整が施される	外面の一部に被熱を受けた痕跡あり
	8	〃	土玉	2.0	2.3	6～7世紀	1/2	明褐色を呈す、焼成良好、中央付近に貫穴の痕跡	外面にケズリの痕跡あり	
	9	〃	土製品	1.7	4.3	6～7世紀	完形	明褐色を呈す、中央部にくびれが見られる	—	円筒状
第26図	1	27H	坏	6.0	12.0	Ⅲ	口底部1/2欠	丸底、中部に稜をもつ、やや外反する、石英含む	【内】ヘラケズリ、黒色処理 【外】底部ヘラケズリ、口縁横ナデ	
	2	〃	坏	2.9	13.3	Ⅳ	完形	中部に弱い稜をもつ、雲母と角閃石含む	【外】底部ヘラケズリ、横ナデ、口縁部ナデ	
	3	〃	坏	3.5	13.3	Ⅳ	口縁部欠	底部から緩やかに立ち上がる、砂粒子含む	【内】底部にヘラケズリ時の押さえ痕、口縁横ナデ 【外】底部ヘラケズリ、口縁横ナデ	内面に二次焼成を受ける（スス）
	4	〃	坏	3.3	14.9	Ⅳ	口縁部欠	底部から緩やかに立ち上がる、砂粒子と角閃石含む	【内】底部ヘラケズリ時の押さえ痕、口縁横ナデ 【外】底部ヘラケズリ、口縁横ナデ	
	5	〃	坏	4.0	12.8	Ⅴ	完形	底部から緩やかに立ち上がる、口縁部内湾、白色粒子含む	【内】ナデ、棒状研磨痕 【外】ナデ、ヘラケズリ後研磨	内・外面口縁部に赤彩を施す
	6	〃	高坏	(5.5)	13.5	Ⅲ	脚部欠・口縁一部欠	脚部のみ、中部に稜をもつ、口縁部は外反する、軽石（やや多量）と石英含む	【内】棒状研磨痕、口縁部横ナデ 【外】底部ヘラケズリ、口縁部横ナデ	
	7	〃	坏	3.2	14.3	9世紀	1/2	底部から緩やかに立ち上がる、中部に弱い稜をもつ、チャート粒含む	【内】ナデ【外】ナデ、底部に右回転糸切痕	
	8	〃	土玉	1.9	2.1	—	完形	褐色を呈す、焼成良好、中央に貫穴、貫穴の径は両面で異なる	外面にケズリの痕跡あり	外面の一部に被熱の痕跡あり
	9	〃	土玉	2.1	2.1	—	完形	明褐色を呈す、焼成良好、中央付近に貫穴	—	
	10	16H	坏	5.0	14.1	7世紀	9/10	丸底、胴部緩やかに立ち上がる、ケイセキ含む	【内】口縁横ナデ【外】口縁横ナデ、ヘラケズリ	
	11	〃	坏	5.1	13.8	Ⅲ	1/2	丸底、中部に弱い稜をもつ、口縁部は強く外反する、ケイセキ含む	【内】口縁横ナデ、底部ヘラケズリ 【外】口縁ナデ	一部二次焼成を受ける
	12	〃	小形甕	7.4	6.0	Ⅱ	2/3	平底、肩部大きく張り出す、口縁部緩やかに外反する	【内】口縁横ナデ 【外】胴部及び底部にヘラケズリ、口縁横ナデ	一部二次焼成を受ける
	13	〃	甑	6.0	4.5	Ⅲ	底部のみ	底部を平らに成形する	【外】胴部縦方向ヘラケズリ	内・外面に二次焼成を受ける
	14	〃	小形甕	16.2	12.6	Ⅲ	2/3	平底、胴部緩やかに立ち上がる、口縁部短くわずかに外反する	【内】口縁横ナデ【外】口縁ヘラケズリ、胴下部タタキ、底ヘラケズリ	

遺物観察表③

図版番号		住居番号	器種	高さ(残存高)	口径(残存径)	年代	残存率	成形の特徴等	調整の特徴等	備考
第26図	15	16H	小形台付甕	9.0	—	—	底・胴部の一部	底部から胴部まで大きく緩やかに膨らみ立ち上がる	【外】胴部縦方向ヘラケズリ	
	16	〃	坏	4.2	13.2	9世紀	底部及び胴部1/4	平底、胴部直線的に立ち上がる	【内】横ナデ、ロクロ成形痕 【外】胴部・底部にヘラケズリ、口縁横ナデ	内面に二次焼成を受ける
	17	〃	坏	3.8	13.2	9世紀	1/3	平底、中部に弱い稜をもつ、胴部緩やかに立ち上がる	【内】口縁横ナデ【外】口縁ナデ、底部ヘラケズリ	
	18	〃	坏	—	—	9世紀	底部	—	底部回転糸切り	
	19	〃	坏	6.7	6.0	9世紀	底部3/4	平底、底部に回転糸切り痕（反時計回り）をもつ	【内】棒状研磨痕、ナデ、朱あり 【外】口縁ヘラケズリ	外面底に広く二次焼成を受ける
	20	〃	須恵器甕	6.8	—	7～8世紀	胴部の一部（破片）	ロクロ成形	【内】ロクロ成形痕残る、横ナデ 【外】ロクロ成形痕が明確に残る	
	21	〃	土玉	1.2	1.0	—	完形	橙褐色を呈す、貫穴をもつ	外面を滑らかに調整	
	22	〃	紡錘車	0.7	7.0	—	完形	明灰色を呈す、断面および底部を平らに調整する	底部にロクロによる調整痕（左回り）	須恵器坏の転用か
第27図	1	17H	坏	4.8	12.2	Ⅳ	完形	丸底、下位の稜から若干外反して立ち上がる	【内】ナデ 【外】口縁部ナデ　底部ヘラケズリ	
	2	〃	坏	4	11	Ⅳ	2/3	丸底、上部に明確な稜をもつ、底部から緩やかに立ち上がり稜から内湾する	【内】口縁部ナデ 【外】口縁部ナデ、一定方向にケズリ	
	3	〃	坏	4.5	12.6	Ⅳ	2/3	中部に緩い稜をもつ、底部から緩やかに内湾して立ち上がる	【内】口縁部ナデ、棒状研磨 【外】口縁部ナデ、ヘラナデ	
	4	〃	坏	4.5	10.6	Ⅳ	3/4	中部に緩い稜をもつ、底部から緩やかに立ち上がる、口唇部は若干外反する	【内】口縁部ナデ、棒状研磨 【外】口縁部ナデ、底部ヘラケズリ	
	5	〃	坏	3.5	6	Ⅳ	完形	丸底、底部から緩やかに立ち上がり中部の稜から若干内湾する	【内】口縁部ナデ、棒状研磨 【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	
	6	〃	坏	3.4	12.4	Ⅳ	口縁部一部欠	丸底、中部にわずかな稜をもつ、底部から緩やかに立ち上がる、口縁部は内湾する	【内】ナデ 【外】口縁部ナデ、一定方向にヘラケズリ	
	7	〃	坏	4.1	13	9世紀	完形	平底、上部にわずかな稜をもつ、底部から緩やかに外反し立ち上がる	【内】口縁部ナデ 【外】口縁部ナデ、ヘラナデ	
	8	〃	須恵器坏	8.0	—	9世紀	底部破片	ロクロ成形	【内】ナデ【外】回転によるケズリ　糸切り痕	
	9	〃	須恵器坏	5.0	13.0	5～6世紀	4/5	平底、底部から緩やかに立ち上がる、中部の明確な稜から内湾、口唇部やや外反する	【内】丁寧なナデ【外】胴部回転ケズリ、底部糸切り痕、口縁部丁寧なナデ	
	10	〃	施釉皿	2.7	13.6	中世以降	1/4	ロクロ成形、上部ほど釉が濃い	【内・外】施釉あり	釉は淡緑色、素地は淡褐色を呈す
	11	〃	高台付坏	4	7	6世紀	高台のみ	脚部から坏部にかけて「く」の字状に外反する	【内】丁寧な調整、脚部内側まで調整 【外】脚部のみナデ、内側まで調整	黒色処理を施す
	12	〃	高台付坏	6.3	15.5	9世紀	2/3	坏部は緩く外反して立ち上がる、脚部は若干「ハ」の字状を呈す	【内】丁寧なナデ 【外】丁寧なナデ、ヘラケズリ、高台内に調整	
	13	〃	須恵器高台付坏	6.0	14.4	9世紀	3/4	脚部はほぼ垂直に立つ、坏部は緩く内湾、口唇部はきつく外反する	【内】丁寧なナデ 【外】丁寧なナデ、底部糸切り痕、高台内調整	
	14	〃	高坏	10	9.4	Ⅲ	脚部のみ	焼成良好、ロクロ成形	【内】脚部ナデ 【外】脚部ナデ、ロクロ成形による調整痕あり	
	15	〃	須恵器高坏	10.5	10.3	5～6世紀	1/3	上部から下位にかけ広がる、下位は強く内湾する	【外】透かし状の成形が3ケ所	
	16	〃	小形甕	9.6	12.4	Ⅳ	1/4	口縁部は「く」の字状に外反、口唇部はやや内湾する	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	
	17	〃	壺	19	20	Ⅳ	1/3	胴部に最大径をもつ、口縁部は外反する	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	一部黒彩を施す
	18	〃	小形甕	13.5	14.4	Ⅳ	1/2	平底、胴部に最大径をもつ、上部にある稜から口縁部は外反する	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ、ヘラナデ	
	19	〃	長胴甕	16.0	35.8	Ⅳ	破片	口縁部弱く外反する、口縁から胴部はやや直線的	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ	
第28図	1	〃	甕	14.5	21.0	Ⅲ	破片	口縁部強く外反する、胴部に膨らみをもつ	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ	
	2	〃	長胴甕	17.6	17	Ⅳ	1/3	口縁部は外反し緩やかに下位に至る	【内】口縁部ナデ、ヘラケズリ 【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	
	3	〃	長胴甕	20	18.6	Ⅱ	1/4	口縁部は外反し緩やかに下位に至る	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	
	4	〃	石製臼玉	0.3	0.8	—	完形	暗褐色を呈す、中央部に貫穴	断面を平らに調整する、片面に押具による調整か	
	5	〃	土玉	2.2	2.5	—	完形	明褐色を呈す、形状はやや扁平、中央部に貫穴が見られ周辺に加工痕をもつ、貫穴は斜めに貫通する	—	
	6	〃	土玉	1.8	2.1	—	完形	明褐色を呈す、焼成良好、中央部に貫穴をもつ、貫穴はやや斜めに貫通する	表面を滑らかに調整する	
	7	〃	土錘	4.1	1.1	—	完形	灰褐色を呈す、焼成良好、片面中央部に穴をもつが貫通しない	表面の調整は荒い	未製品か
	8	〃	土錘	4.2	1.6	—	完形	明褐色を呈す、焼成良好、中央部に貫穴をもつ	—	
	9	〃	土錘	7.6	2.0	—	完形	明褐色を呈す、焼成良好、中央部に貫穴をもつ	—	先端部に朱が施される。
	10	〃	尖頭器	—	—	縄文時代	完形	黒色を呈す、チャート質	長7.73cm・幅3.25cm・厚1.35cm・重量42.3g	
	11	〃	石鏃	—	—	縄文時代	完形	黒曜石	長1.6cm・幅1.18cm・厚0.4cm・重量0.7g	諏訪エリア
	12	18H	深鉢	—	—	縄文中期	口縁部片	外面口縁部下および内面口縁部に稜をもつ、金雲母を含む	【内】口縁部ナデ 【外】口縁部に縄文ＬＲを施す	
	13	〃	土製品	—	—	—	破片	褐色を呈す、焼成良好	—	
	14	22H	高坏	(8.8)	—	Ⅳ	底部	長い脚部を持ち、浅い坏部へと立ち上がる。	【外】脚部ヘラ削り。底部ナデ	
	15	〃	長胴甕	(18.8)	17.2	Ⅱ	底部欠損	やや丸みをおびた胴部を持つ。	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	
	16	〃	石匙	—	—	縄文中期	一部欠損	チャート	長1.70cm・幅3.70cm・厚0.94cm・重量6.56g	
第29図	1	20H	坏	3.8	13.4	Ⅲ	2/3	中部に稜をもつ、口縁はやや外反する、細砂粒含む	【内】棒状研磨痕【外】ヘラケズリ	内面剥落が見られる
	2	〃	坏	3.8	12.0	Ⅳ	2/3	下位に稜をもつ、口縁は緩やかに外反する、白色粒子含む	【内】棒状研磨痕 【外】口縁部ナデ、底部ヘラケズリ	外面に黒色処理（焼成）を施す
	3	〃	坏	3.6	14.0	Ⅳ	口縁部欠	下位に稜をもつ、口縁は外反する、細砂粒含む	【内】ナデ【外】底と口縁部の一定方向にケズリ	
	4	〃	坏	3.6	14.0	Ⅳ	1/2	中部に稜をもつ、緩く内湾する、細砂粒含む	【内】棒状研磨痕、口縁部にケズリ 【外】一定方向にケズリ、ヘラナデ	
	5	〃	坏	3.7	12.0	Ⅳ	口縁部欠	下位に稜をもつ、口縁部は外反する、白色粒子含む	【外】一定方向にケズリ、ヘラナデ	内・外面に黒色処理を施す
	6	〃	坏	3.0	10.0	Ⅴ	2/3	口縁部は垂直に立ち上がる、白色粒子を含む	【内】棒状研磨痕 【外】口縁部を丁寧に研磨、底部ヘラケズリ	

遺物観察表④

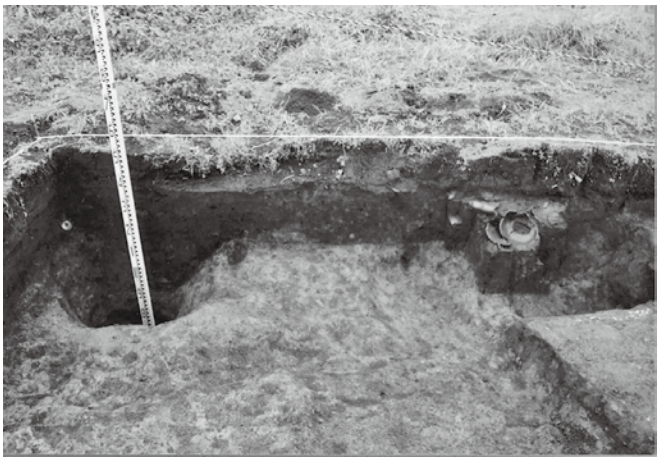
図版番号		住居番号	器種	高さ(残存高)	口径(残存径)	年代	残存率	成形の特徴等	調整の特徴等	備考
第29図	7	20H	高坏	4.8	12.0	Ⅱ	脚部1/3欠損	短い脚部は下位に裾部が広がる。口縁部は直線的に外反する、細砂粒含む	【内】口縁から底部までナデ 【外】坏部中部に稜、口縁ナデ	
	8	〃	鉢	9.3	13.2	—	口縁部欠	上部に緩い稜をもつ、口縁部は内湾する、細砂粒含む	【内・外】口縁部ナデ、胴部にヘラケズリ	
	9	〃	長胴甕	31.5	20.2	Ⅳ	口縁部欠	平底、中部に膨らみをもつ、胴部から底部にかけて緩やかにすぼまる、軽石粒含む	【内】口縁部ナデ 【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	内・外面に一部二次焼成を受ける
	10	〃	長胴甕	38.5	21.9	Ⅴ	口縁部欠	底部から口縁にかけて緩やかに膨らみをもつ、軽石粒含む	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ、口縁部に段をもつ	内面一部剥落する
	11	〃	長胴甕	39.3	21.0	Ⅴ	4/5	底部から緩やかに立ち上がる、口縁部は「く」の字状に外反	【内】口縁部ナデ 【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	
	12	〃	小形甕	17.0	14.0	Ⅲ	口縁部欠	中部に最大径をもつ、緩やかに底部に至る、白色粒子含む	【内】口縁部にナデ【外】口縁部に棒状工具による水平なナデ、経部にナデ	
	13	〃	高台付坏	7.0	14.0	9世紀	1/3	脚部「ハ」の字状、坏部は緩く立ち上がる	【外】丁寧なナデ、高台内部にも調整あり	
	14	〃	高台付坏	5.5	13.5	9世紀	2/3	脚部「ハ」の字状、坏部は緩く立ち上がる	【外】丁寧なナデ、高台内部にも調整あり	
	15	〃	須恵器甕	3.6	12.0	—	底部	底部から緩やかに立ち上がる、細砂粒含む	【内・外】一部に釉薬あり	底部との接合弱く、付近で割れ
	16	〃	土錘	—	—	—	1/3	明褐色を呈す、焼成良好、中央部に貫穴をもつ	—	
	17	〃	剥片	—	—	—	破片	チャート	長2.98cm・幅2.16cm・厚0.57cm・重量2.23g	
第30図	1	21H	坏	4.7	13.7	Ⅲ	完形	丸底、上部に稜をもつ、底部から緩やかに立ち上がり稜から口縁は内湾する	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ	
	2	〃	臼玉	0.15	0.7	—	完形	中央部に貫穴	断面を平らに調整する	
	3	〃	羽口	6.7	—	—	破片	胎土に小礫含む	—	
	4	〃	広口甕	32.0	23.9	Ⅲ	1/2	胴部に最大径をもつ、小さい径の底部より大きく膨らんで立ち上がる	【外】口縁部ナデ	
	5	〃	広口甕	37.5	30.9	Ⅳ	口縁部一部欠	平底、胴部に最大径をもち、底部より大きく膨らんで立ち上がる　口縁部は外反する	【内】口縁部ナデ、ヘラケズリ 【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	
	6	〃	広口甕	28.7	15.8	Ⅳ	2/3	胴部中央付近に最大径をもつ、口縁部は外反する	【内】口縁部ナデ、ヘラケズリ 【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	胴部に二次焼成を受ける
	7	〃	小形甕	21.0	14.0	Ⅳ	5/6	平底、底部からやや直線的に立ち上がる、口縁部は外反する	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ、輪積み痕が残る、縦方向にケズリ	全体的に二次焼成を受ける
	8	〃	長胴甕	22.5	23.0	Ⅲ	3/5	口縁部は短く緩やかに外反する	【内】口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ【外】口縁部ナデ、若干輪積み痕残る、胴部ヘラケズリ	二次焼成を受ける
第31図	1	〃	長胴甕	32.0	19.4	Ⅳ	5/6	平底、小さい径の底部より緩やかに立ち上がる、口縁部は外反する	【内】胴部に横方向のヘラケズリ 【外】口縁部ナデ、縦方向のヘラケズリ	二次焼成を受ける
	2	〃	長胴甕	34.6	18.0	Ⅳ	5/6	平底、径の小さい底部より緩やかに立ち上がる、口縁部は外反する	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ、胴部縦にケズリ、下部に横ケズリ	二次焼成を受ける
	3	〃	長胴甕	12.2	17.0	Ⅳ	口縁部1/4	口縁部は外反し、胴部は緩やかに立ち上がる	【内】口縁部ナデ、輪積み痕鮮明に残る 【外】口縁部ナデ、胴部ケズリ、胴部に当具痕残る	一部に強い二次焼成を受ける
	4	〃	長胴甕	12.5	16.1	Ⅳ	口縁部1/4	口縁部は外反し、胴部は緩やかに立ち上がる	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	
	5	29H	小形甕	3	5.2	—	底部	平底、底部から胴部は大きく膨らんで立ち上がる	【内・外】ヘラケズリ・ミガキ	
	6	30H	瓦	6.5	—	—	破片	内側に布目が見られる	【内】布目【外】ヘラケズリ	
	7	〃	丸瓦	12	7.0	—	表面一部剥離	明褐色を呈す	【内・外】ヘラケズリ	
第32図	1	31H	甕	8.8	6.6	—	底部	平底、胴部は緩やかに立ち上がる	【内・外】ヘラケズリ	
	2	〃	須恵器破片	4.3	—	—	破片	焼成良好	【内】ナデ【外】波状紋	
	3	〃	須恵器破片	7.8	—	—	破片	焼成良好	【外】タタキ	
	4	〃	土錘	5.4	1.3	—	—	明褐色を呈す、焼成良好、中央部に貫穴をもつ	—	
	5	32H	坏	4.0	12.4	Ⅳ	完形	中部に緩い稜をもち、やや外反して立ち上がる、細砂粒含む	【内・外】口縁部ナデ、底部ヘラケズリ	
	6	〃	坏	3.5	12.6	Ⅳ	2/3	下位に稜をもつ、底部から外反して立ち上がる、細砂粒含む	【内・外】口縁部ナデ、底部ヘラケズリ	黒色処理を施す
	7	〃	小形甕	16.0	14.0	Ⅳ	1/2	平底、底部から胴部は緩やかに立ち上がる、口縁は外反し胴部との境に段を持つ、金雲母を含む	【内】口縁部ナデ 【外】口縁部ナデ、胴部と底部にヘラケズリ、	
	8	〃	長胴瓶	17.1	21.6	Ⅳ	口縁～胴部の一部	胴部は垂直に立ち上がり、口縁部はきつく外反する、軽石粒・チャートを含む	【内】口縁部ナデ、わずかに輪積み痕残る 【外】口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ	
	9	〃	長胴甕	12.7	25.2	Ⅳ	口縁部1/3	胴部からなだらかに外反して口縁に至る	【内】口縁部ナデ 【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	
	10	〃	高杯脚部	4.9	—	—	破片	焼成良好	—	高坏等脚部破片か
	11	〃	堤瓶把手	4.3	—	—	破片	—	【外】ナデ	
	12	〃	深鉢	—	—	阿玉台式	口縁部片	口縁部は外反し稜をもつ、金雲母を含む	【外】棒状工具による縦・横への施文	
	13	調査区内表採	須恵器破片	—	—	—	破片	焼成良好	【内・外】タタキ	
	14	〃	須恵器破片	—	—	—	破片	焼成良好	【内・外】タタキ	
	15	〃	須恵器破片	—	—	—	破片	焼成良好	【内・外】タタキ	
	16	〃	須恵器破片	—	—	—	破片	焼成良好	【外】タタキ	
	17	〃	須恵器破片	—	—	—	破片	焼成良好	【外】タタキ	
	18	〃	須恵器破片	—	—	—	破片	焼成良好	【内・外】タタキ	
	19	〃	臼玉	13.0	—	—	完形	中央部に貫穴	—	
	20	〃	埴輪	81.4	93.0	5～6世紀	破片	焼成良好	【内】ナデ	
	21	〃	瓦	94.8	109.6	5～6世紀	破片	内側に布目が見られる	【内・外】タタキ	

写 真 図 版

１　重機による掘削

２　調査区全景（南より）

３　調査区完掘後全景（北より）



４　１号住居全景（東より）

５　１号住居内遺物出土状況（東より）

【写真図版２】

１　２号住居全景（北より）

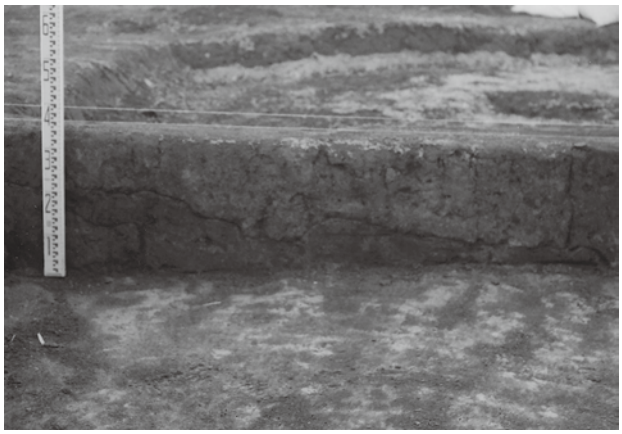
２　２号住居内焼土断面（東より）

３　３号住居全景（西より）

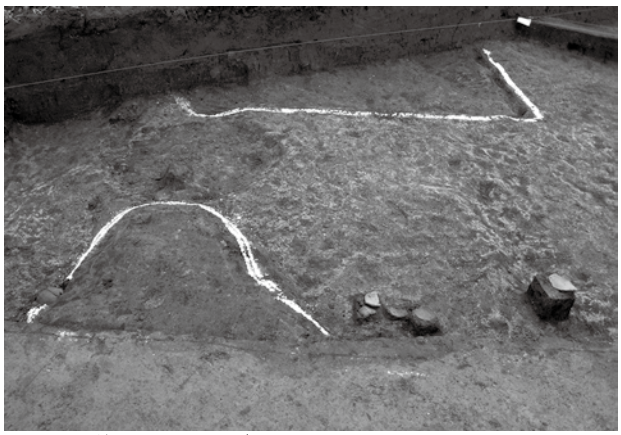
４　５号住居全景（西より）

５　６・24・26号住居全景（南より）

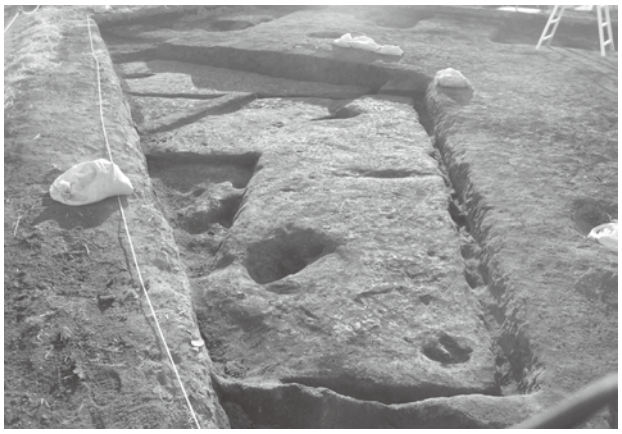
６　６・24・26号住居内焼土塊（南より）



７　６・24・26号住居内ベルト断面（南より）



８　24号住居内カマド（北より）


１　６・24・26号住居完掘後全景（北より）

２　６・24・26号住居完掘後全景（南より）

３　24号住居完掘後全景（西より）

４　８号住居完掘後全景（南より）

５　８号住居完掘後全景（北より）

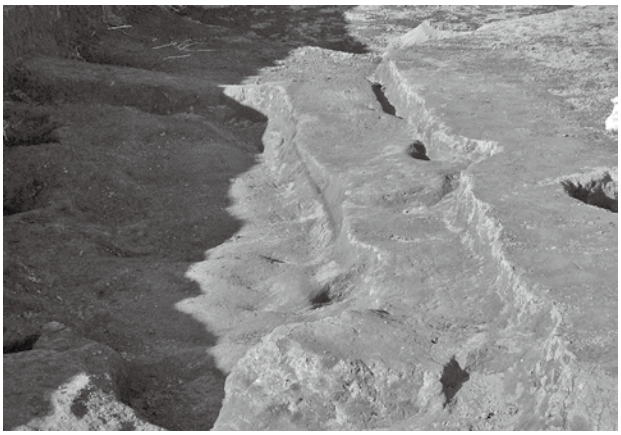
６　８号住居内カマド（北より）

７　８号住居内カマド（南より）

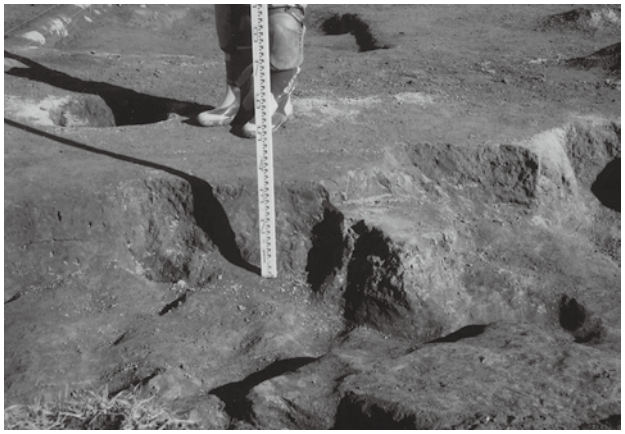
８　８号住居内カマド（西より）

【写真図版４】

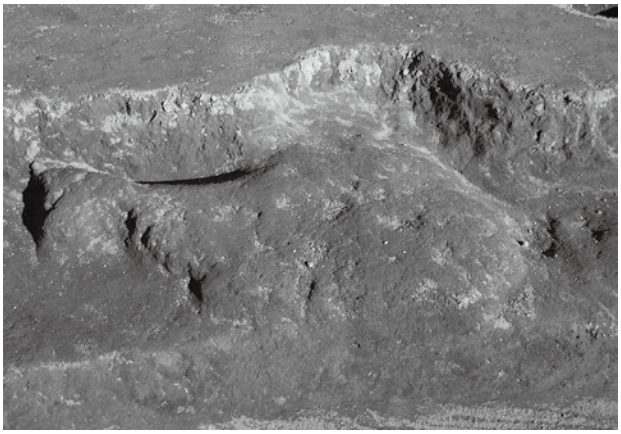
１　８号住居内カマド（東より）



２　９号住居全景（西より）



３　９号住居内粘土塊（西より）



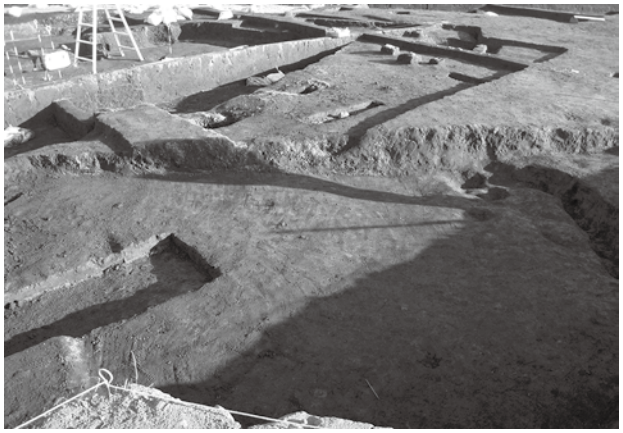
４　９号住居内焼土塊（西より）

５　９号住居内遺物出土状況（西より）

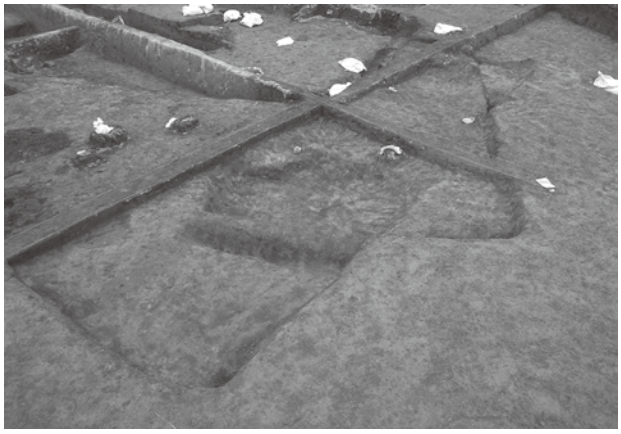
６　10号住居Ａ・Ｂ全景（南より）

７　10号住居Ａ全景（北より）

８　10号住居Ａ全景（東より）


１　10号住居Ｂ全景（西より）

２　10号住居Ｂ全景（南より）


３　11（一部）・12号（全景）住居全景（西より）

４　11（一部）・12号（全景）住居全景（東より）

５　11号住居（一部）全景（南より）

６　14号住居Ａ全景（北より）

７　14号住居Ａ内ベルト断面（東より）

８　14号住居Ａ内遺物出土状況（西より）

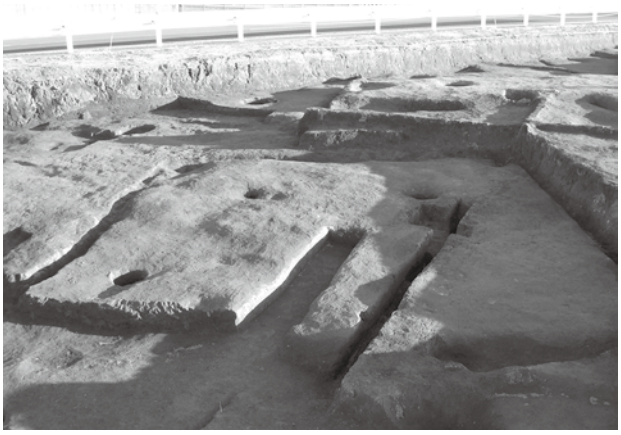
【写真図版６】

１　14号住居Ｂ全景（南より）

２　14号住居Ｂ内焼土（南より）

３　14号住居Ｂ内焼土（西より）

４　14号住居Ｂ完掘後全景（南より）



５　14号住居Ｂ完掘後全景（北より）

６　15・27・28号住居全景（南より）

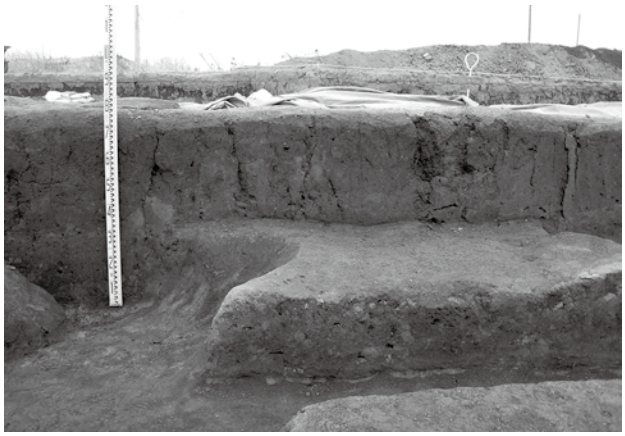
７　15・27・28号住居内サブトレンチ断面①

８　15・27・28号住居内サブトレンチ断面②

１ 15・27・28号住居サブトレンチ内
遺物出土状況（南より）

２ 15・27・28号住居サブトレンチ内
遺物出土状況（北より）

３ 15・27・28号住居サブトレンチ内
遺物出土状況（上方より）

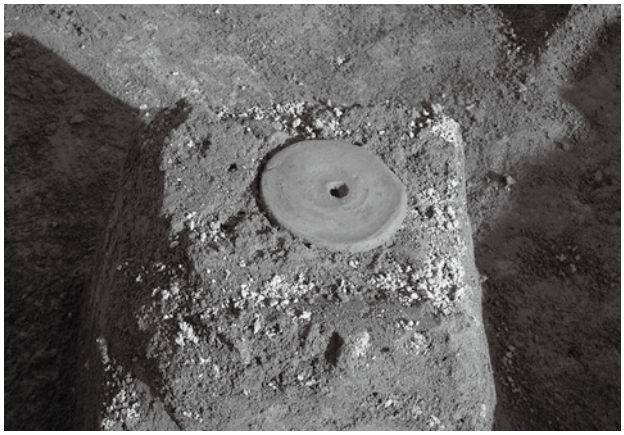


４ 15・27・28号住居内ベルト断面（東より）

５ 15・27・28号住居完掘後全景（南より）

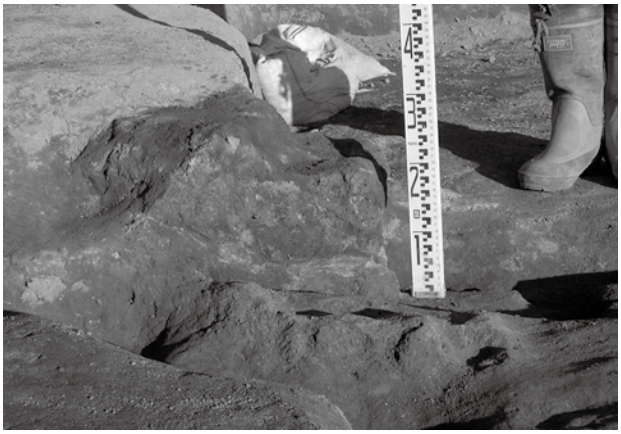
６ 16号住居Ａ全景（西より）

７ 16号住居Ａ全景（南より）



８ 16号住居Ａ遺物出土状況（紡錘車）

【写真図版８】

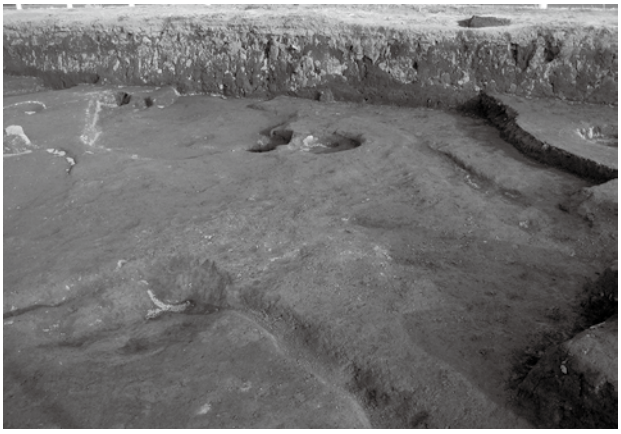


１　16号住居Ａ内カマド断面（西より）

２　17号住居群Ｉ・Ｈ全景（南より）

３　17号住居群Ｉ・Ｈ全景（北より）

４　17号住居群Ａ・Ｂ・Ｃ全景（北より）

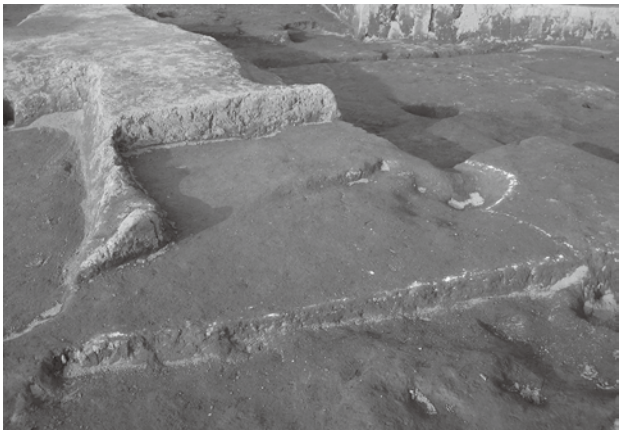


５　17号住居群Ｅ・Ｆ全景（西より）

６　17号住居群Ｇ全景（北より）

７　17号住居群Ａ全景（南より）

８　17号住居群Ａ内ベルト断面（北より）


１ 18号住居全景（南より）

２ 22号住居全景（北より）

３ 22号住居全景（西より）

４ 20号住居全景（南より）

５ 20号住居内ベルト断面（東より）

６ 20号住居内遺物出土状況（南より）

７ 20号住居内遺物出土状況（西より）

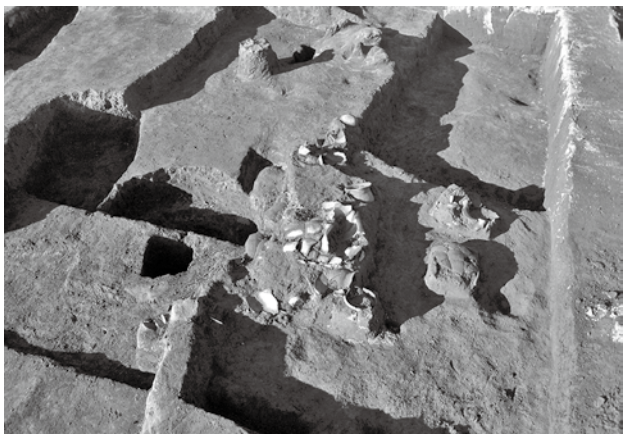
８ 20号住居内遺物出土状況（上方より）

【写真図版10】

１ 19・20号住居完掘後全景（南より）

２ 21号住居全景（西より）

３ 21号住居全景（北より）



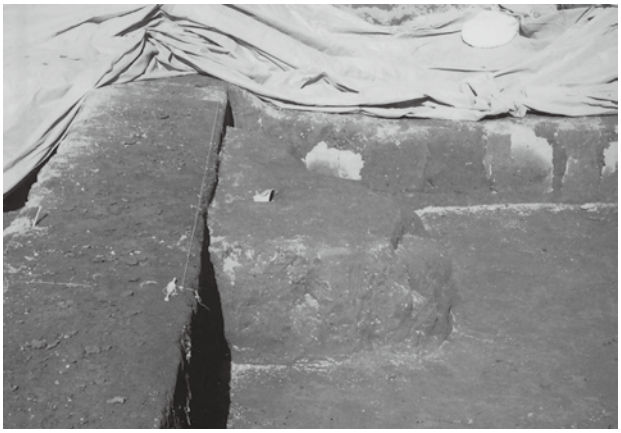
４ 21号住居内遺物出土状況（南より）

５ 21号住居内35土坑全景（西より）

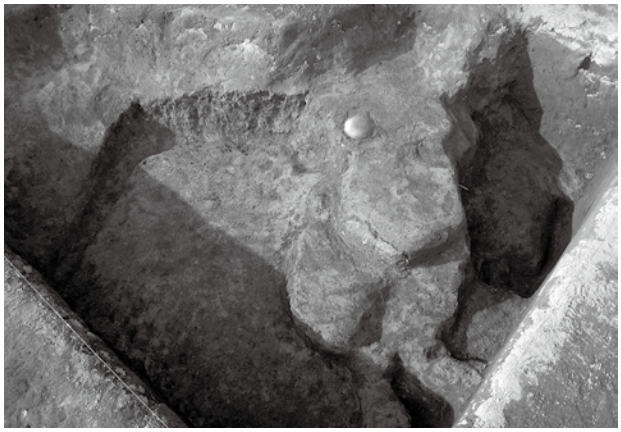
６ 21号住居内35土坑断面（北より）

７ 21号住居完掘後全景（北より）

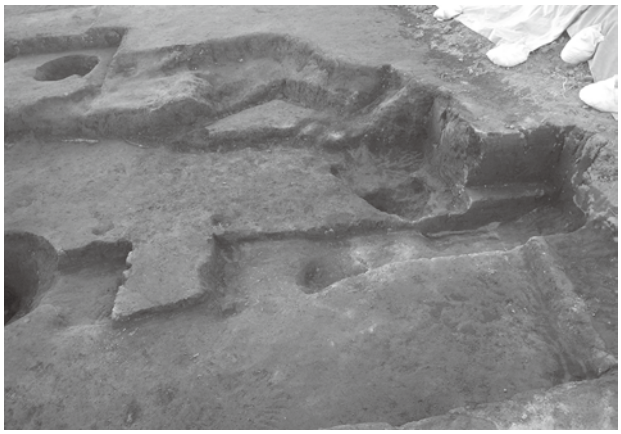
８ 29・30・32号住居作業風景（西より）


1　30号住居内粘土塊（南より）

2　30号住居内粘土塊断面（南より）

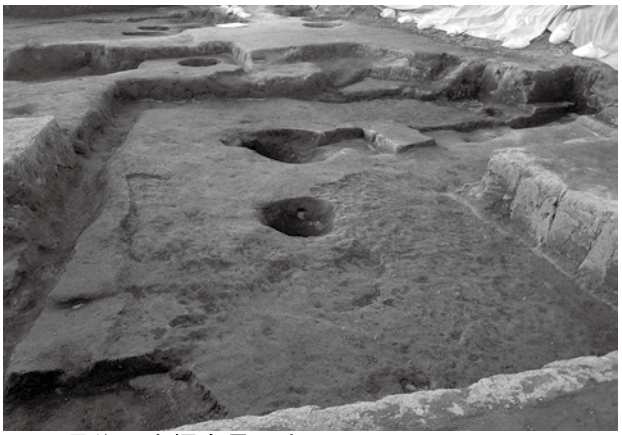

3　32号住居内カマド（東より）

4　32号住居内カマド（南より）


5　29・30・32号住居完掘全景（東より）

6　29・30・32号住居完掘全景（西より）

7　29・30・32号住居完掘全景（北より）


8　31号住居完掘全景（東より）

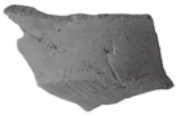
【写真図版12】

＜１号住居＞

＜２号住居＞

＜５号住居＞

＜６号住居＞



＜24号住居＞

(1/2)

＜11号住居＞

＜12号住居＞

(1/2)

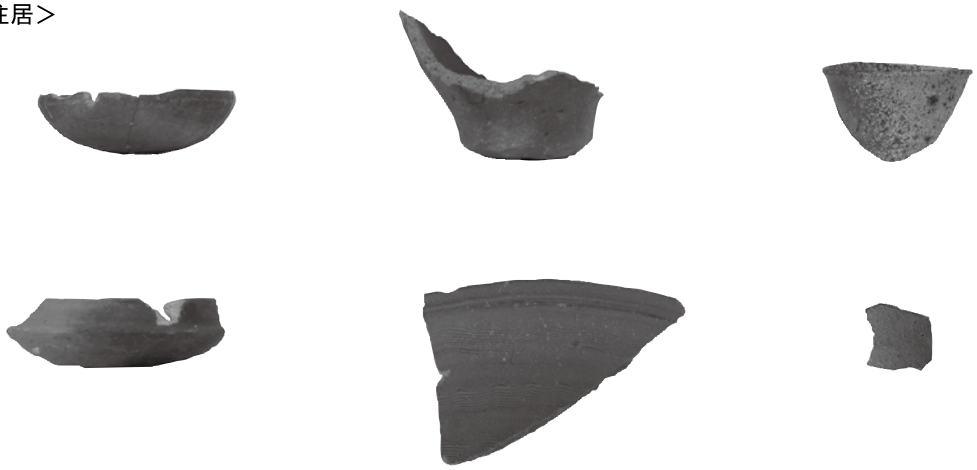
＜８号住居カマド＞

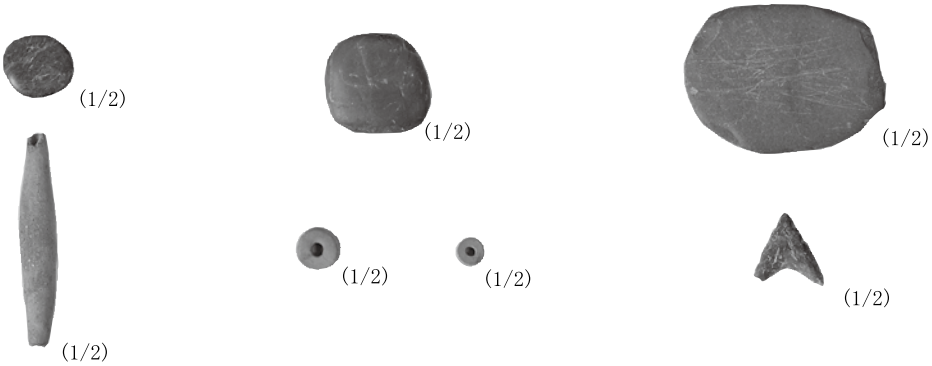
＜８号住居＞

【写真図版14】

（13号住居）

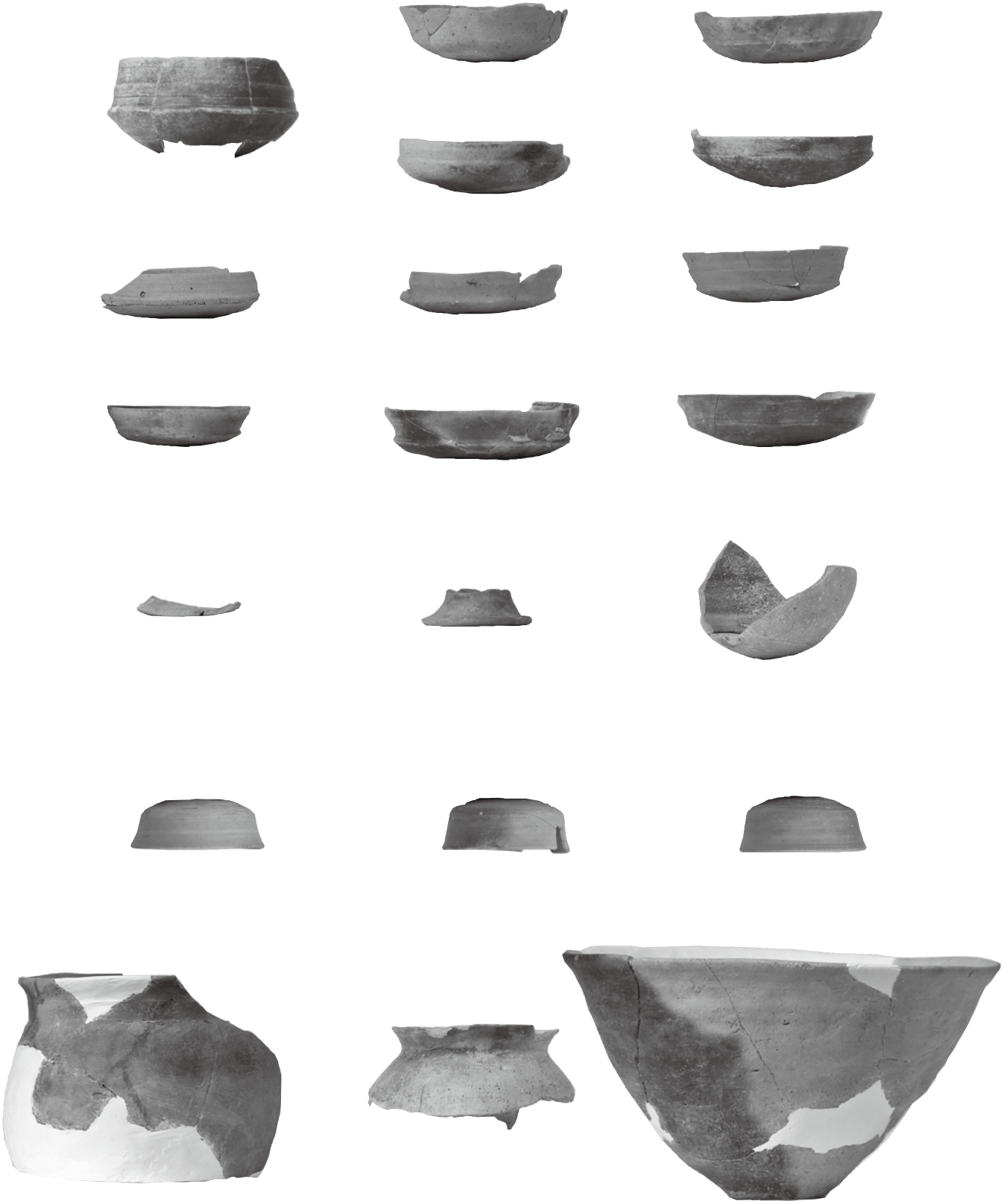
＜14号住居＞





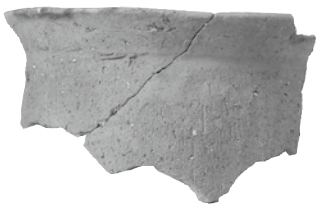
＜27号住居＞

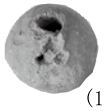
＜15号住居＞



【写真図版16】

＜15号住居＞





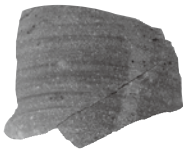
(1/2)

(1/2)

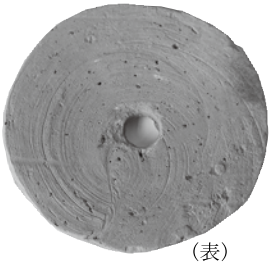
(1/2)

(1/2)

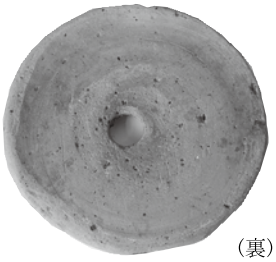
＜16号住居＞



(1/2)

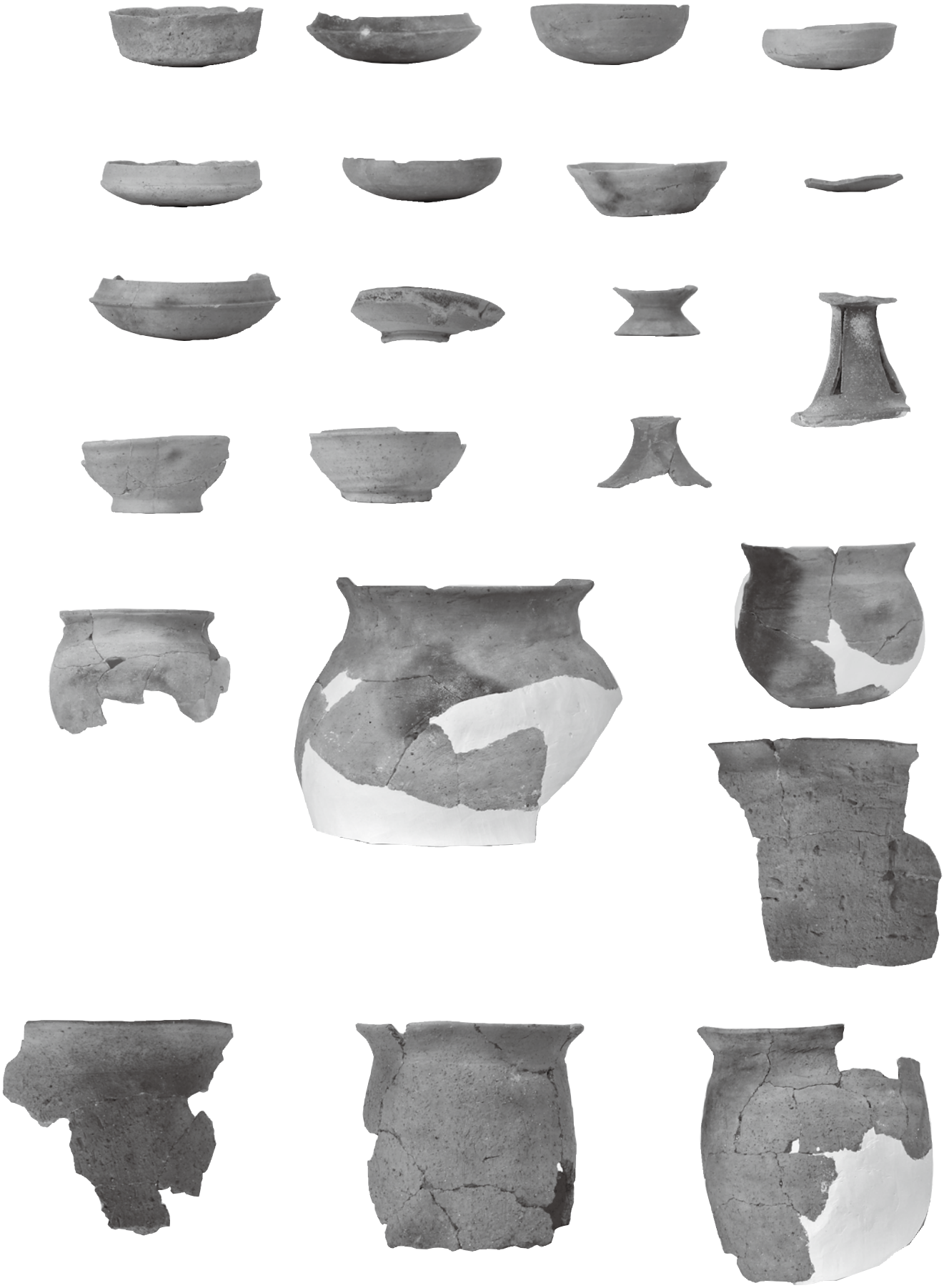


(表)



(裏)

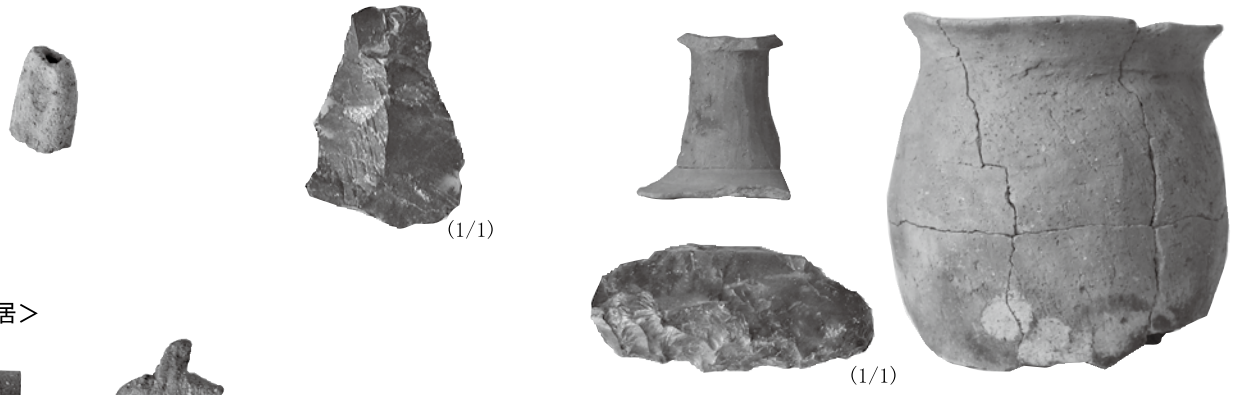
＜17号住居群＞



【写真図版18】

＜20号住居＞

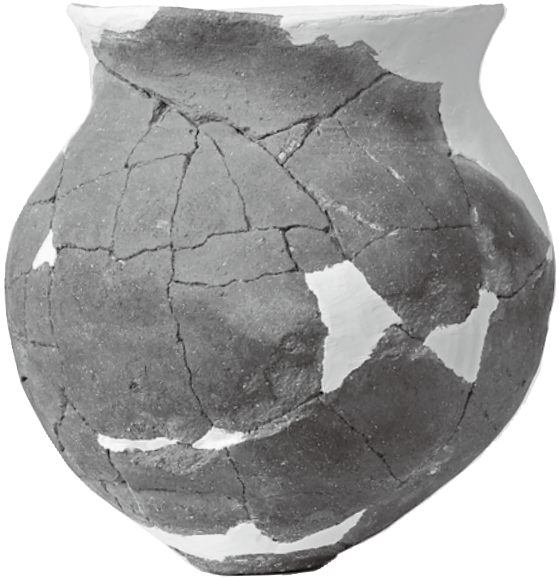
＜22号住居＞



＜18号住居＞

＜21号住居＞

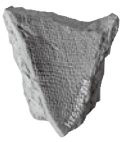
(1/2)



【写真図版20】

＜29号住居＞

＜30号住居＞



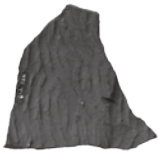
＜31号住居＞

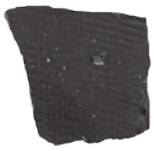
＜32号住居＞

(1/2)

(1/2)

＜調査区内表採＞





(刀子:1/1)

(鉄屑：1/2)

(種子:1/1)

抄　　録

ふりがな	とうごういせき		
書名	当郷遺跡		
副書名	市道3363号線(東部環状線)道路改良工事に伴う発掘調査	巻次	――――――
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書	シリーズ番号	第51集
編集者名	奈良　純一　　宮田　圭祐	編集機関	館林市教育委員会
編集機関所在地	〒374-8501　群馬県館林市城町1番1号		
発行年月日	2015（平成27）年1月31日		
市町村コード	102075		

所収遺跡	所在地	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
当郷遺跡	楠町字陣谷	83	361441	1393414	20131106～20140131	約450㎡	道路

遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
当郷遺跡	散布地	古墳、奈良、平安	住居跡35・土坑他	土師器（片）・須恵器（片）・石器・金属遺物・炭化材等	

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第51集

当郷遺跡

―市道 3363号線（東部環状線）道路改良工事に伴う発掘調査―

編集・発行　館林市教育委員会　文化振興課　文化財係（館林市文化会館内）
〒374-0018　群馬県館林市城町 3番 1号　電話0276-74-4111
印　　刷　上毎印刷工業株式会社
発行年月日　平成 27年 1 月31日

©Tatebayashi City Board of Education 2015 Printed in Japan